俺の不幸は蜜の味

ＮＡＴＳＵ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺の不幸は蜜の味

【Ｎコード】
Ｎ７９６２Ｗ

【作者名】
ＮＡＴＳＵ

【あらすじ】
「実はおまえには婚約者がいるんだ」――中学校を卒業した日、突然父にそう告げられる。しかもこれから通う栗子学園にその婚約者がいるという。人生初の彼女ＧＥＴに胸を躍らせ、いざ青春学園ライフへ！　と思いきや……その学園の生徒半分はなんと悪魔で淫魔だった！　そして狙われる童貞と処女！？　悪魔と悪魔を使役する者“悪魔使役士”の育成を目的とした栗子学園で繰り広げられる学園ラブコメ的ファンタジー。

(1)

「……で、話って？」

第二ボタンどころか、既に制服のすべてのボタンをはぎ取られている座覇輝十（ざはてるとと）は、だるそうに目の前の人物に問いかけた。

「……」

が、当人は今になって恥ずかしさがこみ上げてきたのか、俯いて黙り込んでしまう。

輝十は小さく溜息をつき、これから起こるであろう出来事への心構えをした。そして目の前で佇んでいる人物を眺めながら、ことさら何でもなさそうに振る舞い“その時”を待った。

廊下や他教室から聞こえる、数少ない生徒達の別れを告げる声や学校生活を懐かしむ声。

卒業式――義務教育を終えた日。

既にほとんどが解散し、今教室に残っているのは輝十含め二人だけだった。

「急に呼び出して……ごめん」

やっと口を開いたクラスメイト、いや元クラスメイトが申し訳なさそうに言うと、

「いや、まあ、別に……で、話って？」

輝十は検討がついている本題をさっさと切り出して欲しかった。そして早く終わらせたかったのである。

そもそも卒業式、誰もいない教室、そこに二人っきり……で、気付かない方がおかしい。

そんな少女漫画のような状況で胸が躍らない男なんていないはずだ。いるとしたら、日頃からモテ慣れている輩である。

しかし輝十は違う。胸が躍らない、ある特殊な理由を抱えていた。

「ざ、座覇くんのことが……座覇くんのことがっ、好きなんだ！」

腹の底から沸き上がる魂の叫びを、今こそ解き放たんとする。誰

が聞いてもそれは冗談ではなく、本気の告白だった。
輝十は、やっぱりか、という表情で頭を掻き、
「悪いけど俺はあんたと付き合えないし、好きになることも一生ないんで」
断るというより、説得するような、少しの期待も与えない言い方をする。
「だよね……覚悟はしてたよ。でも、でもっ！」
元クラスメイトは、真っ直ぐに輝十の瞳を見て言う。
自分は座覇輝十が好きだ、と。抑えきれない想いを、一生に一度かもしれないこの瞬間に込めて。
輝十はめんどくさそうに明後日の方向を向く。
こういう状況には慣れていた。彼女いない歴生きてきた年数にも関わらず、慣れていた。
輝十は決して美少年ではないし、イケメンでもない。女の子が黄色い声をあげる要因は見当たらない部類に入る。
しかしあるカテゴリーの人種にはモテるのだった。
「友達からでもいいんだ！　だめかな？」
「だめです」
即答されたことがよほど悔しくて、悲しかったのだろう。
「なんで……なんでなんだ……！」
懇願するように言う元クラスメイトに、輝十は現実を突きつけた。
「いやだって、あんた男だろ……」
そう、目の前で愛をしつこく語りかけてくる元クラスメイトは歴とした男なのである。ついている方です。
「心配いらないよ！　性別の壁なんて乗り越えてみせる！　そうさ、僕達だったらそんなこと容易いはずだよ！」
かつて柔道部の主将を務めていた彼は、自慢の太い腕に力こぶを作って見せる。
「いやいやいやいや！　乗り越えてどうすんだよ！　男同士で何をどうするっつーんだ！」

輝十は主将が目の前でポーズを極めている間に、教室を抜けだそうとして入口に向かうが、
「！」
右手首をごつごつした大きな手によって掴み取られてしまう。
「大丈夫だよ。僕がリードするからね。怖くなんて、ぜーんぜんないんだから」
でかい図体で裏声のような高い声を出し、冗談めいた言い方をしているが、右手首を握る手にはしっかりと力がこもっている。
ガチじゃねえかよ！
こういう状況に慣れているとはいえ、輝十は全力でひいていた。
「俺、おっぱい以外に興味ないんで」
こういう輩は下手に挑発してはいけない。輝十は努めて穏やかに断る。
「最初は痛いかもしれないけど、慣れるまでの辛抱だからね」
「人の話を聞けええええ！」
主将は掴んでいた右手を引っ張り、その勢いで輝十を壁に押しつけて逃げ場をなくす。
「おっぱいならあるよ、ほら」
「それはおっぱいじゃなくて胸筋っつーんだよ！」
筋肉質な胸を見せつける主将。
そして輝十のふとももにごつごつした手が忍び寄る。
「ひいっ……」
輝十はあまりの拒否反応に悲鳴をあげそうになった。
卒業式だからって穏やかにいくつもりだったが、さすがの俺も限界……！
相手は柔道部の元主将だ。身長も体格も同い年とは思えないほどの差があるし、力では敵うわけがない。
しかし輝十は交わすだけなら絶対の自信があった。
主将の顔が近づき、死も一緒に近づいてくる、その一瞬の隙を――
「輝十、いい加減帰ろうぜー」

「どんだけ待たせるつもりだよー」
つこうとした時、教室が開かれて二人の男子生徒が覗き込んだ。
輝十の友人、赤井と青井である。
「あ」
赤井が教室の入口付近の壁にて、とんでもない光景を発見する。
「ん？」
赤井の後ろから顔を出した青井が、赤井に続いてそのとんでもない光景を発見する。
赤井と青井は無言で顔を見合わせて、輝十に視線を移すと、
「「続きはどうぞごゆっくり」」
声を揃えて言うなり、二人は教室のドアを閉めた。
「助けんか、コラァァァァ！」
輝十は猫のように髪の毛を逆立てて叫んだ。
「ああもう！　攻撃は得意じゃないけど、しょうがねえな」
「つまり攻めがいいってこと？」
「ちげえよ！」
輝十は力の緩んだ一瞬の隙をついて、手を払いのけ、屈んで主将から体を離し、常人とは思えない素早さで背後に回って手刀で首を軽く叩いて気絶させた。

「あそこは助けろよ、おまえら！」
教室を出て、廊下で悠々と待機していた赤井と青井に向かって嘆く輝十。
「だって、輝十なら余裕でしょー」
「だよね、柔道部十人が襲ってきても逃げ切るよねー」
赤井と青井は顔を見合わせて、ねーねーと頷き合う。
「柔道部十人に襲われる状況とか考えたくねえ……」
輝十は寒気のする体をさすった。
赤井と青井の言う通り、輝十は柔道部十人程度なら余裕で難なく交わし、逃げることが出来る。

ずば抜けた身体能力――しかし交わす、避ける、逃げることに対してだけで喧嘩は決して強くはなかった。
貞操を守りきった輝十はほっと胸を撫で下ろし、乙女のような顔を……しているように見えたらしく、
「よかったね、処女守りきって」
「あ、やっぱり輝十って処女なんだ」
赤井と青井が含み笑いしながら他人事のように言う。
「処女って言うな！　そこは童貞だろ！」
「あ、やっぱり輝十って童貞なんだ」
「よかったね、童貞も守りきって」
「うるせえええええ！」
顔を真っ赤にする輝十を見て、赤井と青井はにやりと嫌な笑みを浮かべ、
「「図星か」」
声を揃えて、輝十を茶化す。
「しょ、しょうがねえだろ！　彼女いないんだから！」
照れくさそうに言う輝十を見て、赤井と青井は再び顔を見合わせる。
「あれだよなー」
「あれだよねー」
その表情そのものが、そういう人種にはたまらないものであるからにして。
「なんで男にモテるんだろ俺……」
輝十にとっては深刻な問題であり、大きなコンプレックスだった。
成長途中である身長は決して高い方とはいえなかったし、それに細身で童顔なのもあって、男に絶大な人気を誇っていた。
「男にっていうか、ホモに？」
「いやいや、輝十はノンケも魅了しちまうんだぜ」
遠い目をしている輝十を無視して、勝手に話を進める二人。
「俺はこんなにもおっぱいを愛しているのに……」

がっくりしている輝十の肩を赤井と青井が両側から、優しくぽんっと叩く。
「男にもおっぱいはあるしさ」
「そうだよ、もう彼女は諦めて彼氏にしたら？」
「うるせえええええ！」
げらげら笑う二人の手を払いのけ、走って逃げる二人を追いかける輝十。
赤井と青井は普段からこの調子で、だからこそ続けられる唯一の友人だった。
なんといっても性的な目で俺を見ねえ！　これ重要！
やたら男に好かれることを自覚している輝十は、男友達がいないに等しく、また自ら男に近づこうとも思わなかった。
女子にモテる瞬間というのがあり、それが悲しいことに自ら男に話しかけている時など、絡んでいる時だったからだ。腐女子いいいいい！
しかしそれも今日で終わりだ。もちろん完全に終われるとは思っていないが、それでも少し気が楽になる。
「でもおまえらと離れるのはやっぱ寂しいよな」
赤井と青井は足を止めて振り返った。
「「輝十……」」
毎日学校で顔を合わせていた彼らとは別の高校に進学することが決まっている。きっと今までのように会うことも出来なくなるだろう。互いに新しい高校で友達が出来れば尚更だ。
「なに言ってんだよ、家近いんだし」
「そうだよ、遊ぼうと思えば遊べるんだし。それに……」
赤井と青井は微笑みあって、その笑みを輝十に向けた。
「高校行っても輝十なら大丈夫だって」
「うんうん、すぐ出来るよ。新しい彼氏」
「そうだよな、ありが……って、おい。新しい彼氏ってなんだよ！
新しい彼氏って！」

赤井と青井が感動のシーンに持ち込むはずがなく、二人は笑いながら再び走り出し、輝十は文句言いながら追いかけた。
この日、座覇輝十は晴れて無事に中学校を卒業したのであった。
それが終わりの始まりだということに気付くことなく――。

（2）

「そこに座りなさい、輝十」
「は？」
家に帰ると卒業式から先に帰宅していた父が玄関で何故か正座していた。
「つーか、なにやってんだよ。んなとこで」
「いいから、座りなさい」
「……おい。今度はなにしやがった？」
輝十は知っている。自分の父がこんな真摯な顔つきをするような人間ではないこと、こういう時は何か裏があるに違いないということを。
「まさかまた店の金を女に使ったとか言わねえだろうな」
「それとこれは別だろう」
「図星じゃねえかよ！　てめえ！」
輝十は父の胸倉を掴んで上下に揺するが、父は余裕の薄ら笑いを浮かべるだけで悪いという認識はゼロのようである。
「あれほど店の金には手をつけるなと！　潰すつもりか！」
「かつて母は言っていた。男はいくつになっても女を追う生き物なのよ、と」
「もしかして母さんがいないのって、死んだんじゃなくて逃げられたんじゃねえだろうなおい！」
父は輝十の手を払いのけ、わざとらしく咳払いする。
「いいから、とりあえず座りなさいって」
輝十は父を睨み付けながら仕方なくその場で胡座をかいた。
西洋菓子店を営んでいる父からは、相変わらず甘い匂いが漂っていた。甘い匂いのするおっさんなんて気持ち悪いだけである。輝十は幸い母親似だ。
「改めて。卒業おめでとう、輝十」

「あ？　ああ、どうも」
「これから高校生になるおまえに話がある」
「女子高生紹介しろとか言ったら小麦粉詰めにするぞ」
「もちろんそれもあるが……それより先に話すことがあるんだよ」
不機嫌さを隠さない輝十は、胡座をかいた上に頬杖をついて完全に上の空だった。
こんなクソ親父の話なんぞ、まともに聞く方が損するに決まってる！
そんな無駄なことに時間を費やす必要ははない、と考えた輝十はとりあえずおっぱいについて考えることにする。
あの母性の象徴であるおっぱいというものは本当に素晴らしい。おっぱいが嫌いな男なんてこの世にはいないはずだ。巨乳派、美乳派、貧乳派……色々あるが、そんな派閥をつくること自体が馬鹿げている。おっぱいがある、それだけで素晴らしい。小さな膨らみも大きな膨らみもすべて同等に素晴らしいものなのだ。おっぱいに求められるものはその膨らみの存在であり、そこに弾力や柔らかさが加わるわけだが、それもみんな違ってみんないい。つまりおっぱいというものは、あの膨らみを見てわかるように揉む為に存在し、吸われる為に存在し、だからこ……、
「実はおまえには婚約者がいるんだ」
「……は？」
さすがの輝十もおっぱいのことは一旦忘れ、その言葉に反応を示した。
「フィアンセがいる、と言ってるんだよ」
「何言ってんだ、親父。あれか？　フィナンシェと同じ焼き菓子の類か？」
「うむ、それはフィアンセを焼き菓子のように食べたいという承諾と性的意識で間違いはないな？」
「どこをどう解釈したらそうなんだよ！」
輝十はがばっと立ち上がり、うんうんと頷いている父を見下ろし

て叫んだ。
　あまりの突然すぎる発言に輝十は理解出来ず、また父の頭が更にアレな感じになってしまったのかと疑わずにはいられない。
「婚約者、フィアンセ、つまり許嫁ってことだ」
「……いい奈良漬け、じゃなくて？」
「俺は生憎、たくあん派なのでな」
「聞いてねえよ！　つーか、どういうことなんだよ。なんだよ婚約者って！」
　父は腕を組んで呻りながら悩ましい顔をする。
「うーん、なんだと言われてもな。婚約者だとしか」
「勝手に決めてんじゃねえよ……」
　輝十は反論することに疲れたと言わんばかりに、その場で項垂れた。
「なんだ、好きな女でもいるのか？」
「べ、別にそういうんじゃねえよ。ただ勝手にんなこと決められて黙ってらんねえだろ！　俺は認めねえからな！」
「いいか、輝十」
　地団駄を踏んで子供のように怒りを露わにする輝十に、父は子を諭すような優しい口調で。
「こういうのを“運命”というのだよ」
「てめえが勝手に決めただけだろーが！　もっともっぽく言うんじゃねえよ！」
　父の胸倉を掴み、上下左右に思いっきり揺らす輝十。
「だってぇーどうしようもなくなーい？　助けたお礼におまえをやるって約束しちゃったんだしぃー」
「それが本音かてめえええええ！」
　揺さぶられすぎて目が回ったらしい父が玄関でぐったり倒れ込む。輝十は息を切らしながら親の敵を見るような目で親を上から睨み付けていた。
「まあとりあえず会ってみろって。同じ栗子学園（ぐりこがくえん）に入学することに

なってるから」
「……おい、それってもしかして」
父は玄関の床に這いつくばったまま、輝十から目を逸らしてわざとらしく口笛を吹く。
輝十は無言で父の腰を踏む準備に取りかかる。
「待って！　待つんだ！　腰は辞めるんだ！　俺のヘルニアが暴れ出す！」
父は亀がひっくり返るかのように仰向けになって、手を振りながら輝十に待ったをかける。
「とりあえず会うだけ会って見ろって！　妬類杏那（とるいあんな）っていうんだが、凄い美人なんだぞ？」
「へえ。で？」
「待って！　待つんだ！　腹は辞めるんだ！　俺の胃腸炎が暴れ出す！」
すぐ上まで落ちてきた輝十の足に抱きついて、父は必死に訴えかける。
「もしかしたらおまえ好みに成長してるかもしれないだろ？　後は自分の目で確かめればいい。おっぱいとかおっぱいとか、おっぱいを」
輝十は足を退けて、深い溜息をついて諦めた。
「親父が勝手に決めたんだ。俺は認めねえからな！　以上」
言って、輝十は部屋に向かう。
父はあたたた、と腰をさすりながら起き上がり、後ろ姿からでも苛立ちが感じ取れる輝十を見て苦笑いを浮かべた。
「運命、か。そうさせているのは俺か、それとも……」

輝十はいらいらしながら自分の部屋に戻り、必要以上に大きな音をたててドアを閉めた。
そして雪崩れ込むようにベットに寝転ぶ。
「なんだよ、婚約者って。何勝手に決めてんだよ、ふざけんじゃね

えええええ！」
怒りをぶつける相手がおらず、枕を抱きしめて寝返りを打つ。
この家には父と輝十しかない。母は他界し、姉は放浪癖があってほとんど家にはいなかった。実質二人暮らしである。
特にやりたいことも、夢もない、だからといって特に捜す気もない。
輝十は今時といえば、今時の学生だった。だからこそ進学先を決める時も学費を払ってくれるのは親だということもあって、父と担任に相談した結果、これから通うことになる栗子学園に決めたのである。
そこに婚約者がいる……だと？　どう考えても仕組んでたんじゃねえかよ！
そうとしか思えず、輝十は遺憾に思う。そもそもそういう父親なので、進路相談なんてした時点で間違っていたのかもしれない。
「妬類杏那……か」
もちろん輝十とて年頃の男の子である。人並みに彼女が欲しいだとか、彼女を脱がしたいとか、あわよくばこの聖なる童貞を捧げてしまいたい、とか思わないわけがなかった。
全く興味がないわけではない。婚約者として認めたわけじゃないし、すぐすぐ付き合うつもりにもなれない。
「美人かそうじゃないかなんて大した問題じゃねえ」
それでも輝十は思う。
「重要なのはおっぱいだろ、俺的に考えて」

（3）

少し早めに起きた輝十は、携帯を手にとりメールを開く。
「朝っぱらから暇だな、あいつら」
と、口では言いながらも自然と顔が綻び、緊張が幾分解れる。
そこには赤井と青井からいつもの調子で似たような内容のメールが届いていた。だから彼氏はいらねえよ！
赤井と青井は今日が入学式で、輝十も今日が入学式なのである。
輝十は携帯を閉じ、真新しい制服を見た。そしてそのまま制服を目の前で広げてひらひら揺らす。
中学が学ランだった輝十にとってブレザーは凄く新鮮だった。
白いブレザーの中は薄い灰色のカッターシャツで、襟に赤い五芒星の刺繍がある。そしてネクタイは黒で普通のネクタイより少し細めで長め。ネクタイにチェーンのようなものがついていたが、鬱陶しそうなので取り外しにかかる。
一見制服というよりは私服に近く、パンクやロックやゴシックという言葉が思い浮かびそうな制服だった。
制服に着替え終わり、居間に向かうと今起きたばかりの顔をした父が寝ぼけまなこで徘徊している。
「なにしてんだよ、親父」
「ん？　ああ、輝十か。おお、似合ってるじゃないか」
「目ぇ瞑って言うな、目ぇ瞑って！」
まあまあ、と目を擦りながら輝十の肩を叩く父。
「ちゃんと後で行くからな、入学式」
「はっ、別に来て欲しくもねえけどな」
輝十はそのまま玄関に向かい、真新しいローファーを履いて爪先をとんとん。
「なんだ、まだ昨日のこと怒ってるのか？」
「べっつにー」

嫌味っぽく言う輝十を父は急に笑みを消して真っ直ぐに見つめる。
「あまり親を舐めるなよ、輝十。おまえとはいつか向き合わなければいけないと思っていた」
「あ？　んだよ、急に真顔になりやがって」
「尻と太もも派の俺からすれば、おっぱいなんて乳くさいガキのおしゃぶりにすぎんと言っている」
「朝っぱらから何の話だよ！」
尻と太ももの肉感の良さなんぞ、おっさんにしかわかんねーよ！
と輝十は内心思ったが、ここでそれを言ってしまうと厄介なので飲み込んでおいた。これから入学式だというのに、くだらない争いで遅刻するわけにはいかないのである。
あーだこーだ言い続ける父を無視し、
「じゃ、俺行くから」
話をぶった切って家を出た。

電車で揺られ、輝十がやってきたのは櫻都市（サクラシティ）。栗子学園のある最寄り駅である。
たった十五分で街並みはがらりと変化し、都市という割には田舎街のような雰囲気である。都市の中心部にある山の上から下にかけて側面に住宅や店が建てられており、都会育ちには理解し難い光景となっている。
栗子学園もまた山の頂上付近にあり、櫻都市の中心になっているといっても過言ではない。
「はあぁ、広いな空」
駅に降り立った輝十の第一声である。
駅からでも見える大きな建物が恐らく栗子学園だろうことは、輝十も一目で理解した。
同じ制服をちらほら見かけ、ほっと胸を撫で下ろす。その後を追うようにして輝十は栗子学園を目指した。

「ど、どうなってやがる……はぁはぁ……」
それから十五分経っただろうか。膝に手を置いて肩を揺らす輝十の姿があった。
こんなに階段や坂道を登ったのは人生初である。
場所が場所なだけに、バスを使えばよかったのではないかと今になって輝十は思う。しかし平然と登っていく生徒達を見てしまっては、案外近いのではないかと思ってもおかしくはない。
おいおい、なんでみんな息切れしてねえんだよ！
自分を追い越して栗子学園の門を潜っていく生徒達は、汗はもちろん顔色一つ変えていない。もしかして体育会系の高校なのか？
と、気配を感じて後ろを振り返ると同じく息切れしている女子生徒を見かけて、輝十はほっとする。
しかも大辞典のようなでかくて重そうな分厚い本を抱えて、真っ黒なフード付のパーカーを着てフードまで被っている。いくらまだ肌寒い季節だからといって、この階段や坂道をその格好で登ってきたのなら息切れするのが当然だ。
呼吸が整ったところで、輝十も門を潜り、校舎をまじまじと見上げる。
私立でここまででかくて綺麗な校舎の高校といったら、それなりに金銭的余裕のある裕福な家庭しか思い浮かばない。
輝十の家が西洋菓子店を営んでいるといっても、こじんまりと常連客を中心にやっているようなもので、こんな金持ちの通いそうな高校に通う金があるとは思えなかった。
「俺のバックに金持ちのおっさんがいるとかじゃねえだろうな……」
あの親父ならやりかねん。俺の使用済みパンツとか写真付きで売りさばくぐらいのことはやってるのけるクズだ。
輝十が校舎に圧倒されている間に、次々と中に入っていく生徒達。
「はっ！　こんなとこで突っ立ってる場合じゃねえ」
慌てて流れに乗って校舎に入り、教室を見回っていく。

「俺のクラスはっと……あ、あれ？」
クラス替えは教室の前に張り出されているものだ、と思っていた輝十は拍子抜ける。
どの教室にも張り出されてはいないし、入口に戻って掲示板を確認したり、校舎を出て門付近をうろうろして見るがそれらしいものは何も発見出来なかった。
おかしいな……どうなってんだ？
輝十はわけがわからないまま、また人の流れに乗っかることにする。するとどうやら体育館ではなく講堂に向かっていることに気付いた。
入学式は講堂でやるのか？
右隣を通り過ぎていく女子生徒を横目で見てみる。わがままボディのとんでもない美人だった。
「申し分ねえ美しさだ。形的な意味で」
そしてまた左隣を通り過ぎていく女子生徒を横目で見てみる。これまた可愛らしい中に色香を隠し込んでいるような美少女だった。
「申し分ねえ可愛さだ。サイズ的な意味で」
もちろん双方の女子生徒は容姿端麗なのだが、輝十が見ているのは言わずもがな乳的な部分だけである。
そのおまけのような流れで顔を見て、輝十は疑問に思う。
やたら顔や体のいい女ばっかのような気がすんだが……気のせい、か？
共学ならクラスに一人や二人、学園に数人いてもおかしくはない。しかし先ほどから見かける女子生徒はやたらレベルが高いように思えるのだ。
「うーん……」
と、呻ったところで門で見た黒いパーカーの女子生徒を思い出して、その疑念を払い飛ばす。
モデルのように堂々と歩いていく美人さん達と違って、黒いパーカーの女子生徒は庶民臭がぷんぷんしていた。自分側の人間だと嗅

覚が言っている。
そんなことを考えているうちに輝十は講堂に辿り着いた。
西洋の教会堂を思わせる造りで、天井は高く、ステンドグラスから入り込む日差しが講堂内を神秘的に照らしている。
講堂は一階と二階があり、一階はステージ側を向いており、二階は向かい合わせになっていて一階が見下ろせるようになっていた。輝十達、新入生はもちろん主役として一階に、上級生は二階に座ることになっている。
特に指示もされていないし、そもそもクラスがわからないわけで、席は自由に座っていいのだろうと輝十は勝手に判断する。他の新入生も入った順に自由に座っているようだ。
もちろん輝十は好んで男の隣に座ったりなんかしない。それで太ももを撫でられた苦い体験や隣に座っただけでその男子生徒とかけ算されて「座覇くんマジ受け！」とかマジウケる！　なノリで腐女子にネタにされた辛い経験が数え切れないぐらいあるからだ。
嗚呼、思い出したくもねえぜ……。
しかし今のところお触り事件は勃発していない。もちろん油断は出来ないが、このまま出来るだけ平穏な学園生活になることを祈る輝十であった。
その神への願いは早々に受け入れられず――とっくに見放されていることに輝十は薄々気付いている。
「な、なんだ？　この視線はよ……」
誰が自分を見ているか、なんてわからない。だが確実に、しかも一人ではなく複数人が、自分のことを見ているのだ。
輝十は気持ち悪くなって、身震いしながらさっさと席につくことにする。
「あ、黒いパーカー！」
「……ひうっ！」
突然、輝十に声をかけられたあの黒いパーカーの女子生徒は小さく悲鳴をあげ、深々とフードを被って震えながら俯いてしまった。

「隣座ってもいいですか？」
「……」
「あ、あれ？　だめ？」
　再び声をかけるとびくぅ！　とギャグ漫画のように体を震わせた極端な反応を見せて、分厚い本で顔を隠したまま執拗に頷いて見せる。
「いやぁ、助かったわ。知り合いいねえし、やたら綺麗な人多いし。なんっつーの？　こう庶民的で親近感沸くっつーかよ」
　びくびくしながら首を縦に振り続けている黒いパーカーの女子生徒に、独りよがりで話しかける輝十。
　すっかり安心しきっているのか、自然とため口になる。
「俺、座覇輝十ってんだ。よろしく」
「……」
「あんた名前は？」
「……ひうっ！」
「ひうさん？　それ下の名前？　それとも名字？」
　額が太ももにくっつくぐらい俯いて首を左右に振る黒いパーカーの女子生徒。
　その異様な光景に一瞬固まる輝十だったが、これしきのことで引き下がっていては友達なんて作れるわけがない。
　少なくとも腐ったオーラが出ていないと俺の鳥肌レーダーが言っている。つまりちょっと変わり者っぽいが、普通の女の子ではあるわけだ。
「で、名前は？」
「なっ、なっ……夏地（なつち）、の、埜亞（のあ）」
「夏地埜亞（なつちのあ）？　のあ、か……」
　意味深にその名前を呟く輝十を見て、埜亞は何かいけないことを言ってしまったのではないかと慌てふためく。
「なにそんな慌ててんだよ。別にＡＶ女優みたいな名前だなって思ってないから安心しろって！」

本音が全く隠せていない輝十であった。

（4）

そんな一方的な会話を繰り広げていると、周囲のざわつきが増してきた。

上級生が二階席に埋まりつつあるのと同時に、まるで軍隊かのような機敏な動きで教師達が講堂に入ってきたのだ。

そしてその中で一際目立つ研究者のように白衣を纏った女教師が、ステージ脇のスタンドマイクの前に立つ。

「あーあー、マイクテストマイクテスト」

元から低いのか、あるいは酒焼けか。ハスキーな声が講堂内に響き渡る。

「静粛に」

その一言と揃ったらしい教師陣を見て、生徒達は口と閉じた。

「これより精霊式を行います。新入生は一列目から順にステージへ」

言って、女教師は他の教師にマイクを頼み、自らステージにあがる。その細身で長身のモデルのようなスタイルがステージにあがると、まるでファッションショーかと錯覚さえ起きる。

「な、精霊式ってなんだ？」

入学式のつもりで来ている輝十は精霊式の存在を把握していないのだ。小声で埜亞に問う。

「せっ、精霊の、儀式です」

本で顔を隠して答える埜亞。

「なんだ、その精霊の儀式って。俺まだ三十歳じゃないから魔法使えないんだけど」

「三十歳になると魔法が使えるんですか！？」

突然興奮を露わにした埜亞は、滑舌がよくなり、本で顔を隠すどころか顔を近づけて物凄い勢いで問い返す。

「い、いや、隠喩っつーか、なんっつーか……」

「魔法！　が！　使える！　んですか！？」

予想外の食いつきにさすがの輝十も驚いて返答に困る。しかし埜亞は食い下がろうとしない。
「クリスマスにカップルだらけの街を一人で歩いてもダメージを受けない魔法とか、色々……な」
「それはどうやったら使えるんですか！？」
「悪いな、三十歳以上の童貞にしか使えないんだ」
「そうなんですかぁ……」
本気でがっかりする埜亞に輝十はかける言葉が見当たらなかった。
ずっと本で顔を隠したり俯いたりしていたので見れないままだったが、やっと顔をあげてくれた埜亞。しかし……。
今時あんな牛乳瓶の底みてえな眼鏡どこで売ってんだよ。
せっかく見れた埜亞の顔だったが、大きくて分厚いぐるぐる眼鏡が顔の半分を占めていたのである。
「おまえ……もしかして普段はバンダナ頭に巻いて『～ござる！』とか言ってんじゃねえだろうな」
「ま、巻いて、ませんっ。いつ、いつも、被って、ます」
深々とフードを被って再び俯いてしまう埜亞。さっきの滑舌はどこいったんだよ！
「四列目、前へ」
と、あのハスキーボイスが耳に入る。
埜亞の興奮ポイントについて考えようとしていたら、輝十達の列の順番が回ってきてたのだ。
三十歳の高貴なる現代魔法使いについて話していたせいで、精霊式の内容を知らずままステージに向かうことになる。
ステージにあがると横一列に並ばされ、生徒側を向かされる。
なんだ？　一体なにが始まるっつーんだよ。
まるで見せ物のように、何か話すわけでも何か出し物をするわけでもない生徒達がステージで立たされている。
輝十は講堂に入ってきた時の、あの奇妙な視線を感じ取っていた。
もちろんステージに立っているのだから、視線を感じるのは当た

り前で自意識過剰じゃないとも言い切れない。しかし輝十の貞操保護レーダーが緊急指令を出している。おかしい、何かがおかしい、と。

後ろをちらちらと窺いながら、輝十は落ち着きのない様子で今から行われる精霊の儀式とやらを待った。

もしかして宗教色の強い高校なのか……？

そんな疑問は儀式開始と共に消え去ってしまう。

「なっ……！」

輝十は思わず声を漏らした。

なんと透明のスライムのような液体をあの女教師が生徒の頭にぶっかけていくのである。

ぶっかけるといってもほんの一滴で、大きなビーカーのようなものから頭部に垂れ流していく。

輝十は目を大きく見開いて、その光景から目が離せなかった。なんせ自分にもその順番が回ってくるのだから正気の沙汰ではない。

頭にかけられた液体は一瞬にして膨らみ、まるで生き物が口を大きく開いて丸呑みするかのように全身を覆ってしまった。

驚いている生徒、慌てている生徒、平常心を保っている生徒、十人十色の反応だ。

「では、次。座覇輝十」

女教師が名簿のようなもので名前を確認し、その名を呼んでビーカーを近づけてくる。

「返事がないな。座覇輝十」

「は、はい……」

元気に返事をしろと言う方が無理な話だ。

輝十の頭の中は今にもパニック寸前だった。が、現実は待ってくれるほど優しくはない。

「ひいっ！」

頭の液体をかけられた瞬間、目をぎゅっと瞑り、思いっきり息を吸って止める。一瞬にして体が液体に覆われた。

死ぬって！　死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬうううう！
「……あ、あれ？」
液体に体を覆われているにも関わらず、全く水の中に入っているような感覚がない。しかも呼吸も今まで通り出来るし、体を動かす分にも全く問題がない。違うことといえば、透明の膜が体を覆っているということだけ。
「そんなに慌てる必要はない。それは聖水をベースに悪魔にも対応出来るよう私が作った特殊な液体だからな」
自慢げな笑みを浮かべる女教師だったが、液体の中に入っている輝十にはその言葉が聞こえていない。
輝十が聞こえたのは、液体が弾けて消えた後に女教師が言った、
「黒か。どうやらこの列は黒率が高いな」
という、意味不明な台詞だった。
しかしその言葉の意味を輝十はすぐに理解する。
「なっ！　制服が真っ黒に！」
「だから今言っただろう。黒か、と」
人一倍いい反応を見せる輝十に女教師はわざわざ付け加えてやる。
どうやら液体の中に入ったことによって制服の色が変化したらしかった。今さっきまで真っ白だったブレザーが一瞬にして真っ黒に染め上げられている。
染まっているというより最初から黒だった、といった方がしっくりくる色合いだ。
一体どういう仕組みになってんだ？　そもそも液体が体を覆うこと自体普通じゃねえ。それで制服の色が変わるってのも理解出来ねえ。俺の体はリトマス紙かなんかなのか？
だったら中性ですね、ホモ的に考えて！　なんていう腐女子の突っ込みが聞こえてきそうで輝十は考えるのを辞めた。とりあえず制服が黒になった。それだけを受け止めることにしよう、と結論を出す。
「これが我に宿りし精霊の力か……！」

ちょっと頭がアレな感じで名台詞っぽく言う輝十に、
「そうなんですか！？」
また変なところで埜亞が食いついてきてしまった。
「いや、その、悪い。今のはちょっとしたノリで」
「精霊の力じゃないんですか……残念です……」
どうやらその手の話になると埜亞は滑舌がよくなるらしい。二度目にして輝十はなんとなく尻尾を掴んだ気持ちになった。
輝十達の列が無事終わったらしく、席に戻される。
なんだ？　精霊式って制服に色つけることだったのか？
「あ。埜亞ちゃんは白のままなんだな」
階段を降り、席に戻りながら前方を歩く埜亞を見て輝十が言う。
「はっ、はい。……くんは、黒、ですね」
「これってさ、色の違いになんか意味あんの？」
「へっ！？　も、もちろん、あり、ます。……くんは、ご存じじゃない、んですか？」
「ああ。俺さ、この学校のことなんもしらねえんだよな」
席に着き、一段落して輝十も気が緩んだのだろう。元々気は緩い方である。以降、ステージに目を向けるよりも私語に気を取られていた。
「つーか、俺の名前呼んでみて」
「はへっ！？　……くん」
「もう一回」
「ざ……くん」
「ちゃんと呼ばないとそのパーカーの下に隠された巨乳揉むぞ」
「！」
顔を真っ赤にして分厚い本を胸に抱きしめ、額が地面につくぐらい俯く埜亞。おまえ軟体動物かよ……体柔らかすぎだろ……。
「冗談だって。そんな警戒すんなよ。巨乳なのは当たってるだろうけどな」
「な、な、なっ……」

「はっ。なんでわかるかって？　おまえな、見ただけで女のスリーサイズ当てるのは紳士の嗜みだぜ？　俺はバスト特化型紳士だけどな」
自慢げに最低なことを言う輝十に、反論も攻撃もしない埜亞は完全に茹で上がっていた。
「わ、悪かったって……そこまでオーバーヒートすることねえだろ……」
輝十はここで最低だとか死ねだとか罵られ、謝って、ちょっと友情が深まるシーン……にするつもりだったのである。
しかし予想以上に純粋な反応を示してくれた埜亞から、罵倒なんてものは待ってもきそうになかった。

（5）

「話は戻るんだけどよ。そんでこの制服の色ってのは……」
と、輝十が本題に戻ろうとした時、起立という号令がかけられてうやむやになってしまった。
解散していく二階の上級生達を見る限り、精霊式とやらは終わりなのだろう。
なんだ？　上級生はわざわざ制服に色つくのを見にきたってことか？
「新入生、着席。これより組み分けキットを配布する。一列目から順に前へ」
どうやら今度はステージにはあがらないでいいようだ。ステージの前に並んだ教師達が小さな袋を新入生に渡していく。
それと同時に上級生がいなくなった二階と一階が真っ黒な遮光カーテンで閉め切られ、講堂内が一気に薄暗くなった。
「おい、今度はなにが起きるってんだ？」
埜亞に小声で問うと、
「く、組み分け、式、です」
おどおどしながら震えた声で答える。
薄暗い中でそんな喋り方をされるとホラーでしかなかった。
「組み分け式？　何回式やんだよ、ここの学校は」
「ひうっ！？」
もちろん埜亞相手に不満を言ったわけでも責めたわけでもなかったが、何故か埜亞は怯えていた。
四列目の番がきて、組み分けキットを貰った輝十は席に戻って首を傾げる。
「なんだよこれ」
それがごく普通の反応だ。
驚きも何もしない埜亞の反応が異常なのである。しかし気になっ

て周囲を見渡すと輝十のような反応をしている生徒は稀であった。
簡易的に透明の袋に入れられているのは、真っ黒な正方形の紙で、サイズは折り紙ぐらいだろうか。そして裁縫用にしては少し太めの金針。裁縫用ではない証拠に糸通しの穴が空いていない。そこに制服と同じ五芒星が掘られている。
「な、今度はこれで何すんだ？」
「へっ！？　たっ、多分、契約的、なこと、だと……お、思います」
「契約？　なんだそれ。入学手続きみたいなもんか？」
「そ、そう……です、ね」
「おまえ普通に喋れねえの？　おっ、おも、おもい……とか、吐息交じり辞めろって」
変なことにしてる気分になるだろ！　あ、いや別に悪い気はしねえんだけどよ。
「はぅあっ！？　ごっ、ごめ、ん、なさい……」
「……三十歳童貞の高貴なる現代魔法使いについて知りたいか？」
「知りたい！　凄く知りたいです！　教えてくれるんですか！？」
なんなのこのギャップ。萌え要素ゼロなんですけど。
どよーんとした重いオーラから、きゃっきゃした女の子らしいオーラに変わった埜亞は身を乗り出して輝十に迫る。
そんな埜亞を手の平で押しのけて、輝十は再びその組み分けキットを見た。
「行き渡ったようだな。では開封し、中の紙と針を取り出して下さい」
女教師の指示に従い、新入生達は一斉にキットを開けて紙と針を取り出す。
「開け終わったか？　では次に、その金針で左手の親指を刺し、紙に血を一滴でいいので垂らして下さい」
避けて通れないので仕方がないが、輝十は正直嫌だった。痛い思いをするのは精神的だけで充分である。
嫌々親指に刺し、血を紙に擦るようにして垂らした。

「後はその紙を各自終わるまで直視して下さい」
へ？　紙を見てろってことか？　血を垂らした黒い紙を眺めてろってどんなオカルト儀式だよ……。
そう思っていたのも束の間で。
「んなっ！？」
ただの真っ黒な紙だったそれが、火に炙られているかのように真っ赤な文字を浮かび上がらせていく。
輝十は激しく何度も瞬きをし、目をごしごし擦り、再び紙を眺める――が、それは幻覚でも見間違いでも何でもなかった。
それは現実だったのだ。
まるで呪いに使うような奇妙な記号が浮かび上がると、それは次第に日本語へ変換されていく。
「契約書？」
そう浮き出てきた下には“契約者名”として自分の名前が書かれており、校長印らしきものも浮かび上がっている。
やはり埜亜が言った“契約”というのは入学手続きのようなものだったのだろうか。しかしそうだとしても、こんなマジックじみた手続きがあっていいものだろうか。ここは一応国立の高校だったはずだ。
「契約……はっ！　もしやこれは！」
身を捧げる契約！？　あしながおじさんという名のロリコンショタコン変質者と交わす、奨学金と貞操の等価交換……。
輝十は想像しただけでもぶるぶるっと身震いがした。
だらしない体つきのショタコンババァならまだしも、俺の場合はぜってえショタコンの下劣なおっさんに決まっている。
この非現実的なシステムよりも輝十にとっては今後の自分の身の方が心配だった。
泣きたい気分で紙を再び見ると、
「……今度はなんだ？」
さっきまでの文字がすべて消えて、円状の小さな魔方陣のような

ものが書いてあった。その魔方陣の中心部には某お友達のマスクのような“目”があった。
目のマークの瞳は渦を巻いており、見ている人間の目を回してしまいそうだ。
輝十が気になってその“目”を覗き込むと、
「あだっ！」
コンタクトにゴミが入った時のような傷みを両目に感じ、目をぎゅっと閉じる。
チクリとした痛みは一瞬ですぐに消えた。コンタクトとは無縁の輝十は、目にゴミでも入ったのではないか、と涙を溜めて擦る。
「目にチクリとした痛みを感じれば完了だ。講堂を出る時に回収します」
その女教師の言葉が終わりを告げていた。
輝十ははっとあることを思い出し、目を擦りながら急いで隣を見る。
もしかしたら埜亞が眼鏡を外したのではないか、と考えたのだ。
「ひえっ！？　ど、どう、どうしました、か？」
視線に気付いたらしい埜亞は物凄い早さで眼鏡をかけ、残念ながら輝十はその姿を拝むことは出来なかった。
輝十の方を向いた彼女の顔は再び本に隠されている。おまえ映画泥棒の本バージョンかよ。
「各自クラスを確認後、休憩を挟んで入学式を行う。十一時までに体育館に集合するようにして下さい」
女教師のその言葉が解散の合図となり、起立・礼の流れを経て、新入生は一斉にざわつき始めた。背伸びするもの、周囲と会話するもの、その空気は入学式らしいものだった。
無知とは時として幸せである。しかしその反面、必ずいつかリスクを負うもだ。
輝十はまさか自分が今そういう状況だとは夢にも思わないだろう。

「クラスってどうやって確認すんだ？　な、埜亞ちゃ……あれ？」
隣にいたはずの埜亞は既に姿を消していた。解散と共に講堂を出たのだろうか。
「連れねえなぁ。でもま、そんなもんか」
やはり女の子は女の子同士がいいだろうし、と特に深くは気に留めなかった。同じ学年なのだ。何れまたどこかで会うだろう。
「ここで俺が『男の子は男の子同士がいいだろうし』って言うと超展開になるんだよな……どんなファンタジーだよ」
輝十の同性と腐女子への警戒心は、いつどこでもいかなる時も薄れることはない。
この場合、誰かに話しかけるのが妥当である。しかし輝十はその方法は選択しなかった。
あの不特定の視線がそうさせるのだ。
入学式初日で同性を魅了しても困るので、輝十は人の流れを観察しつつ、流れにのって校内に入ることにした。
一度クラス分けを確認する為に校内に入った輝十だったが、その時は“張り出されたクラス分けの紙”を捜すことだけを目的としていた。だから気付かなかったのである。
「うわっ！　な、なんだこれ！」
教室の出入り口に設置されたプレート。これは小学校や中学校でも存在したクラスや教室を現すものだが、なんとそれがすべて真っ黒なのだ。黒いプレートというだけならまだわかる。何の文字も掘られていないのだ。
しかし不思議と次第に文字が見えてくる教室もあった。
「……教員室？」
いわゆる職員室のことだろう。真っ黒なプレートに光のような文字で刻まれている。
プレートが見える教室、見えない教室があり、見えない教室の方が圧倒的に多かった。
階段を上り、恐らくここが新入生の階なのだろう。生徒が教室前

でうろうろしているのが見受けられた。
「あ！」
その中で唯一クラスが見えるプレートがあり、輝十は思わず走って教室に向かう。
「お！　？ー？って見える！　つーことは、ここのクラスだってことなのか？」
輝十が教室の入口でプレートを見上げると、
「ひやっ！？」
聞き覚えのある悲鳴が耳に入った。その声の主に目をやると、
「よ、また会ったな。もしかして埜亞ちゃんも？組なのか？」
同じくプレートを見ていた埜亞が輝十の存在に気付いて悲鳴をあげたのだった。
「そ、そう……です」
「へえ、同じクラスってわけだ。よろしくな」
「は、はっ、はあぁっ……」
返事をするのかくしゃみをするのかどっちかにしろよ、と突っ込みたくなったところで、
「……あ、あり？」
埜亞は踵を返して走って逃げていってしまった。
「俺、なんかしたっけ」
逃げるようなことをした覚えはなかった。スリーサイズ当てたり、おっぱい揉むぞって言ったぐらいで、何も覚えはなかった。

（6）

走っていく埜亞の後ろ姿を見て、困った顔で頭を掻く輝十。
その時、何者かに背中を突かれて反射的に振り返る。
「ね、きみ……もしかしてこの学校のことよくわかってなかったりする？」
「へ？」
突然話しかけてきた女子生徒は、人懐っこそうな笑みを浮かべて輝十に歩み寄る。
「プレート見て凄く驚いてたから。それにっ、精霊式の時もすっごく驚いてたよね」
「は、はぁ……」
そんなに目につく程、自分は驚いていたのだろうか。もちろん輝十にその自覚はない。
瞬間、周囲の視線を独占する。
輝十はぎょっとして、周囲を見渡した。
敵意のような視線と好奇心の塊のような視線を一気に受けた気がしたのだ。もちろん気がしただけで断定は出来ない。
なんだこの視線……。
それでも視線を集めてしまったのは事実で、輝十は目の前の女子生徒を改めて見た。
女子生徒は視線を気にした様子は全くない。にっこり笑い、後ろで手を組んで顔を近づけてくる。
「わからないことがあるなら、私でよかったら答えるよー？」
ハーフか何かだろうか。染めたとは思えない程、綺麗なブロンドの髪をしている。肩ぐらいの長さで緩くカールしており、まるで外国人の赤ちゃんのようだった。
「お、おう。ならお言葉に甘えよっかな」
しかし異様に顔が近く、輝十は体を反らして離れる。

F……いや、Gはあるんじゃねえか、これ。
もちろんバストの話である。輝十は思わず、そこにしか目がいかなかった。
むしろそこに目がいくように仕向けられていたのかもしれない。第一ボタンを開けているのがその証拠だ。
女子生徒は幼い顔立ちとは裏腹に、成熟しきった体つきをしていた。何より埜亞と違って自分が巨乳なのを自覚していて、そこを強調しているように思える。いわゆる武器として活用しているタイプだろう。
輝十はそこまで分析し、彼女の顔に視線を移した。
「私、瞑紅聖花（べいくせいか）っていうの。よろしくね」
「あ、ああ。俺は座覇輝十。よろしく」
「輝十くんは？組なんだよね？　残念だなぁ、私？組なの」
「そ、そうなんだ」
なんでこの女さっきから体が近いんだ……？
ぐいぐい近寄って話しかけてくる聖花に違和感と戸惑いを感じながら、輝十は一歩下がって体を離す。
もちろん聖花はそれに気付いており、それでもなお近づいていく。
おかしい。何かがおかしい。なんだこの感じ……。
輝十はこの嫌な感じを知っている。おっぱいを前にしてこんな気持ちになるはずがなく、何か物凄い裏があるような、そんな気配を動物的本能が感じ取っていたのである。
しかし輝十のおっぱい邪気眼によると、そのおっぱいは決して紛い物ではない。つまり彼女が“彼女”であることは間違いないのだ。
「ね、なにか知りたいこととかある？　わからないこととか」
「え、えーっと……あ！　制服！　この制服の色とか！」
輝十は自分の制服を掴んでひらひらさせながら問う。聖花は同じ黒い制服だった。
「これ？　これはね、生徒を白と黒で半々にわけてるの」
「半々？」

「そう。クラスも白と黒の半々で構成されるんだけどね。白と黒で互いに競争心を煽ったり、不祥事への対処をしやすくする為に儲けられた制度なの」
「へ、へえ……」
説明してくれるのは非常に有り難い輝十だったが、聖花の接近が次第に過剰になっていき、気付くと両手を握られている状態だった。
「これを生徒はオセロ制度って呼んでるみたい」
「そ、そのまま、なんだな」
輝十の声が思わず上擦ってしまう。
聖花は輝十の手をにゅぎゅっと握り締め、次第に指も絡めていく。
「あ、あのさ……さっきからなんかおかしくねえか。なんで俺、手を握られて……」
と、控えめに問おうとした時、聖花の顔が近づいてきて、輝十の動揺はピークに達した。
「へっ！？」
反射的に目を瞑ってしまうが唇を奪われることはなく、その代わりに耳元で吐息交じりの艶っぽい声が響いた。
「……いい匂い……凄く甘い蜜のような香りがするわ。こんなにそそる匂いは初めて」
まるでその匂いとやらに酔っているような言い草だった。
「に、匂い？　俺、香水とかつけてないんだけど」
もしかして家の匂いが制服についていたのだろうか。
そう思った矢先――
「うわっ！　今度はなんだ！？」
物凄いスピードで輝十に向かって黒い塊が突進してきて、まるで走り幅跳びをするかのように飛びかかってきたので、輝十は聖花の手を振り払って可憐に避けた。
すると避けられたせいで受け止め先がなく、ずずずずず、という鈍い音をたてて廊下を全身でスライディングしていく黒い塊。
勢いが収まり、輝十はその黒い塊に近づいてみる。

「……の、埜亞ちゃん？　なにやってんだおまえ」
そこには俯せで倒れ込んでいる埜亞の姿があった。
埜亞は名前を呼ばれ、びくぅ！　と反応を示して、むくっと起き上がり、制服を叩いてしわを伸ばす。
「だ、大丈夫か？」
あの物凄い勢いで飛んできたものは埜亞だったのだ。しかもあの勢いのまま床を滑ったとなれば、相当痛いはずである。
「も、問題、ない、です」
埜亞はとぼとぼと歩き、輝十の背後に立つ。
「え？　おい、どうした？」
輝十はわけがわからず、振り返って埜亞を見る。
「……も、問題、ない、です」
何が問題ないのだろうか。二回目の“問題ないです”の意味が輝十にはわからなかった。
「……なんなのあれ。めんどくさ」
輝十は頬を掻きながら、自分の背後から動こうとしない埜亞から聖花に視線を移す。
「え？　なんか言ったか？」
聖花は一瞬歪んだ表情を浮かべたが、その表情は輝十が目にする前に取り繕い、
「ううん、なにも言ってないよ。お友達来たみたいだし、私もう行くね。また後でねっ」
言って、聖花は美少女としかいいようのない顔に笑みを浮かべ、輝十に手を振った。
「なんだったんだあれ。一瞬のモテキみたいなもんか？」
あんな可愛くてでかいおっぱいの持ち主に声をかけられたというのに、どうしてこんなに胸が踊らないのだろうか。
輝十は不思議でならなかった。
「で。走って逃げたと思えば走って戻ってきやがって。おまえは一体なんなんだおい」

「ひえっ！？」
埜亞はまた本で顔を隠して、がくがく震える。
調子の狂った輝十は大きく溜息をつき、
「そんな怯えなくなっていいだろ。別にとって食いやしねえよ」
埜亞から視線を逸らした。
こういう態度をとられると自分が嫌われているのかもしれない、と思うものである。
「その、なんだ、もし俺が嫌ならそうはっきり言ってくれて構わねえからよ」
ちょっと変わっているとは思うが、輝十自身は埜亞を嫌ってはいない。苦手なタイプでもなかった。基本的にホモと腐女子以外なら友好関係を築こうとは思っているのである。
「せ、せっかく知り合ったんだし、俺は仲良くしたいと思ったんだけどよ」
輝十が頬を赤らめて、恥ずかしそうに言う。
我ながら何言ってんだと思うが、本音なので隠す必要もない。
さっきの聖花のような容姿の奴がやたら多い中で、妙に親近感を唯一抱いた人間だ。それにいい乳を持っている。仲良くしたいと思うのが人として、男として、当然だろう。
ぼんっ！　と大きな音を立てて、埜亞の手元から分厚い本が舞い落ちた。
「お、おい……？　本、落ちたぞ？」
本が落ちたというのに、本を持ったままの体勢で硬直している埜亞。それこそまるで魔法をかけられたかのようだった。
「お、おーい！　埜亞ちゃーん！」
輝十は目の前へ行き、目前で手を振ってみた。
それでも反応はなく、
「あ。あそこに三十歳童貞の……」
「高貴なる現代魔法使いさんですね！？」
あの話題を振ると予想通りいい反応が返ってきた。

「どこですか！？」
「あ、いや……」
「魔法使いさんはどこでしょうか！？」
本気で探し始めた埜亞になんといっていいか、輝十は困っている。
「わ、わりい。もういないみたいだ。見間違いだったのかもしんねえ」
「そう、ですか……」
そんなに本気でしゅんとすんなよ！　胸が痛むだろ！
また通常のどんよりオーラに戻ったところで、予想外にも埜亞が口を開く。
「あ、え、そ、その……」
「ん？」
埜亞はもじもじしながら輝十に何か聞いたそうにしている。
「そ、そのっ……あの……ぬわっ、仲良く、し、たいと、いう、のは……本当、ですか？」
「ああ、マジだぜ。んなことで嘘つくわけねえだろ」
「！」
埜亞は急に体を小刻みに震わし始める。
「お、おい……おまえ本当に大丈夫か」
「も、問題、ないです……！」
その返事は声が大きく、輝十が逆に驚かされた。
「ほ、本当に、ほん、本当、ですか？」
「仲良くしたいかってこと？」
埜亞が大きくこくんこくんと頷く。
「ああ、本当だよ。おまえのそのEカップに誓ったっていい」
「ひいっ！？　な、なぜ、なぜなぜ……」
「はっ。言っただろ？　見ただけで女のスリーサイズわかるって」
自慢げに言う輝十に埜亞は完全にオーバーヒートしていたが、どうしても気になったらしい質問を投げかける。
「もししかしてそれも魔法ですか！？」

「は？　あ、いや……うーん、魔法って言や魔法かもな」
「胸を見るだけで揉むことは出来ますか！？」
「出来たら苦労しねえよ！」
そんな魔法があれば俺は超無敵だっての！
埜亞が少しがっかりしていたが、輝十はわざとらしく咳払いして話を戻す。
「だから、その、なんだ。おまえが嫌じゃなかったら、まあ仲良くしようぜ」
「いい、んです、か……？」
「だーかーらー俺がいいっていってんだろ。もうちっと自信持てよ、Eカップ」
「ふえっ！？　は、はい、です……よ、よろしく、お願いしますっ」
フードを被っている上にぐるぐる眼鏡をかけているので、顔はもちろんよくわからない。
それでもかすかに緩んだ口元を見て、彼女が笑ったのだと輝十は気付いた。釣られて輝十からも笑みが零れる。
「って、おい！　そこまでお辞儀しなくていいだろ！」
次の瞬間、律儀にお辞儀してくれた埜亞だったが床に頭部がついていた。だからおまえば軟体動物かよ！

（7）

それから仲が急接近したということもなく、話しかけると所々悲鳴をあげるが毎回突っ込むのはやめた輝十である。

十一時が迫り、二人は体育館に向かうことにした。

「なげえんだなぁ、この学校。さっさと入学式終わらせろってんだ」

「せ、精霊式、く、組み分け式……入学式、の順番、で、行う決まり、みたい、です」

「へえ、なるほどな」

「さ、さん、三大式典、だ、そうです」

前情報なしに入学してきた輝十と違い、埜亞はしっかりと予習しているようだった。

これが恐らく“入りたくてこの学校を選んだ人間”と“なんとなくこの学校へ来た人間”の違いだろう。

「座覇……くんは、ど、どうして、この学校に、したんですか？」

「んーなんとなく？　親に勧められてかな。これといって行きたい高校もなかったし」

「なんとなく、です、か……」

埜亞は口元に手を置いて首を傾げる。手を口元に、といっても指先はすべてパーカーの袖で覆われていた。

体育館に着くと今度はクラスごとに男女別で座るようになっており、埜亞とは途中で別れて男子の席へ座る。

輝十が座るとすぐに隣の席が埋まった。誰が座るかで揉めているようだったが、そういう光景は中学時代から見慣れているので関与しないことにしている。

式が始まるまで、そう時間はかからなかった。

それから始まった入学式は中学の頃と何も変わらない、普通の入学式だった。保護者が参列し、校長らしき人物のつまらなくて長い話。

輝十は呆然とステージを見つめたまま、ブラジャーはワイヤー入りとワイヤーなしのどっちの方が魅力的かを考えることにした。
形を綺麗に見せるならワイヤー入り、自然な揺れを作り出すならワイヤーなし、おっとスポブラを忘れちゃいけねえ……と一人で脳内討論を行っていた、その時である。
新入生を代表して答辞を行うのは女子生徒だった。
輝十の意識がそちらに移行する。
ステージにあがっても全く物怖じしない、堂々とした態度。まさに代表として相応しいように感じる。
凛とした顔つきをしており、冷たい印象を受ける。クールビューティーというやつだろう、と輝十は新入生代表の胸元を見ながら思う。
長い髪の毛をハーフアップにしており、その毛先が丁度胸元にきていた。
「……なるほど、大きさより形を重視するタイプか」
手を口元にあて、まるで研究者のような面持ちと口ぶりで呟く輝十。しかし言っていることは所詮乳についてである。
いわゆる美乳というやつだろう。クールな顔立ちと非常にバランスがとれているな、と眺めている輝十は答辞自体は全く聞いていなかった。

入学式が終わり、また休憩を挟むことになった。軽いホームルームのようなものをクラスで行い、解散となるらしい。
輝十は埜亞と共に中庭のベンチに座っていた。
丁度桜が咲いており、新入生を祝福しているかのように桃色の雪を降らしている。
なんせ朝からわけのわからない式続きだ。特に回って見たい場所もなく、落ち着いて寛げる場所に行きたかったのである。
とは言え、中庭には他の生徒も多かった。

「し、新入生代表、の方、だんっ、だんとつで、成績トップだったらしい、です」
「え？　バストトップがなんだって？　別に色なんて気にしねえよ」
ベンチに大股開きで座り、背もたれに体を預けてだらけている輝十が言う。半分冗談のつもりだったが、埜亞には冗談が通じなかったようだ。
埜亞は分厚い本を開いて、その本に顔を挟んでマンドラコラのような悲鳴をあげている。こ、これはつっこんだ方がいいのか？
そんなくだらなくて平和な時間は、輝十にとって割と心地がよかったのだが、
「嘘ついてんじゃねえよ！　おまえに触られたって言ってんだよッ！」
男の怒声が響き、それは一気にぶち壊された。
「なんだなんだ？」
さすがに気になって輝十は座り直して体勢を整え、怒声のした方を向く。埜亞もその声に反応し、顔を本から開放した。
「おまえもしつこいな。だからピルプってのは嫌なんだ。感情的なくせに本能を理性で抑えて、いかにも綺麗な生き物かのように取り繕う」
輝十達から目と鼻の先、むしろ輝十達が座っているベンチが観客席なのではないかと思うぐらいの場所だ。
女子生徒に寄り添った男子生徒と男子生徒が対峙していた。
「うるさい！　いいから道子（みちこ）に謝れ！」
恐らく怒鳴っているのは隣で泣きそうな顔をしている女子生徒の彼氏なのだろう。男子生徒を睨み付け、彼女の肩を抱いてる。
「入学式早々に修羅場かよ……つーか、カップルで入学とかすげえな」
『一緒の高校に行こう』『うん頑張ろうね』なんていう会話を繰り広げながら切磋琢磨し、時には愛し合い、受験し、そして今ここにいる。

「俺はたった今あの怒鳴られている方の男子生徒を応援することにする」
「ひえっ！？」
埜亞が問いかけのような悲鳴のような声をあげ、男子生徒達と輝十を何度も交互に見た。
いやだって中学でもいちゃいちゃしてたくせに、高校でもいちゃいちゃしようなんて誰が許すんだよ。神が許しても俺は許さねえぞ。
「そもそも問題なのはどこを触ったかだ。尻と太ももはセーフ。おっぱいだとアウト」
「ふーん、なんでおっぱいだとアウトなの？」
「そりゃおまえ、俺が触りたいものを俺より先に触ったからに決まってんだろ！　……って、え？」
自然に会話していた輝十だったが、途中でおかしなことに気付く。
埜亞が食いつく内容ではないし、こんなに男っぽくて軽い口調で話すタイプではなかったはずだ。
そう思った矢先、気配に気付き隣を見る。
「そんなに触りたければ触ればいいじゃーん」
笑いながら言うその人物は真っ赤な髪をしていた。何よりも先にその髪の毛に目が奪われる。その色は某バスケット漫画主人公顔負けの目立ちっぷり。
「俺はあのカップルでも応援しようかな。ガチでやったら勝ち目ないだろうしねぇ」
「……つーか、誰？」
同じ黒い制服を着ている男子生徒がいつの間にか輝十の隣に座っていた。
「あー俺？　いやぁ、別に名乗るほどの者じゃないよ」
「いや、そこは名乗れよ！　同じ新入生だろ！」
何故か勿体つける男子生徒に思わず全力で突っ込む輝十。
男子生徒は必死になる輝十を横目に、小馬鹿にするように笑いながら、

「俺の名前ね、妬類杏那（とるいあんな）。とるいあんなだよ」

ガシャーン。

輝十の中で何かが壊れる音がした。

「ざ、座覇……くん？」

そのあまりの硬直っぷりに、さすがの埜亞も慌てて声をかける。

「もしかして自分に硬化魔法中ですか！？」

埜亞にそう思わせてしまう程、見事に固まってしまっていた輝十はショックのあまり息をしていない……かもしれない。

「お……お……おっ……」

息を吹き返したらしい輝十が呪詛のように小声で漏らす。

「お？」

「お、男だとおおおおおおおおお！？」

怒声をあげた男子生徒なんて目じゃないぐらいに輝十は絶叫した。あまりの声量に、ぱたぱたぱた、と木から鳥たちが飛び去っていく。

「えー？　うん、男だけどなに？」

「なにじゃねえよ！　ナニ持ってんじゃねえよ！」

「あんたよりいいの持ってる自信あるけどねぇ」

にやにや笑いながら茶化すように言う杏那に苛立ちが募っていく輝十。

「おいてめえ！　ふざけんじゃねえよ！　なんで男なんだよ！　なんっで男が婚約者なんだよ！」

我慢出来ずに胸倉を掴んだ。

「婚約者？」

杏那が首を傾げた、その瞬間だった。

「イヤァァァァァァァァッ！」
女子生徒の断末魔の叫びが聞こえて、輝十は杏那の胸倉を掴んだまま、杏那は輝十に掴まれたまま、二人は揃って声のする方を見た。
そこにはさっきまで責められていた男子生徒が、彼氏の首を鷲掴みにしている異様な光景が広がっていた。
彼氏の足は宙に浮いている。
「お、おい……なんだよあれ……やばいんじゃねえか？」
「死ぬね、あのままだと」
一気に怒りが冷め、輝十の顔が青ざめていく。
周囲にいる生徒達も身をひいて、その光景を怯えて見ている……かと思いきや口元に笑みを刻んでいる者もいる。
輝十はその異常な雰囲気を肌で感じ、ここで初めてこの学園が普通じゃないのではないか、と考えた。

（8）

「死ぬね、じゃねえよ！　なに冷静に言ってんだよ！　なんとかしろ！」
「もう、さっきから何でそんな怒鳴ってばっかなの？　欲求不満なの？」
言って、杏那はわざとらしく手の平をぽんっと拳で叩き、
「あ、ごっめーん。きみ、童貞だったね。そりゃ欲求不満だよねっ！」
「て、てめえ……」
こんな状況でもけらけら笑いながら輝十を茶化す。
輝十の怒りのゲージが急上昇し、もう目盛りいっぱいではち切れそうになる。
「こんな時に怒っててていいのー？　彼、死んじゃうよ？」
杏那は彼氏を指し、首を可愛く傾げて見せる。
改めて視線を送ると一刻を争う状況が繰り広げられている。
もちろん輝十はどうにかしてやりたい一心だった。目の前で起きている状況だ、見過ごすわけにはいかない。
しかしだからといって、片手で人間を持ち上げるような奴だ。ここで飛び込んで勝てる相手だとも思わない。
そこまで冷静に考え、出ない結論の苛立ちを八つ当たりするかのように、
「だーかーらーおまえがなんとかしろよ！」
「えーなにその無茶ぶり」
胸倉を掴んだまま、杏那を上下に激しく揺さぶる。
「ざ、座覇……くん！」
埜亞が輝十の制服の裾を引っ張る。
埜亞はその状況を怯えながら見ており、まるで自分が助けを求めるかのように輝十の名を口にした。

「あああああもう！　俺が行きゃいいんだろ行きゃ！」
輝十は杏那から手を離し、両手でわしゃわしゃと頭を掻きむしって立ち上がる。
「助けに行くんだ？」
「ああ。てめえが行かねえっつーんだから仕方ねえだろ。放ってはおけねえ」
「ふーん」
埜亞と杏那に背を向け、一歩歩み出た輝十に、
「ちょーっと待った」
再び声をかける杏那。
「あ？　んだよ、こういうのは勢いが大事なんだから声かけんじゃねえよ！」
輝十だって怖くないわけがない。しかし一度言い出したことだ。男である以上、後には退けない。
そう思っていた時、
「じゃあ、少しだけ力貸してあげるよ」
「は？」
杏那はすっと立ち上がって、輝十の両手を握り締め、
「おいてめえ！　こんな時に何しやがっ……」
「せーのっ！」
「！？」
そのままままるで大きなブーメランを投げるかのように、輝十を男子生徒へ向けて投げ飛ばした。
「うぎゃぁあああああああああッ！」
まるで自分が戦闘ロケットになったかのような気分で、頭から男子生徒に向けて物凄いスピードで加速しながら飛んでいく。
んだよ、これ！　なんで俺が飛んでんだよ！
そう思ったのも束の間、すぐに目前に彼氏の首を絞める男子生徒が迫る。
輝十はそのまま前転し、足先を男子生徒へ向けてこの加速を利用

し――
「辞めろおおおおおおおおッ！」
「！」
男子生徒の肋骨辺りに思いっきり蹴りをかました。
男子生徒は吹っ飛んで校舎の壁に叩き付けられ、輝十は大木を両手で掴み、木の周りを一周して減速させ、軽く飛んで無事に着地する。
輝十の身体能力あってこそ成せる技だった。
「……あの赤髪、なんてことしやがる」
振り返ると男子生徒が叩き付けられた壁は、円状にくっきりひびが入っている。複雑骨折していてもおかしくない。
「だ、だっ、大丈夫、ですか！？」
心配した埜亜が息を切らして輝十の元へ駆け寄った。
「あんた運動神経いいねぇ。普通の人間だったら一緒に壁に叩き付けられてるよ」
「てめえ……！」
杏那は手を叩きながら輝十に近寄り、わざとらしい賞賛の言葉を捧げると、そのまま男子生徒の所へ歩いていく。
片手で人間を持ち上げる男子生徒もだが、あんなに軽々としかも凄い力で人間を投げ飛ばせる杏那も異常だ。どんだけ怪力揃いなんだよ、と輝十は杏那の後ろ姿を見て思う。
大したダメージを受けていない男子生徒は、首をぽきぽき鳴らして、制服についた砂埃を払いのける。
「お怪我はありませんかー？」
「え？」
歩み寄った杏那は笑顔で男子生徒に手を差し出す。
男子生徒は困惑しながらその手を掴み取るか悩み、しかし手を引っ込めない杏那を見てその手を取ることにした。
「見てごらんよ、この野次馬。せっかくの入学式に何してくれちゃってるの？」

「いッ！」
杏那のわざとらしい笑みが消えた瞬間、男子生徒の口から小さな苦痛の叫びが漏れる。
男子生徒の手をひいて立ち上がらせた杏那だったが、その際光の速さで何度も引っ張った為に男子生徒の腕が外れたのだ。
その速さは人間の目で確認することは出来ず、輝十達には普通に立ち上がらせてあげたようにしか見えていない。
「最初は面白かったけど度を超えちゃまずいでしょ。俺達今日から高校生なんだから。ねっ？」
そしてまたいやらしい笑みを浮かべて、男子生徒に同意を求める。
男子生徒の顔には苛立ちや反発といった要素は全くなく、ただただ恐怖の色だけが滲み出ていた。
何を話しているのか聞こえない輝十達は、ただやりとりをしている二人を見るだけで状況が全く把握出来ずにいる。
と、その時。
「ねー腕が外れちゃってるみたい。保健室に連れてってもらえるー？」
杏那が誰かに声をかけるが、誰も反応を示さない。
「ほら、きみ達だよきみ達！」
杏那は手でおいでおいでしながら、カップル達に声をかける。
もちろんカップル達はあからさまに嫌な顔をして、互いに顔を見合わせていた。
「バ、バカ言ってんじゃねえよ。保健室だったら俺が……」
「ちょっとそこの童貞は黙っててー！　あ、きみ達じゃなくてそこの小さくてうるさいニホンザルみたいな奴のことー！」
あはは、と自分の言ったことに笑う杏那。
「ニッ、ニホンザルだと！」
初めて言われたその屈辱的罵倒に、輝十の顔はニホンザルの尻の色をしている。
つーか、さっきから童貞童貞って……なんで初対面のあいつが知

ってんだよ！
そう考えると輝十の怒りは上昇するばかり。
「なっ、俺ってそんなに童貞っぽいのか！？」
「ふえっ！？」
突然話を振られた埜亞はもちろん返答に困り、分厚い本を開いて顔を埋めていた。
あまりにしつこいので、納得はしていないといった顔でカップルは仕方なく杏那の元へ向かい、
「……なんで俺達が」
本音をぶつけた。
「こ、こいつが！　こいつが道子のお尻を……ッ！」
「まあまあ、きみの彼女が触りたくなるぐらいいいお尻をしてたってことで」
「はあ！？　ふざけんじゃねえ！」
怒りが収まらない彼氏は杏那にまで怒りをぶつけ始める。
「そうだね、怒るのもごもっともだよね。うんうん、だってきみはまだそのお尻を堪能してないんだもんねぇ」
「なっ！？」
一番突かれたくないところを突かれたのか、彼氏が言葉に詰まる。
「先に触られちゃって悔しかったのかなー？」
あはは、と笑う杏那は完全に他人事だった。
「う、うるさい！　おまえらに関係ないだろ！」
「うん、関係ないんだけどさーここで怒りを露わにしてまた同じこと繰り返すの？　体を張って助けてくれた人に悪いと思わないの？」
「うっ……」
杏那は男子生徒の肩を叩き、
「ほら、何か言うことあるんじゃないのー？」
「……」
「あるよね？」
杏那に念を押されて、男子生徒は一瞬怯えた目をする。

そして罰悪そうに、
「……悪かった。ごめん。もうしない」
目を逸らしてカップルに謝罪した。
「ね、こう言ってることだし？」
杏那は男子生徒の頭部を掴んで、お辞儀させる。
カップルは眉尻を下げて、顔を見合わせ、その謝罪を受け入れることにした。

カップルが男子生徒を保健室に送り届けたのを見て、杏那は輝十を横切って校舎に向かおうとする。
「お、おい！　てめえ！」
「もう、まだ何かあるの？　キッキッうるさいお猿さんだなぁ」
「誰が猿だ！　誰が！　つーか、さっきの……」
輝十はカップルが男子生徒を連れて行く姿を見ながら問おうとする。
「んー？　ああ、あれね。あんたが連れて行っても別にいいんだけどさーそれだと何の解決にもならないでしょ？　溝は空いたままになるし」
「そう、だな……」
悔しいことに杏那が言うことは一理ある、と輝十は思ったのだ。
一緒に保健室に向かう姿を見て、終わったんだなという感じがした。自分が飛んで男子生徒を吹っ飛ばして、それで解決したかというともちろんしていない。
「いやまあそうだけどよ、何で俺があんな目にあわないといけねえんだよ！」
「別にいいじゃーん。ヒーローは飛んで現れるのがお約束じゃないの？」
「ま、まあ、そう言われればそうだな……」
ヒーローに例えられて悪い気がしない輝十は、まんまとごまかされるところであった。

「って！　そうじゃなくて！　そもそもなんでおまえが……」
と、言った時には既に杏那は校舎に向かっており、
「そろそろ休憩終わるよー？　じゃあねーん」
歩きながら輝十達に向かって手を振ってた。
「ああもう！　くそ！　一体なんなんだよ！」
ちくしょう……なんであんな奴が……なんであんな奴がああああ！　しかもどっからどう見ても男じゃねえかよ！
おかしい。絶対におかしい。この学校も、妬類杏那という婚約者も、何もかもがおかしい。
輝十はそう思いながら、憎き父親の顔を思い浮かべた。

（9）

「やっぱりおかしい……ぜってえおかしい……」
それからしばしの時間を経て？組の教室に入り、軽いホームルームを行う。
そこまではよかったのだ。なにがいけなかったかというと、
「なんっでおまえがいるんだよ！　妬類杏那！」
「はいはーい。せんせぇ、隣の席の人がうるさいでーす」
運命というべきか、運命の悪戯というべきか、なんとあの赤い髪の男――妬類杏那も輝十と同じ？組だったのである。
教室で再び顔を合わせた二人はこともあろうに隣同士の席だった。
ぷるぷると震える程抑えていた怒りが溢れ出し、がばっと立ち上がった輝十。
その隣で余裕そうに頬杖をついている杏那が片手をあげ、輝十を指差して担任に突き出す。
もちろんのこと、輝十は担任に名指しで怒られ、しゅんとして席に座ることになる。
「怒られてやーんのー」
ぷっくく、と小学生のいたずらっ子のような含み笑いをする杏那。
「てんめえ……！」
「ほらほら、また怒られるよ。小声で喋るってことを学びまちょうねー」
わざと語尾を赤ちゃん言葉にし、完全に輝十を舐め腐っていた。
もちろん舐められている輝十が黙っているはずがなく、しかし次に喋ると怒られるので机を掴んで怒りを必死に静めていた。
ガタガタガタ、と怒りの波動で地震のように揺れる机。
「はいはーい。せんせぇ、隣の席の人の机がうるさいでーす」
そしてまた怒られる輝十、嫌味に笑う杏那。
歯軋りする程、怒りを堪えている輝十に、

「ごめんごめーん、冗談だって。それよりあんたに聞きたいことがあるんだけど」
「あ？　んだよ」
問うたが、一方の輝十は眉間にしわを寄せたまま、あからさまに嫌な顔をする。
「婚約者ってどういうこと？」
「はぁ？　んなもんこっちが聞きてえよ」
「だって俺があんたの婚約者ってことなんでしょー？」
「てめえ男じゃねえか。その時点でどう考えてもおかしいだろ」
「うーん、そうだねぇ。人間の感覚だとおかしい……のかな」
その微妙な言い回しにカチンときた輝十は、
「てめえ……人間の感覚ってなんだよ。また俺を猿呼ばわりするつもりか？　あん？」
杏那は一瞬目を見開いて呆然としたが、すぐにその意味を理解して笑みを零した。

隣の意地の悪い赤髪野郎に気を取られて、それに輝十が気付いたのは自己紹介の時だった。
順番に名前と一言ずつ言っていく、何の変哲もない自己紹介。
輝十にとって男子生徒の自己紹介は割とどうでもよく、女子生徒の自己紹介も立った時に見えるおっぱいの形と大きさ以外に興味はなかった。
しかしその中で“彼女”の自己紹介で目を奪われたのは、全く別の理由でだ。
「……灰色？」
彼女は一人だけ灰色の制服だったのである。
彼女が立ち上がるとクラスが一気にざわついた。もちろん制服が灰色で他と異なるからだろう、と輝十はこの時見当違いなことを思っていたのである。
冷静になっておっぱいから離れてみると、あのブロンドの女子生

徒が言っていた通り、クラスは黒い制服と白い制服が半々で構成されていた。
その中で彼女だけが灰色で一際目立っている。
輝十は気になって問おうと思ったが、近くには見知った顔が杏那しかおらず、無駄に関わると被害が及びそうなので辞めておいた。
自己紹介が終わり、教科書や授業の説明を簡単に受ける。
この栗子学園には資格を取得するための特別カリキュラムが組み込まれており、普通科だと思って進学した輝十は少し予想外だった。
「性育学(せいいくがく)って……な、なんだよ」
凄く興味をそそられる学科である。想像するに、保健体育の保健をもっとも実践的に行う学科だろうか。
特別カリキュラムの中には“性育学”と“人間学”があり、どちらも受けるようになっていた。
もちろん輝十は高校になると色んな勉強があるんだな、ぐらいにしか思っていない。
そして“何の資格を取得するのか”も全く知らず、しかしだからといって興味も持たずにいた。

ここまできてようやく一日の流れを終える。三大式典というだけあって、輝十にとっては長い一日だった。
疲れて帰宅し、そのまま部屋に戻って仮眠をとりたい……ところだが、輝十にはまずやらねばならぬことがあった。
早歩きで廊下をダッダッダッと大きな音をたてて歩き、居間に向かう。
もちろん入学式が終わった時点で保護者は解散されているので、本来ならば奴は帰宅しているはずなのだ。
「あのクソ親父……男を婚約者なんてどうかしてるぜ」
急ぐ足の先には、親父を一発、いや何発でも殴ってやりたいという輝十の思いがある。

ただでさえ男にモテる悲しい日常を送っているというのに、ここにきてまさか実の父親に“男の婚約者”を宛がわれるなど誰が想像出来ようか。
シュパン！
輝十は必要以上に勢いよく襖を開け、
「おいこのクソ親父！　一体どういうことなんだよ！」
と、威勢良く怒鳴りつけたまではよかった。
ここでとぼける父を気が済むまで殴ってやる、などと思っていたのだ。
しかし輝十のそんな脳内プランは一瞬にして崩れてしまう。
記憶に刻まれた、あの真っ赤な髪。
着崩した真っ黒な栗子学園の制服。
いかにもチャラそうな軽い雰囲気といでだち。
そして忘れやしない……、
「あれー？　あんた今日のお猿さん！」
この人を小馬鹿にした態度と茶化した口調！
――妬類杏那がそこにいた。
「本日のわんこみたいなノリで言ってんじゃねえよ！　つーか、おまえ何でここに……」
立ちすくむ輝十に満面の笑みを浮かべながら、
「お！　おかえり。なんだおまえ達、もうとっくに顔見知りだったのか」
嬉しそうに話す父。
「おい、親父……これは一体どういう……」
「どういうもこういうも、杏那くんは今日からうちに住むんだよ」
「はあああああっ！？」
輝十は顎が外れるぐらい口を開いて叫ぶ。
「え？　おじさん、こいつがおじさんの子供なの？」
「そうだよ。まさかこんなに喜んでくれるなんてね」
「喜んでねえよ！　よく見ろ！」

輝十は必死でアピールするが、父は無視して杏那と会話を続ける。
「ふーん、そうなんだ。それで婚約者ってのはなんなのー？」
「そうか、聞かされていなかったんだね」
言って、父は杏那に耳打ちし、輝十を前にして二人でこそこそ話を繰り広げる。
「こそこそするんじゃねえええええ！　人の話を聞けえええええ！」
「輝十、そこは『私の歌を聴けえええええ！』だろう。そしたらお父さんも聞いてあげたのに」
「しらねえよ！　だからどういうことなんだよ！」
声を張りすぎた輝十が肩を揺らして、はぁはぁと呼吸を荒げる。
「どういうことってそういうこと」
「だーかーらー！」
「まあまあ、話は一通りわかったし」
杏那が輝十を宥めるが、
「俺はわかってねえんだよ！」
火に油を注いだだけだった。
「男が婚約者なんてありえない。男と婚約なんてありえない。つまりあんたの言い分はそういうことだよね？」
「あ？　ああ。ついでにあんたが婚約者ってのもごめんだな」
「会って間もないのに凄い嫌われようだなぁ」
「その余裕そうな態度がいちいちむかつくんだっつーの！」
すっかり気が尖ってしまっている輝十に何を言っても無駄だ、と判断した杏那はそれ以上茶化すことはしなかった。
落ち着いた声色で話を続ける。
「整理するよ。つまり俺自身が婚約者なのも嫌だし、男が婚約者なのも嫌だ、そういうことだよね？」
「ああ」
輝十は杏那を睨み付けながら、低い声で返事をする。
「ふーん、そっか。わかったよ」
杏那は納得した様子で、輝十に近づき目の前に立ちはだかる。

「わかればいいんだ、わかれば」
うんうんと頷いている間に自分の目の前に杏那が来ており、自分を見下ろしていることにいらっとする。
しかし婚約者じゃないとなれば、赤の他人だ。もう何も恐るることはな……、
「今日からあんたの婚約者になることにするっ！」
「は？」
予想を裏切られた輝十の顔をよほど見たかったのだろう。
杏那は笑うのを我慢出来ずに、ぷっと吹き出した。
「だからぁ、俺あんたの婚約者なんでしょ？　よろしくってこーと」
「よろしくじゃねえよこのホモ野郎その赤い髪毟りと……」
「落ち着きなさい輝十」
暴走モード突入した輝十を父が後ろから羽交い締めにして口を抑える。
「ぷはっ。この流れでどうやったらそうなんだよてめえ！」
父に捕まったまま、口だけを開放してもらった輝十はここぞとばかりに突っかかる。
「んー？　だってその方が面白そうじゃーん」
「おまえな、面白いだけで男同士婚約者とか普通納得するかぁ！？」
「あんたからすれば充分“普通”ではないと思うけどねぇ」
「やっぱりホ……いやバ……」
愕然とする輝十から次第に力が抜けていく。
「ま、そういうことだ。仲良くやってくれよ」
もはや父の言葉に怒る気力さえない。
俺は……俺は……どうしてここまで男運がないんだあああああ！
っと、危ねえ。その言い方だとなんかおかしい。男運じゃねえ。問題なのはやたらそういう趣味の人種を呼び寄せてしまうことだ。
輝十は深い溜息をつき、その場で力尽きた。
「俺はぜってえ認めねえ……」
そう、呟きながら。

(1)

「はぁ……俺はもう死にたい……」
せっかく死ぬならおっぱいで窒息死したい……。
輝十は自室に戻り、ベットで大の字になって天井を眺めながら呟いた。
ここまでのおさらい。
栗子学園に無事入学。宗教くさい儀式みたいなのを経て、無事高校一年生になった。
そこで父が勝手に決めた婚約者と出会う。
しかも男。どう見ても男。脱がなくてもわかるぐらい男。男男男。
そうだ、俺には今日付で男の婚約者が出来たのだ。もちろん日本での同性結婚は認められていない。つまりいずれは海外で挙式をあげることになるだろう。
「いやあああああああああ！」
まるで悪夢に魘されたかのように絶叫しながら起き上がる。
輝十は何度も心の中で誰かに問いかける。
「どうしてこうなった……」
ベットから降り、頭を抱えてその場で膝をつく。
どうもこうもすべてはあのクソ親父のせいなわけだが。
今宵あのクソ親父を小麦粉詰めにして焼いてやろうか、などと本気で考える輝十であった。コンクリートじゃないから問題ないよな。
「輝十くんったらそんな怖い顔してどうしたのー？」
「！」
背後から今一番聞きたくない声がして恐る恐る振り返ると、
「よっ！」
輝十のベットに寝転がって笑顔で手を振る杏那の姿があった。
「な、な、ななななんでおまえが！？　いつの間に！？」
「『どうしてこうなった……』辺りからいるけど？」

全く気付かなかった。
輝十は杏那が自分の部屋に入ってベットに寝転んでいるという事実よりも、全く気付かれず部屋に入り込んで自分の背後をとったということに驚きを隠せなかった。
気配を全く感じなかった。この俺が……？
「どうしちゃったの急に黙り込んで。さっきまでの勢いがないみたいだけど」
「う、うるせえな！　さっさと出てけよ！　なんで俺の部屋にいんだよ！」
輝十は焦りのようなものを感じていた。しかしそれを悟られないように、努めて通常通りを装う。
「いいじゃーん、どうせ一つ屋根の下なんだし」
にこにこしながら、輝十のベットの上で足をばたばたさせる。
「よくねえよ！　とりあえず俺のベットから退きやがれッ！」
輝十は杏那の両足を掴み、無理矢理引きずり下ろす。その展開さえも楽しんでいるのか、杏那は一切抵抗せず、体重すべてかけて輝十に引きずり下ろさせた。
「もう、どうせ一緒に寝るんだから下ろしたって意味ないのにー」
「一緒に寝ねえよ！　アホか！」
死体のように床に寝ぞべっている杏那に全力で突っ込む輝十。
「婚約者なのに？」
「俺は認めてねえ。つーか、おまえ男だろ。ちょっとは嫌がったらどうなんだよ」
嫌がらないならホモ認定として、俺の半径三メートル以内には近寄らせないことにする。俺は死ぬまで処女でいるつもりだからな。
「男……ねぇ。正確に言うと“男性型”なんだけどなぁ」
「おまえの性的役割なんて興味ねえええええええええ！」
杏那は輝十の勝手な勘違いを修正することなく、その反応を楽しんでいるようだった。
「とか言っちゃってさぁ、童貞なんだから興味ぐらいあるでしょー

？」
「なんなのその上から目線マジむかつくんですけど」
輝十はベットに腰掛け、俯せで寛いでいる杏那を見下ろして唾を吐くように言う。
その余裕な感じが輝十の癇に障るのである。
いかにも「おまえってばまだ童貞なの？　何のためにソレついてるの？」というニュアンスが含まれているように感じるのだ。女に不自由していない側がいかにも女に不自由している側をネタにしているようにしか、輝十には思えなかったのである。
「だって事実じゃーん。童貞のイイ匂いがするよん、輝十くんは」
「……てめえマジで踏むぞ、その赤い頭部」
童貞のイイ匂いってなんだよ！　そして何で俺が童貞なのが事実なんだよ！　……いや、まあ、事実ですけどね。
「あれー？　今の褒めたんだけどなぁ。ま、いいや」
言って、杏那は片手を軸に逆立ちし、そのまま片手の力だけで飛んで後転し、輝十の隣に腰掛ける。その動作を一瞬で行ったので、輝十には何が起きたのかわからなかった。
「知らないでしょ？　童貞って甘い蜜のような香りがするんだよ」
「はぁ？」
もうこいつの頭はいかれている、とこの時輝十は思った。童貞の匂いが嗅ぎ分けられるなんて言い出すホモ、どこにいんだよ。
「しかも輝十くんは普通より濃厚な匂いがするね」
「その流れだと俺が童貞の中の童貞みたいな言い方だな」
「一理あるかもねぇ」
「ねえよ！」
甘い匂いは確かにするかもしれない。父がよく余ったケーキやチョコレートなど持ち帰ってくるし、家で試作品を作ったりすることもある。
家の匂い、というものがあるならまさにそうだろう。
だからといってそれを“童貞の匂い”なんて発想してしまう時点

でこいつは腐っている。どれぐらい腐っているかというと、男かけ算が趣味の女共ぐらい腐りきっている。
「これだけ匂いを発している人間も珍しいんだよねぇ」
「てめえ……いい加減に……」
と、怒鳴ろうとした瞬間――
「！」
「んーなんだ、味はしないんだ。なにこの童貞、ちょーつまんないのー」
そのまま輝十は石化した。
杏那に頬を舐められ、ショックのあまり石となって現実から逃避したのである。
「あれ？　おーい、どうしたのさー？」
どうして輝十が石化しているのか理解出来ていない杏那は、輝十の目前で手を振り続ける。
「ああ、そういうことか。そんな舐めて欲しいな……」
「てめえええええええええええええええッ！」
その先を聞いてしまっては、もう死ぬしかないと思った輝十は現実に舞い戻ってきた。
「俺の名前はてめえじゃなくて杏那なんだけど」
「んなことたぁ、どうだっていいんだよ！　しれっとなにしやがるッ！」
輝十は涙目で頬をごしごしと何度も擦る。
「だからぁーさっきから言ってるじゃーん。匂いが普通の人間より濃厚だから味がするのか試してみただーけ」
「童貞に味も匂いもあるかあああああああああッ！」
「味はないけど匂いはあるんだってばー」
聞く耳を持たない輝十は杏那に枕を投げ付け、距離をとって戦闘態勢に入る。
そこでも頬をごしごしと擦る輝十。
なにが悲しくて男に頬を舐められなきゃなんねえんだよ！

ごもっともである。
頬を舐められたこともだが、自分がその気配に気付かなかったことが輝十にとって不覚だった。
今までもこういう場面には何度も出くわしたことがある。しかしいつだって回避し、未遂で終わっていたのだ。終わらせていたのだ。
それは誰が相手だろうと自分の身体能力なら、避けることは容易いからである。
なのに杏那相手だとそれがどうやら通用しないらしい。気配が感じ取れないのだ。つまりそれだけ杏那が輝十を上回っているということになる。
「……おまえ、なんなんだ一体」
輝十の雰囲気は一変し、真摯な顔つきで低く呻るような声色で問う。
「さぁっ、なんなんでしょ？」
杏那はにやにやしながら肩をすくめて見せた。
輝十が“気付いていない事実”を言うか言うまいか、迷うことなく言わないことにしたのだ。杏那はその方がまだ楽しめると判断したのである。
「そーんな怖い顔しなさんなってぇ。なに？　戦うの？　俺と？　輝十くんの身体能力は買ってるけど、俺が本気出しちゃったら瞬殺だよー？」
ひひひ、と今までになく嫌味に笑う杏那。
「はっ、やってみねえとわかんねえだろ。んなもん」
もちろん輝十は攻撃に自信がない。しかし不意打ちではなく、正々堂々と戦えば避けることは出来るだろう、と考えたのだ。そうやっているうちに隙ぐらい出来るはず。
婚約者なのもそう、このふざけた態度もそう、童貞のピュアハートを傷つけたのもそう、頬を舐められたのもそう――すべてが重なり、輝十の中にしっかりとあるプライドが奴を許すなと言っているのだ。

（2）

「ねーってば、俺は別に喧嘩する気なんてさらさらないんだけど」
と、杏那が言ったところで睨み付けたまま動こうとしない輝十。
二人の視線が無言で交差する。
「もう、ちょっと聞いてるー？」
杏那は輝十と拳を交える気は一切なかった。しかし輝十の方はすっかりいきり立っており、まともに話を聞いてくれそうにない。
杏那は全く緊張感がなく、めんどくさそうに深い溜息をつく。
「で。俺が勝ったらどうしてくれるわけー？」
「あ？　んなもん勝ってから言えよ！」
「んー勝つから言ってるんだけどなぁ」
前髪をいじりながら答える杏那。
また見せるその余裕な態度に、輝十ははらわたが煮えくりかえる。
と、その瞬間――
「！」
輝十の視界から杏那が消え、その代わりに目前に枕が飛んでくる。
杏那が投げた枕が輝十の顔面目がけて飛んできたのだ。
「はんっ、こんな目くらまし……！」
輝十は難なく枕を避け、恐らく枕の後にくるであろう杏那の攻撃に備えて神経を研ぎ澄ませる。
「家が壊れないといいんだけど」
「なっ！」
しかし杏那の拳も蹴りも襲ってはこず、その声の先を見て仰天した。
それは一瞬。
ベットのスプリングを利用して飛び上がった杏那は天井を蹴り、輝十の背後に逆立ちで降り立つ。
しかし輝十も反射神経はいい。即座に振り返って杏那の攻撃に備

えたが、既にその場には杏那はいなかった。
「えっ！？」
と、杏那は腕の力だけで更に飛び上がり、輝十の頭上をこえて更に背後をとったのだ。
「こっちこっち」
杏那は肩をつんつんと叩いて、振り返った輝十の頬に人差し指を突きさす。
頬に指がめりこむ感覚がし、輝十は視線の先にある杏那の笑顔を見て二の句が継げない。
速すぎて見えなかった……だと？
パターンは読めていたのに、動きが速すぎてついていけなかったのである。
俺が？　この俺が！？
輝十は呆然として、その場でへたり込んでしまう。
「はーい、俺の勝ちぃ。文句ないよね？」
後頭部で手を組み、左足の臑を右足で掻きながら余裕綽々に言う杏那。
「そうだな……俺の負け……だなッ！」
「っと！」
その余裕の隙をつき、輝十は屈んだまま杏那の足を蹴り飛ばす――が、杏那は飛んでそれを避け、そのまま屈んで輝十に同じ技をかける。
「同じのに引っかかるわけねえだろ」
言って、輝十は飛んで避けてバク転し、距離をとろうとするが……、
「わっ！」
足下に落ちていた雑誌で足を滑らし、背中からベットに倒れ込んでしまう。
「さて。もう逃げれそうにないですけど、どうします？」
杏那はベットに飛び乗り、輝十を押さえつけるように胸元を踏み

つける。
自分を見下ろす杏那を今すぐにぶっ殺してしまいたかった輝十だが、どう考えても戦況は不利だ。
「ここで輝十くんに白雪姫と同じことしたら、それこそショックで一生起きれなくなっちゃいそうだよねぇ」
「そのまま踏みつぶされた方が何億万倍もマシだ！」
「なーんでそんな怒ってばっかなのかなぁ、輝十くんって」
「いッ！」
「あ、ごめんごめーん。もちろんわざと！」
胸元を踏みつけている足に力を入れる杏那と呻き声をあげる輝十。
「何回やっても戦況は同じだと思うけど。もう無駄な争いは辞めたら？」
「うるせえ黙れ話しかけんな」
輝十はぷいっと顔を逸らして口を尖らせる。
杏那は苦笑しながら足を退けて肩をすくめた。
「んだよ、踏みたきゃ踏めよ」
「なにそのドM発言。踏んで欲しいならどこでも踏んであげますけどー」
「ちっ、ちげえ！　ああもう！」
輝十は子供のように怒鳴り散らしながら枕を投げ付けた。
「……いって」
「？」
その枕はまともに杏那の顔面に命中してしまう。
今まで散々自分を超えるような身体能力を見せつけておいて、あんなもの避けることも掴むことも出来るだろうに。わざとだろうか。
「もうだめ……そろそろエネルギー切れ」
「は？」
居間から父の呼び声がしたのは、杏那が輝十のベットに倒れ込んだ時だった。

「遠慮はいらん。今日は沢山作ったからいっぱい食べてくれ」
呼ばれて居間に向かうとテーブルの上には三人分とは思えない量の食べ物が並んでいた。
その真ん中には父が作ったであろう大きなケーキもある。
「おい、親父。誰がこんなに食うんだよ」
「誰ってみんなでだろう」
「三人しかいねえんだぞ？」
輝十がもっともなことを言っている側で、しれっと席に座る杏那。
「おーまーえーなー」
「だってお腹すいたんだもん。いいじゃーん、早く食べようよ」
「そうじゃーん、早く食べようよ」
「同じ口調で言うな気持ちわりい！」
席についた父が杏那の口調を真似て言うので、輝十は尽かさず突っ込んだ。いい歳した加齢のおっさんが男子高校生の真似してんじゃねえよ！
仕方なく輝十が席に着くと小さなパーティーが始まった。
もちろん輝十はパーティーだなんて思っていない。クリスマスかよと突っ込みたくなるような三角帽子を被った父が一人で騒いでいる。
輝十は一切無視して、黙々と食事を進めた。
「このケーキは二人の入学祝いと杏那くんの同居祝いを兼ねて、今日帰って来て急いで作ったんだよ」
「ケーキは美味しいしカロリー高いから助かるなぁ。おじさんの作ったチョコレートはないのー？」
「あるある、もちろん作ってあるよ。後で出してあげよう」
そんな父と杏那の会話は一切聞こえないふりをして、輝十は黙々と食事を続ける。
父と杏那は揃って輝十を見て、顔を見合わせた。
ごほん、と父はわざとらしく咳払いし、
「輝十、ならばおまえに話をしてやろう」

「いや、結構」
「それじゃ話が続かんだろう！」
「どーせまた尻と太ももはおっぱいより優れているって話だろ？いらねえよ」
輝十は父に一切の視線もくれず、ご飯を口に運んでいく。
「違うぞ、輝十。今回は真面目な話だ。杏那くんが何故おまえの婚約者なのか、という話だ」
ぴた、と輝十の箸が沢庵の前で止まった。
「なんと杏那くんは父の命の恩人なのだ。な、杏那くん」
「んーそうだっけ？」
本当に身に覚えがないといった感じで、杏那が首を傾げる。
「そうだよ！　そうだったよ！　そしてお礼に俺の息子をやると決めたのだ」
「スト――――――ップ！」
輝十が勢いよく箸をテーブルの上に置いたので、テーブル上のすべての味噌汁が、ばしゃん、と音をたてて揺れた。
「おかしいだろ！　その時点で！」
「どの辺りがおかしいというのだ」
「何でお礼に自分の子供を売るんだよ！　しかも男に息子を売るな！」
「ははは。俺の息子といってもだな、その息子ではないんだぞ？」
「知ってるよ！」
「親父ギャグ……」
杏那が味噌汁をすすりながら、じと目で呟く。
「ごっほん。とにかくだな、そういうことでこういうことになったのだ」
「それで納得しろって方が無理な話だな」
輝十は呆れかえって溜息をつき、再び食事を再開させる。
「じゃあこういうのはどう？　おじさんの息子は諦めて、俺の息子にしてみるとか」

「てめえは話に入ってくんじゃねえ！」
「ちょっとーご飯粒飛ばしながら喋るの辞めてよね」
怒鳴った輝十の口から飛んできたご飯粒を心底嫌そうな顔で取り除いていく杏那。
そんな二人のやりとりが父には、父にだけは、仲睦まじく見えたのだ。
「いつか……いつか、理解出来る日がくるんだよ、輝十」
その言葉だけは様子が違っており、深くそして重く、感情がこもっていた。いつものお調子者な父らしからぬ顔つきで。
「ったく……もう俺はしらねえ。勝手にやってろ」
もう付き合いきれねえ。好きにしやがれ。
輝十はかきこむようにご飯を口に入れて飲み込んでいく。
そして父がケーキにロウソクをたてて火を灯し始めた時、
「ごちそうさまでした」
輝十は手をあわせ、箸を置き、茶碗を重ねて席を立つ。
「おい、輝十」
「もうお腹いっぱいだから」
流し台に茶碗を置くなり、二人の存在を無視して部屋に戻っていく。
「……悪いね、杏那くん」
「ああいや俺は別に。それより輝十くんって栗子学園がどんな学校かわかってます？」
「うむ、全くわかっておらんだろうな」
「ふーん、つまり“俺ら”のこともまーったくわかってなかったり？」
父は深々と頷いた。
もちろん杏那は承知の上である。
きっと輝十は自分のことを“人間の男”として見ている。人間の男をあそこまで嫌う理由が杏那にはわからなかったが、もし“事実”が伝わったとしても輝十の自分への評価は変わらないだろう。最

低と最悪の違いぐらいにしかない。
からかいすぎたのだろうか。杏那はまさかここまで嫌われるとは思っていなかったのである。
「ま、面白いからいいんだけどねーん」
婚約者なんていう人間特有の形式的なものは、杏那にとってどうでもよかった。むしろそんな約束すら忘れていたのである。
しかしあんなに本気で嫌がるところを見てしまったら、からかいたくなってしまうというもの。
「少し驚かせてやろっかなー」
杏那は自分の分と輝十の分のフォークと皿を父に差し出した。

（3）

「とんとん。輝十くーん、ケーキ持ってきたんだけど」
杏那は頭上にチョコレートが乗った皿を、両手にケーキの乗った皿を持って輝十の部屋の前にやってきた。両手が塞がっている為、口でノック音を表現する。
「……いらねえ」
一方の輝十はというとベットに寝転んで、そのままふて寝するところであった。
「入るよー」
「いらねえっつってんのに、なんで入ってくるんだよ！？」
「えー？」
杏那はわざととぼけた様子で、器用に足でドアを開けて入ってくる。
振り返って杏那の存在を確認はしたものの、徹底的に相手にしないつもりなのか、輝十は背を向けて再びふて寝体勢に入る。
「食べようよ、ケーキ。絶対美味しいって」
言って、杏那はベットに座り、輝十にケーキを差し出す。
「いらねえっつったらいらねえ」
「もう、駄々っ子だなぁ。美味しいのに」
杏那はチョコレートと輝十のケーキ皿をテーブルに置いて、自分の分のケーキを食べ始める。
「俺ね、甘いもの好きなんだよねぇ。好きっていうかぁ、正確に言うと食べないとやってらんないっていうかぁ」
女子かよ！　と一瞬輝十は思ったが、もちろん突っ込まずに飲み込んだ。
ケーキを食べながら杏那の一人語りが始まる。もちろん輝十は徹底的に無視していた。
てめえが甘いもの好きだろーと嫌いだろー知ったこっちゃねえよ

！　というのが輝十の本音である。
「甘いものだと高カロリー摂取出来るし、美味しいし、満腹になるし、一石二鳥なんだよねっ！」
微妙に意味のわからないことを言い出す杏那。
「ねーねー本当に食べないの？　こんなに美味しいのに？　ねーってばー」
「ああもう！　しつけえな！　食わねえつってんっ……」
輝十は勢いよく起き上がって振り返り、杏那を見て言葉を失った。
杏那は今までになくにやにやしており、輝十の驚愕顔を見て楽しんでいる。
「なっ……！」
光速で瞬きを繰り返し、目の前の状況を再確認する輝十。
「だ、誰だよてめえ！」
輝十はその現実が受け入れられず、怒鳴りながら杏那の両肩を掴む。
「妬類杏那だけど？」
にたぁ、と嫌味な笑みを浮かべる杏那。
両肩を掴んで失敗した、と輝十は思う。何故ならこの受け入れがたい現実が更に現実に近づいたからだ。
「おまえ……」
こんなになで肩じゃなかったはずだ。丸みを帯びて狭いこの肩幅は……一体誰の肩だ？
身長だって輝十を見下ろすぐらいの高さで、全く認めたくないがカップルだったら丁度いいぐらいの身長差だった。それが今は座っていてもわかるぐらいに、自分が見下ろす形になっている。
「なんで女……なんだ？」
認めたくない。認められない。しかし目の前にいる人物は確かに女で、杏那と同じ真っ赤な髪の色をしていたのだ。
さっき部屋に入ってきた所を確認した時は、確実に男の杏那だったはず。

「さーて、なんででしょー？」
質問に質問で返す杏那は、非常に楽しげである。
「俺が聞いてんだよ！　おまえ……双子だったのか？」
「まっさかー。俺は俺、妬類杏那一人だよん」
「じゃあなんで！」
輝十の頭は大パニック状態だった。脳内に生息する小さい輝十が総動員されて、この不可解な出来事の解明に努めている。
ひひひ、と笑う杏那はまだ答えるつもりはないらしい。目で見てわかるぐらいパニックになっている輝十をまだ観察していたいのだろう。
「どうかなー？　女の子だったら婚約成立しちゃうよねぇ」
「いやそれは……」
一瞬でも戸惑ってしまった自分に自己嫌悪。目の前にいる妬類杏那はやはり女の子なのだ。そして皮肉なことにどう見ても可愛い部類にはいる。
もちろんそれだけで輝十が納得するはずがなく、選ばれし乳の眷属のみが持っているという邪気眼でソレを確認した。
「……」
そして大量の冷や汗と共に言語を闇へと葬り去った。
「あっれー？　どうしたのかな？　なに、おっぱい見たいの？」
杏那は茶化すように言って、服のボタンに手をつけたまま輝十の顔を覗き込む。
「！」
その不意打ちに本気で慌ててしまった輝十だが、目を閉じて精神を統一し、必死に沈静させる。
こんな密度で不意に顔を覗き込まれれば、どきっとしてしまうものである。
だが否！
忘れてはいけない。こいつは男なのだ。何故か今女の姿をしているが男なのだ。確かにあのおっぱいは本物だ、間違いない。しかし

男なのだ。
輝十は無言で杏那に背を向ける。
「あれ？　なんだ、もう終わり？」
「何でおまえが女になってんのかわけわかんねえけどな、高性能なオカマだと思うことにした」
「せめて男の娘とかもっと言い方があるでしょー言い方が！　ま、今は確かに男性型じゃないんだけどねぇ」
杏那は高々とチョコレートを放り投げて口に入れる。
「やっぱりチョコレートが一番好きだなぁ、俺。ねー輝十くんも食べるぅ？」
杏那はわざと輝十の背中に抱きつき、胸を押し当てる。
やはり弾力と柔らかさから判断しても奴のブツは本物だ、と輝十は意外にも冷静に分析する。
大好きなおっぱいが背中に当たっている。そんな状況で歓喜しないはずがないのだが、輝十の動物的本能が処女保護レーダーを作動させ、黄色信号を放っているのだ。やはり女だが、女じゃない。おっぱいがいいおっぱいなのは認めるが、やはり杏那は杏那だ。
「……おい。一体これはどういうことなんだよ。説明するか揉ませるかどっちかにしろ」
「説明しないけど揉んでいいよって言ったらどうするのかなー？」
「全力で遠慮する」
揉みたくないのかと問われれば答えはノーだが、ここで揉んでしまったら負けな気がするからだ。というより、男についた女のおっぱいを揉むという十八禁漫画みたいな展開を今は望んでいない。
「ふーん。そうだねぇ、そろそろネタばらしでもするかな」
杏那はぱっと輝十から手を離し、再びチョコレートを口に放り投げる。
「いい？　これから言うことはすべて事実だからね。何を思ってもそれが現実なの。わかった？」
「わかったわかった。で？」

輝十は適当に返事をし、その先の言葉を待つ。
「俺ね、インクブスなわけ。それで常に摂取出来ない精分の代わりに糖分を摂取してエネルギーに変えて……」
「スト――――――ップ！」
輝十が待ったをかける。
「ちょっとーまだ半分も話してないんだけど」
「いやなんかもう既におかしいだろ！」
「最初に言ったでしょーこれから言うことはすべて事実だって」
むすっとした顔で言う杏那は女の姿だからだろう。むかつくのに悔しい程に可愛らしかった。
……と、思ってしまった自分を一発殴り、輝十は再び杏那の言葉に耳を傾ける。
「で。俺はちょっと特殊でエネルギーがいっぱいになると、体に抑え込めるエネルギーの許容範囲を超えちゃって女性型化しちゃうんだよね。カロリーを消費させていくとすぐ元に戻るんだけど」
「つ、つまり……糖分を摂取すると女の姿に、そのカロリーを消費していくと男の姿になるってことか？」
「うん、そうだね。元が男性型だからエネルギーが満たされない限りは変化しないんだけど」
そう言って、杏那は食べ終えたケーキの皿を見せる。
「普通の食事でも糖分は摂取出来るけど、やっぱり甘い物は桁違いなんだよねぇ。特にチョコレートなんて手軽だもん」
今までの杏那の言動からして、もちろんこれが意地の悪い冗談だということも大いにありえる。
しかしそうすると目の前の女の子は誰なんだ？　ということになるので、輝十は半信半疑だった。
「そうか、よくわかったぜ……」
意外にあっさり認めた輝十に逆に杏那が驚かされたようで、目を丸くして返答に困っている。
「そ、そう？　意外だなぁ、もっと信じないかと思ってたのに」

「俺を甘く見るんじゃねえよ。物分かりはいい男なんだぜ。……で」
ふふふ、と不敵に笑いながら輝十は言った。
「インクブスってなんなんだ？」
杏那はじと目で輝十を睨み付ける。
「はぁ――――！？　そっから説明しないといけないわけぇ！？」
杏那は叫びながら輝十に額をくっつける。
「顔ちけえよ。乳揉むぞこのおっぱい男」
輝十は杏那の顔を押しのけて、自分から突き放す。
「いやちょっとマジで言ってんの？　だったらなんで栗子学園にきたのさー？」
「親父が進めたからだよ。つーか、なんで話に学校が出てくんだよ」
その反応を見て杏那は、そうだった、と先ほど父と話したことを思い出す。
インクブスを知らないぐらいだ。学校についてはもちろん、今後自分がどういう立場に置かれるのかということもわかっていないのだろう。
想定の範囲内だが、あの学園に通うのにここまで無知な人間を目の当たりにするのも珍しい。
「ま、そのうちわかるんじゃないかな」
杏那はあえて多くは語らなかった。
今言うことは簡単だが、どうせ言っても彼は信じはしないだろう。放っておいてもあの学園で“童貞”である以上、それは避けては通れない道である。
それがきっと彼にこの現実が事実であることを伝えるはずだ。
「わかるってなにがだよ」
「んー？　それはね、ほら、俺と結ばれた方が幸せだったなーってわかる日がくるんじゃないかなって」
「こねえよ！」

（4）

翌日。
高校生になったという実感は、そうすぐに沸いてくるものではない。それよりも今はベットの下で抱きつき枕に抱きついて、まるで子供のように寝息を立てている人物のことで頭がいっぱいだった。
「なんでここで寝てんだよてめえええええ！」
輝十は呻るように吐き捨て、杏那を足蹴りにして部屋の外に追い出す。
ころころと転がって部屋の外に出された杏那だったが、全く起きる気配はなかった。
ドアを閉め、やっと自分の部屋が戻ってきたところで、まだ着慣れない制服を着て学校へ行く準備をする。

昨日死ぬ思いをさせられた問題の坂道が見えてきたところで、輝十は足を止める。
今日はバスで行こうと周辺でバス停を捜そうとして、
「おっはよー輝十くん。なんで起こしてくんなかったのさぁ」
自分を呼ぶ声に気付き、嫌々ながら振り返る。
「なんっで俺がおまえを起こさなきゃなんねえんだよ」
おかしい。思った以上に早い。
まさか追いつかれると思わなかった輝十は、杏那の姿を確認し、眉間にしわを寄せる。
「連れないなぁ。一緒の部屋で寝たのに」
「おまえが勝手に入り込んで寝やがったんだろーが！」
「あーあ、もう。まーた怒ってばっかりー。なに？　女性型になれば優しくしてくれるわけ？」
「うっせーおっぱい男。ついてくんな」
輝十がバス停を見つけて向かおうとし、杏那はそれについていく。

「えーバスで行くの？　たかがこんだけの距離なのに？」
輝十はその聞き捨てならぬ台詞に反応し、歩くフォームのまま制止する。
「ふーん、輝十くんってこんだけの坂を登る体力もないんだー？　実は結構ひ弱なんだねぇ」
止まったまま肩をぷるぷるさせる輝十を見て、杏那はにやりと口の端をつり上げた。
「は？　なに言ってんだよてめえ。んな坂ぐらい、楽勝で登れるっつーの」
まんまと杏那の安い挑発にのってしまった輝十は踵を返す。
「ね、せっかくだから勝負しようよ。どっちが先につくか！　そうだなぁ、俺が勝ったらもう少し友好的な態度になって欲しいねぇ」
「ふん。じゃあ俺が勝ったら、もう俺に必要以上に関わんな。いいな？」
「ぜーんぜん、おっけー」
杏那は余裕そうに頷き、二人は共に坂道のスタートラインに並び立つ。
「ねーハンデどうする？　なんでも聞き入れてあげちゃうけど？」
「んなもんいらねえよ」
杏那は失笑し、肩をすくめた。
ハンデを拒否したのはもちろん意地やプライドもある。しかし輝十は周囲を確認し、何かを発見したのだろう。それを秘策とするつもりらしかった。
瞳を閉じ、深呼吸して、イメージを膨らませる。
そして目の前の急斜面を真っ直ぐに見据え、ソレがやってきた瞬間、鞄を開いて手を突っ込み――
「いくよー？　よーい……」
どん！　と杏那が言った瞬間、輝十は鞄を思いっきり杏那に投げ付け、卑怯な真似で時間を稼ぐ。
そして散歩真っ直中の主婦が犬を連れて目の前を通り過ぎる瞬間

に駆け寄り、
「ちょっとお借りします！」
「え？　ええっ！？」
犬のリードを半ば奪うようにして犬を解き放ち、犬の背に“ソレ”乗せ、
「よし！　おまえは自由だ！　駆け上れ！」
言って、坂道を走らせる。
知らない人間にリードをとられ、触られ、走るように尻を叩かれ、犬は混乱していた。自由になった途端、輝十の思惑通り逃げるように物凄い速さで坂道駆け上がっていく。
しめしめ、と思った輝十はまだ走り出していない隣の杏那を確認し、勝利の笑みを浮かべて瞳を閉じた。
落ち着いて思い返せ、座覇輝十……おまえの大事な研究材料の一つがたった今盗まれてしまったのだ。あれはなんだ？　そうだ『ふっくらまんまる、可愛い谷間！　２４時間！』を謳い文句にした、天使の胸になれる代物だ。
それがどうした？　犬の背に……犬の背にのってどこかへ向かおうとしている！
突然、くわっと目を見開いた瞬間、
「待てええええええええええ！」
叫びながら犬を追いかけだした輝十。
そのスピードは坂道を走っているとは思えない程で、さっきの犬の走りが遅く思えてくるぐらいだ。
まるで韋駄天を思わせる人外的速さの秘訣は、自らの大事なものを自らのエサにし、潜在能力を引き出したことにある。
「なんで下着？」
風をきって風神のごとく走り出した輝十をじと目で眺めながら杏那は呟いた。
犬の背には二つの膨らみを覆う為に、日々下着メーカーが女性の悩みや願望を常に収集して駆使し、血と涙を流して作り出した最高

傑作が乗っかっている。
その凄く残念な後ろ姿を眺めながら、杏那は片足で、とんとん、と飛び跳ねる。
「さーて、そろそろ……」
どんなに速かろうと杏那にとっては“所詮人間”なのだ。どんなハンデでも受けるつもりだったし、どんなハンデでも負けるわけがなかった。
すぐに勝っても面白くない。勝てると希望を抱かせ、一気に絶望させた方が面白い。輝十ならいいリアクションを残してくれるはずだ。
そんなことを考え、想像するだけでもわくわくして笑みを零してしまう杏那の背後で、
「ざ、ざ、ざっ、座覇くん！？」
犬を追いかけて駿足を飛ばしている友人を見て、思わず鞄を地面に落としてしまう彼女。
「あれー？　えっと、きみは確か……」
準備運動まがいなことをするのを辞め、彼女に近づいていく杏那。
「ひうっ！？　な、な、なん、で、しょ……か？」
「ふふーん、この黒いパーカー見覚えあると思ったら。輝十くんのお友達だったよね？」
杏那は埜亞の全身をじろじろ見回しす。
「お、おと、おとも……だち……」
そのフレーズを復唱しながら本を落とし、顔を真っ赤にして俯いてしまう彼女。
「そ、おともだちでしょ？　三大式典の休憩時間、仲良さそうに二人でベンチに座ってたもん」
「な、なか、なかなかっ、よさそ……うに！？」
悲鳴に近い声色で言って更に俯く。俯きすぎて頭部が床についていた。
この柔軟性と真っ黒なパーカー、そしてどもった口調――そう、

彼女は夏地埜亞である。
「きみもこの坂道登るの？」
「ひえっ！？　は、はい、です……」
「あれー？　バスは使わないんだ？」
杏那は不思議そうに彼女を見ながらバス停を指す。
人間の女の子が好んでこんな坂道を登るとは思えなかったのだ。しかしバス停には目もくれず、登ることが当たり前かのようにしている。
「バス？　ま、まま、まっ、まさか！　そんなの……無理です、から」
「ふーん、よくわかんないけど。この坂道を登るって言うなら……」
「ええっ！？」
杏那は軽々と埜亞を抱きかかえ、女の子なら誰もが羨むようなお姫様抱っこをいとも簡単に実現させた。
埜亞は案の定大パニックを起こし、またあのマンドラゴラのような悲鳴をあげる。
杏那の容姿ならお金を払ってでもお姫様抱っこしてもらいたい、という女が現れてもおかしくはない。しかし埜亞はそういう理由ではなかった。
「ちょ、なにこれっ。人間とは思えない声なんだけど」
さすがの杏那も耳元で叫ばれ、意識が飛びかけ目が星になりかけたが、なんとか持ちこたえ、再び片足で飛び跳ねる。
「ちょっとハンデあげすぎちゃったかなぁ。いい？　一気にいくからつかまっててよ」
とんとん、とリズムを刻みながら飛び跳ねた瞬間――
「ひえええええんっ！？」
杏那は地面を蹴って、それだけでまるで飛んでいるかのように加速し続けて坂道を登っていく。杏那の足は“地面についていない”。宙に浮いたまま、たった一蹴りで坂道を登るように飛んでいることになる。

「おい犬っころ！　例えおまえがメスでも残念なことにその代物が使えないんだ！」
完全に巻き込まれただけの犬にとって大いに迷惑である。
自分の妄想によるシナリオにすっかり陶酔している輝十は、盗まれた天使のブラを追って坂道を駆け上がり終わるというところで、
「さあ！　それを俺に返す……」
隣を鋭い風が通り過ぎていった。まるでＦ１の爽快な走行音が聞こえてくるかのように、隣を“なにか”が物凄い速さで突き抜けていったのである。
輝十は嫌な予感しかしなかった。
そう思った瞬間、今までごまかしていたものが崩れ落ち、急に疲れがどっと体を襲ってくる。
それでも天使のブラだけは譲れない。輝十は手を伸ばし、ブラの肩紐に手をつけた瞬間、雪崩れ込むように地面に突っ伏した。感動ゴールの瞬間である。
「すっかりお疲れのようだけど大丈夫？」
その声を聞いて感動が悲劇に転落する。
汗一つかかず余裕綽々に輝十を見下ろしているのは、言わずもがな杏那である。
杏那にとって、いや“杏那達にとって”こんなことは呼吸をする程度にすぎない。先に校門前に辿り着いていた杏那を見上げて輝十は顔をしかめた。しかし仕方なく立ち上がる。
「わかってるよねぇ、俺が勝ったら……」
「わーってるよ。俺の負けだ。そこは認める」
輝十は悔しそうにブラで鼻の下を擦るというシュールな姿で言う。
勝てると思っていた輝十は本気でへこんでいた。口を尖らせて、すっかりご機嫌斜めである。
そんなところが杏那にとって面白く、からかいがいがあるなんてもちろん本人は気付いていない。
「そう？　だったら頑張ったで賞として、輝十くんにはこれを差し

上げよーん！」
「あ？　頑張ったで賞ってな……なっ！？」
輝十の驚いた声と埜亞の叫び声が重なった。
杏那は抱きかかえていた埜亞をそのまま輝十の腕の中に落としたのである。
「わ、わわわっ！　ど、どういうことなんだよこれ！？」
「ひえっ！？」
輝十はわけがわからず、しかし力を抜くと埜亞を落としてしまう。そのまま引き継いで埜亞をしっかりと抱き留めた。
埜亞にとって本日二度目のお姫様抱っこである。
「おまえ、なにやってんだよ。大丈夫か？」
「も、もん、もん……」
再び埜亞の大パニックが始まる。言うなれば、湯が沸騰を始め、やかんからきゅーきゅーという音がし、
「なんだ？　揉んでって？　そりゃあもう喜ん……」
蒸気が溢れ出して、やかんの蓋がコトコトと音をたて、やかんの中の湯がぶくぶくと暴れだし……、
「くるっ！」
「え！？」
杏那の予言の通り、
「ギャァァァァァァァァッ！」
マンドラゴラが引っこ抜かれた時に出す、あの殺人的悲鳴が響き渡った。

（5）

「……ご、ごめ、ごめんなさいっ、です」
「ん？　いやもういいっていいって」
廊下を歩きながら何度も頭を下げる埜亞に、輝十は笑いながら手を振って制す。
「ねーねーどうやったらあんな叫び声が出来るの？」
輝十と埜亞が並んで歩いている後ろから、顔をひょいと出して杏那が突っ込む。
「ふえっ！？　え、えっと、その……」
「辞めろよ。埜亞ちゃんが困ってんだろ」
杏那はふーんと適当に相槌を打ち、輝十の持っているソレを指差して、
「それ、下着握ったまま言うセリフぅ？」
しらじらしい目で見た。
「あのな、これはただの下着じゃねえんだよ」
「いやでも下着握って歩くのはどうかと思うんだけど」
「はぁ！？　おまえは目の前に大好きな女の子の手があっても握らねえっつーのかよ！」
本気で言っていると感じた杏那は輝十を白い目で見るなり、
「ね、きみこの変態のどこがいいのー？　このノリだと女の子のパンツ被ってこれは股に顔を埋める時の練習なんだよ！　とか言い出すよ絶対」
「ひっ！」
杏那は埜亞の肩を抱き寄せて問いかける。埜亞は体に触れられたことで、そんな質問耳に入っていないかった。
「おまえぇ……」
輝十は下着をにぎにぎしながら拳を握り締め、体を震わせる。それぐらい杏那のその一言は聞き流すことが出来なかったのだ。

「なにさー？　ほんとのこ……」
「もしかして天才かっ！」
杏那の声に輝十の声が重なる。
「いいな、それ。ちょっと見直したぜ」
杏那が始めて輝十から友好的に接された瞬間であった。
「でもよ、あくまで俺はパンツよりブラ派だからな。これが一番なわけよ」
下着を掲げながら言う輝十に冷たい視線を送りながら、杏那は埜亞に話を振る。
「なんか喜んでるみたいだから、きみのパンツあげてみたらん？」
「ひえっ！？　や、やっ……です！」

昼休みになり、弁当を持ってきていない輝十は食堂に行こうか迷っていた。
その時背後から視線を感じ、振り返ろうと思った時。
「あのぅ……」
肩を叩かれて、椅子に座ったまま振り返るとすぐ後ろに女子生徒が二人立っていた。
ショートカットの女子生徒とセミロングの女子生徒。この学園は容姿端麗が異様に多いので目立たないが、近くで見ると二人とも可愛らしい顔立ちをしている。
名前は思い出せないが、顔に見覚えはある。同じクラスの女子生徒だ。
「ん？　なんか用か？」
女子生徒は二人顔を見合わせて、不自然なまでにこっこりと微笑んだ。
「え？　なに？」
突然微笑みかけられて動揺する輝十に、
「一緒に食堂いかない？」

「ね、私達と一緒に食べようよー」
身を乗り出して積極的に誘い出す女子生徒二人。
「あ、ああ。それは別に構わねえけどよ。なんで俺？」
これが男子生徒なら接点がなくとも悲しいことに合点がいってしまう。しかし相手は女子生徒。全く接点のない二人に自分が誘われる理由がわからない。
「そんなのいいじゃーん！　一緒に食べたいからに決まってるでしょ？　ねー？」
「うんうん！　食べたいから誘ってるだけ。ね、食堂行こうよー」
このきゃぴきゃぴした感じ、見た目は今風の女の子、この人の質問に答えず自分の言い分しか口にしない、突っ走る感じ……これはもしや！
輝十は椅子をひいて二人の女子生徒から体を離す。
「言っておくが俺はホモではない。ノンケ中のノンケです。お引き取り下さい」
ノーサンキューノーサンキューと連呼しながら、両手を前に出して拒否する輝十。
この手のタイプは腐女子だと相場が決まっている。そもそも俺に話しかけてくる女子ってだけで信用出来ねえ。
女子生徒達は顔を見合わせ、きょとんとする。
「やだなぁ、知ってるよ。ねー？」
「うんうん！　私達じゃ座覇くんのお食事相手は役不足なのかな？」
ぐいぐいっと顔を近づけ、一向に引き下がろうとしない女子生徒二人。
「そ、そういうわけじゃ……」
な、なんでこんな顔ちけえんだよ、と動揺しながら顔をひく輝十。
「それじゃ！　決まりだね！」
「よし！　行こー！」
「ええっ！？」
女子生徒はそれぞれ輝十の腕を掴み、左右取り押さえて立ち上が

らせる。
「わ、わかった！　わかったから！　だったらよ、埜亞も一緒に……」
と言って、埜亞の方を振り向こうとしている輝十を女子生徒達は無理矢理引っ張っていく。
「あの子なら座覇くんの前に誘ったんだけど、後で来るって言ってたよ」
「そうそう、先生に頼まれたことがあるからって」
「そうなのか？」
そう言われて疑う理由はない。輝十は女子生徒達に引っ張られるまま教室を後にする。

「……なによあれ」
輝十が女子生徒に囲まれて教室から出てきたところを見かけた聖花は、顔をしかめて唾を吐くように呟く。
廊下を歩いていた時、それを偶然見かけてしまったのだ。
「はんっ、そういうことね」
女子生徒達が一方的に話しかけているその光景を見て、悔しそうに、しかし勝ち誇ったように爪を噛んだ。

教室を出て、完全に見えなくなった輝十の後ろ姿。
「座覇くん……？」
輝十が自分の方を振り返ろうとしていた事、二人の女子生徒に腕を組まれて教室を出ていった事。それらを目撃していた埜亞は不審を抱く。
女子生徒二人は今風でしかも秀でて可愛い容姿をしていた。一概には言えないが、この学園において容姿端麗となると人間ではない可能性がある。
埜亞はフードを引っ張り、今よりも深く被って体をぷるぷるさせた。

不謹慎だとわかっていても埜亞の心身は正直だった。人外との接触に沸き上がる衝動を必死に抑え込もうとする。
埜亞はなんとなく見抜いていた。
人間と淫魔を完全に判別出来るわけではないが、雰囲気や行動でなんとなくわかるのである。
そう、あの三大式典の日のブロンド髪の女子生徒のように――
「い、急がなきゃっ」
埜亞は嫌な予感がしていた。どうも輝十はずば抜けて狙われやすい気がするのだ。
彼はこんな自分に仲良くしようと“初めて”言ってくれた。
それだけで埜亞はお礼を何度言っても足りないぐらいだった。きっと彼はこの学園をよく知らずに入学している。それだけでいい予感はしない。
埜亞は慌てて教科書を机の中に仕舞い、輝十の後を追うようにして食堂に向かうことにした。

女子生徒達に身を任せ、廊下を進む輝十。
最初から食堂を利用するつもりだったが、いかんせん広すぎる校舎だ。食堂の場所なんて把握しておらず、その時になってどうにかすればいいやと思っていたのである。
それが間違いだった。
黒いプレートを見上げると浮き出てきた文字。女子生徒達に誘導されて辿り着いたそこは“臨時食堂”である。
「なぁ、なんで臨時食堂なんだ？」
輝十は率直な疑問を投げかける。臨時というからには、何か事情がある時や時間外などに使う場所ではないだろうか。
「いいから、いいから」
「早く中に入ろー？」
この時、輝十は既に何かおかしいと感じていたが、入ってみない

ことにはわからないので、言われるがままに臨時食堂へ入っていく。
中はこれだけ広い校舎に対して考えるとこじんまりしているように感じた。
いくつか配置されたテーブルは長テーブルで、そこは普通の学食となんら変わりはない。しかし裏庭に位置する場所だからか日当たりが悪く、窓の外は生い茂った木で埋め尽くされていて見晴らしが悪かった。
昼食時だというのに他の生徒は全くおらず、雰囲気や場所からいっても今は使われていない食堂という印象だった。
「誰もいねえじゃん……」
薄暗くて人気がなく、全く活気がない。同じ校内とは思えないぐらいだ。
「うん、まあ臨時食堂だしね」
「“普通の食事”なら食堂だもん」
わざと強調された“普通”という言葉に違和感を抱く輝十。
「ピルプの容姿的には地味よね、こうして見ると」
「馬鹿ね、それがチエリのいいところなんじゃないのー？　なんていうんだっけ、ほら！　ぴゅあ？　そう、ピュア！」
輝十の存在を無視して、楽しそうに会話する女子生徒達。
「なぁ、本当にここで飯食うのか？　食堂のおばちゃんいなくねえか？　つーか、埜亞はいつ来るんだよ」
輝十は臨時食堂内を徘徊し、自販機のようなものを発見して立ち止まる。
「こないよ」
ショートカットの子が真顔でぴしゃりと言い放つ。
「は？」
「あの子ならこないよ」
そしてそれを確かなものにするかのように、セミロングの子がもう一度言う。
輝十は勢いよく女子生徒の方を振り返る。言っている意味が一瞬

理解出来ずにいた。

（6）

「話が違うじゃねえかよ」
輝十は納得出来ないといった様子で食ってかかったが、それは無駄に終わる。
「“ここに来る”とは一言も言ってないよ。ねー？」
「うんうん、それに……」
――――なにか、くるッ！
瞬間、ダダダダッ、と足下に降り注ぐ凶器と化したフォーク。輝十はそれを察知し、飛んで避け、テーブルの上でバク転し、両手をついて着地する。
普通に生活していたら、こんなにフォークが降って床に突き刺さる光景に出会うことはない。
「あっぶね。んだよこれ」
しかし輝十にとってこれぐらい避けることは屁でもなかった。
「食事をするのは私達なの」
「食べられるのは座覇くんなわけだよー」
「はぁ！？」
ショートカットの子が右手を前に突き出し、手の平を輝十に向かって翳す。
輝十は全くわけがわからず、状況を理解出来ずにいる。今わかることは危険に晒されているということだけだ。
「おとなしく掴まってくれたら説明するよ」
そしてセミロングの子も同様に左手を前に突き出す。
「愛でながらだけどね」
「意味わかんねえよ！」
輝十は足でテーブルを蹴って盾に使う。ツカツカツカツカ、と飛んでくるフォークとナイフがリズムを刻むようにテーブルに突き刺さった。

やべえだろ、なんなんだよこれはよ！
輝十は臨時食堂内を駆け、飛んでくるはずのないものが飛んでくるたびに避け続ける。
なにこれ超能力？　超常現象？　んなわけねえええええええ！
「おい、てめえら何が目的なんだよ」
駆け寄った柱の陰に隠れ、息を整えながら問う。
「なにって決まってるじゃーん、私達は食べる側」
「そして座覇くんは食べられる側」
まるで舞台のように、演技がかった口調で言い合う女子生徒達。
その刹那――
「！」
風が頬を撫でるかのように、一瞬にして二人の姿が輝十の真横に現れる。
杏那の時と同じだ。全く気配が読めなかった……。
細い指先が両側から顎をいやらしく撫で回す。
「……くっ」
全く胸が躍らない展開だ。どれぐらい踊らないかというと男にガチ告白されるくらいにだ。
二人が色目を使っているような気がするのは、決して童貞フィルターによるものではない。女が男に無理矢理……という状況に陥ったときの気持ちがわかってしまう複雑な心境だった。
「男と女で行う食事なんて、言わないでもわかるでしょ？」
「すごく肉感的で快感的な食事なんだけどねっ」
セミロングの子は不敵な笑みを漏らしながら、輝十の両頬を掴んで顔を寄せ、
「ひ、ひいいいいっ！」
耳にしっとりした生ぬるい吐息を吹きかける。
「か、顔！　顔ちけえってっての！　あ……あれ？」
顔を掴まれているから、ではない。顔だけではなく、体全体が金

縛りにあったかのように動かなくなる。
「なんだこれ……」
まるで全身を鎖で括り付けられているようだ。腕や足に力を込めても全く動きやしない。
「暴れないように最初だけちょっと……ね？」
「悶え苦しんでくれた方が燃えるもん」
輝十は絶句した。
この奇妙な状況はもちろんだが、それよりこの女子生徒達の変態脳にあっけらかんとさせられたのだ。
女子同士で話している下ネタの方が男子より断然リアルでえぐい、やばい変態濃度だと風の噂で聞いたことがある。マジじゃねえかよ……！
「すげえな、これがいわゆる肉食女子か」
なんて戯けてみせるが、輝十の心中は穏やかではない。
食堂で食事をするかのごとく女子高生二人に迫られるというＡＶ企画もの展開だというのに、輝十にとっては檻から出てきたライオンが餌を前に涎を垂らしている状況にしか思えなかった。
どうやって逃げりゃいいんだよ……って、こいつら普通じゃねえんだよな。どう考えたって無理じゃねえかよ！
いかにして隙を作るか、隙を見つけるか、を必死に思案する輝十。
「悪い気はしないでしょ？　ねー？」
「うんうん。大丈夫だよ、私達その道のプロだからね」
パチンッ、とセミロングの子が指を鳴らすだけで、
「ちょ！？」
カッターシャツのボタンが勢いよく弾け飛び、輝十の胸板が露わになる。
ボタンを一個一個外してくれるならまだしも、一気に吹っ飛ばすとか襲う気満々だなぁおい！
「も、もうちょっと優しくしてくれませんかね……へへ」
輝十は作り笑顔を浮かべるのが精一杯だった。

そんな言葉はもちろん女子生徒達の耳には届いていない。ショートカットの子は右手を輝十の胸板で撫でるように這わせ、顔を近づけてうっとりした視線を投げかける。
「本当にイイ匂い……これだけで酔えちゃいそう」
本当に酔っているかのように顔を紅潮させ、跪いて唇を輝十の腹部につける。
やばい。本格的にやばい。俺の童貞がやべえええええええええ！　こんな状況で心は拒否反応を最大限に発しているというのに……しっかりしろ、俺の息子おおおおおおおおおお！
「ちょっとーまさかチエリ奪っちゃうつもり？」
すっかりえろえろモードにスイッチが入ってしまっているショートカットの子の傍らで、セミロングの子が眉をつり上げて冷静に突っ込む。
「そうだけど？　私一番もーらいっ！」
「なにそれぇ！？」
セミロングの子がショートカットの子の顔を押しのけ、輝十から突き放す。
どうやら輝十の“最初”を奪うのはどっちが先か、ということで揉めているらしかった。
男として女に、しかも可愛い女の子に、取り合ってもらえるなんて最高に喜ばしいことである。
でもこいつらぜってえ俺じゃなくて俺の息子の初担当争奪だよな……。
輝十は複雑な心境だったが、それよりも今はこの隙に逃げ出したかった。が、体は動かず歯痒い思いだけが残る。
「最初は一回限りなんだから仕方ないじゃーん」
「って、おい！」
セミロングの子を説得するように言いながら、ショートカットの子が輝十のズボンを下ろす。
それも直にズボンを引っ張って下ろしたわけではない。まるでパ

ネルタッチのように人差し指をちょいと動かしただけで、カチャカチャっとベルトが外れ、しゅぽーん！　と一瞬で落ちたのである。
やばい、本格的にやばい。あと一枚脱がされたら俺の人生が始まってしまう。
童貞は捨てるより捧げたい、そんな処女のような崇高なる考えをお持ちの輝十にとって、こんな状況で知りも知らない女に奪われるなんて論外なのだ。
まだ俺は高校生、焦る時じゃねえんだよ！　３０超えてから出てこいよ！　それに……それに……おっぱいも出さねえくせに襲うようなおまえらの相手なんか出来るかあああああッ！
「おい、やめろ！　もう辞めてくれえええええッ！」
シュンッ！　と頬を何か鋭利なものが過ぎ去り、
「え……？」
瞬きをした次の瞬間には目の前にいたショートカットの子の姿がなかった。もし体が動くなら全身で驚きを表現しているところである。
ショートカットの子は壁に叩き付けられ、昆虫の標本のように何かに突き刺されていた。幸い急所は避けられており、制服の両肩が壁に釘付けのようになっている。
「ちょっと誰！？　誰なの！」
それに気付いたセミロングの子が慌てて入口に目を向ける。
「うっさいわね。汚い声で鳴くんじゃないわよ、この淫乱豚共」
舌打ちし、ブロンドの綺麗な髪を靡かせて、いかにも見下したような視線を女子生徒に送るその人物。
「確か、えっと……」
名前が思い出せずにいる輝十のが視界に入ったようで、
「えーやだ。もうっ、忘れちゃったの？　瞑紅聖花だよ。今度こそ覚えておいてね、輝十くん。絶対だよ？」
さっきの暴言を吐いていた女の子とは思えないぐらい、甘ったるい声で話しかける。

ショートカットの子に攻撃を繰り出したのは、突如現れた聖花だった。何故彼女がここに現れたのかはここにいる誰もがわからない。それでも輝十にとっては、今の彼女が自分の助け船であろうことさえわかれば充分である。

「どうせあんたも同じ穴の狢でしょ」

嘲笑いながらショートカットの子が言って、それを黙って聞いていた聖花は無言で手の平を翳す。

「一緒にしないでくれる？」

制服を突き刺していた何かが移動し、顔の真横に突き刺さった。壁が紙粘土のように砕け、破片が床にボロボロと落ちていく。

しかしショートカットの子は全く恐るる様子も慌てる様子もない。校舎の壁に突き刺さるぐらいの鋭利さと殺傷能力を持ったものだというのに、玩具の弓矢ぐらいにしか思っていないような、そんな態度だった。

冷ややかな視線を聖花に注ぎ、セミロングの子もまた冷静で冷たい目をしていた。

（7）

「あんただって気付いてんでしょ？　このピルプの匂いに」
「だったら？」
聖花は腰に右手を添え、傲慢な態度で自分を睨み付けてくる女子生徒二人を見据えている。
「私達が先に手をつけたんだから！」
「そうよ、邪魔はさせない！」
こんな時だけ意気投合する女子生徒二人を見て、聖花は「はぁ～」と気の抜けた大きな溜息をつき、
「なにそのピルプの牝（メス）みたいな流れ。さっきまで二人でチエリ取り合ってたくせにバッカみたい」
本気で呆れながら言う聖花。
女子生徒二人は唇を噛みしめて言葉を飲み込む。これ以上何を言っても無駄だと判断したのか、揃って両手を聖花に向かって翳す。
「なーに、そのだっさい構え。それで私に勝てるとでも？」
食堂の奥から、ガタガタガタガタ、とまるで怪奇現象かのように物音だけが響き始める。
それを背後で感じ取っていてもなお、聖花は余裕で冷静だった。はいはい、といった小馬鹿にした態度で一歩ずつ輝十に歩み寄っていく。
「ちょ、瞑紅さんッ！」
輝十が叫ぶよりも早く、さっきまで壁に突き刺さっていたもの二本が聖花の背後に回り、その姿を現した。
一本の釘のように重く鋭い姿をしていたソレは、まるで桜が咲いたかのように可憐に、そして美しく舞うように開いて見せた。
「鉄の扇子……？」
輝十がそこで目にしたものは、鉄扇子が意志を持っているかのように飛び、開き、そして動き、聖花を背後から攻撃しようとするす

べての食器物を叩き落とす光景だった。
「ちっ……」
女子生徒二人は次々に叩き落とされていく食器物を目の前に、揃って舌打ちした。
「バッカね、その場にあるものだけを武器に使おうとするなんて。常備もしてないの？」
聖花は女子生徒二人にどや顔を向け、次に自分の名を呼んでくれた輝十に熱っぽい視線を送り、
「瞑紅さんじゃなくて聖花！　せ、い、か！」
「え……」
駄々をこねるように言い出す。輝十はその場でぽかーんという擬音通りの顔をして固まった。
「名字じゃなくて下の名前で呼んで欲しいのっ！　呼び捨てでぇっ！」
こんな時に何を言っとるんだこいつは……という視線を聖花に送る輝十だったが、もちろん聖花は気付いていない。
「あんたこそピルプの牝みたいなこと言ってるじゃない」
「そうよそうよ、マジ気持ち悪いですけどー」
笑顔を消し、無の表情で女子生徒達の方へ向き直す聖花。
「うっさいわね、豚ビッチ。私はあんた達みたいに体さえ手に入ればオッケーみたいな下級脳じゃないの。ちゃんと形から入る主義なのよ」
と、言いながらも今の台詞は内心頭にきているのだろう。米神に怒りマークを刻んだまま、背後で聖花の援護をしていた鉄扇子を両手に持って構える。
それを見た女子生徒達はテーブルを叩き割り、脚を引っこ抜き、それを武器として手に持って構えた。
今まさに自分をかけた戦いが目の前で起きようとしている……！
「いやいやいやいや、おかしいだろ！　俺の童貞っていつからこんな値打ちが出たんだよ！」

絶対におかしい。なんかもう全部がおかしい。
輝十はわけがわからないまま、目の前の状況をどうにも出来ずにいた。

一方、その頃。
輝十の身を心配し、後を追うようにして食堂に向かった埜亞は、食堂内を探し回っていた。しかし“通常運営されている食堂の方”なので、もちろん輝十達を発見出来ずにいる。
「座覇くん……」
食堂内は賑わっており、例えこの中に輝十がいても見つけることは難しいかもしれない。
真っ白な制服に真っ黒なパーカーを羽織り、しかもフードを深々と被って分厚い本を抱きしめている。それだけで十分目立ってしまう埜亞は、視線を感じるたびに小さく悲鳴をあげ、泣きそうになりながら、おろおろ、きょどきょどしていた。
こ、こんなに人が多いところ……一人じゃ耐えられないっ……。
埜亞は端っこで立ち止まって壁に額をつけ、目を閉じ、小さく深呼吸をして心を落ち着かせる。
大丈夫、ここにいる半数は人間じゃないんだもの。そう思えばわくわくしてくるはずだよ、埜亞！
「だいじょうぶ、だいじょうぶ、こわくない、こわくない……」
そう自分に何度も言い聞かせている時、
「なーに一人でぶつぶつ言ってるの？」
「ぴゃぁあああああっ！？」
突然、何者かに背後から声をかけられて、埜亞は瞳孔を開いたまま飛び上がり叫び声をあげた。
何事か、と食堂内の生徒達の視線が一斉に埜亞へと集まる。
「さすがにそこまで驚かれると傷つくんだけど」
「と、妬類、く……ん！？　ご、ごめ、ごめんなさい……ですっ」

頭上が床につくぐらい深々と頭を上げ、謝罪する埜亞。
「で、黒子ちゃんはここで何やってたのかなー？」
大きな紙袋を抱きかかえ、その中からチョコクッキーを取りだして食べながら問う杏那。
「く、くろ、くろこ！？」
「うん。だってほら、舞台とかでいるじゃーん。真っ黒い衣装で介添えする人。きみ、黒いパーカーのイメージ強いからさぁ」
「そ、そうですか……」
「あっれー嫌だった？」
埜亞が首を横に振るのを確認してから、杏那は本題に戻る。
「で、で、何やってたのん？」
「そ、その……」
杏那は俯く埜亞の周辺を見回しながら、あることに気付く。
「輝十くんの姿が見えないようだけど？」
言って、いつもの緩い表情を消して食堂全域を見回す杏那。
「そ、それがっ……！」
がばっと顔をあげ、懇願するような表情で杏那の顔を見る埜亞。
「あれー？　黒子ちゃんって眼鏡かけてるんだね。すっごい！　そんなトンボみたいな眼鏡初めて見たんだけど」
眼鏡を介してとはいえ杏那と目があってしまい、慌てて俯く埜亞。興奮のあまり、つい顔をあげてしまったのである。
「せっかくならアラレちゃん眼鏡とかにしたら？　オシャレだし。それ度は入ってないんでしょー？」
「え……？」
素で驚いている埜亞の様子に気付き、
「あ、やべ。ごめん、今のなし」
自分の口を手の平で覆い隠す杏那。
「さすがです。やっぱり何でもお見通しなんですね」
それで確信したのか、スムーズな口調になる埜亞。
今まで堪えていたものが弾け、好奇心と恐怖心の入り交じった視

線を杏那にぶつける。“人外”を目の前にして、今にも零れてしまいそうな程興奮していた埜亞だが、そこは空気を読んで制御していた。
「……」
杏那は答えず、埜亞の抱く大きく分厚い本に視線を向け、目を細める。
「きみは理解してこの学園を選んだようだね。だからもう気付いてる。違う？」
埜亞は無言で頷いた。
「私は、私には、この学園しかないと思って選んだんですっ。でも……でもっ、きっと、座覇くんは……！」
「きみが慌てて捜しているところをみると、どうやら早速事が起きちゃったみたいだねぇ」
呑気に言う杏那を急かすかのように、
「座覇くんを捜さないと！　このままじゃ不正にっ……！」
まあまあ、と杏那は埜亞を宥めて、紙袋から取り出したチョコクッキーを差し出す。
「とりあえずクッキーでもどう？　これマジ美味いんだよねぇ」
「と、妬類くん！　こんなゆっくりしている場合じゃ……！」
受け取ってもらえず宙ぶらりんになったチョコクッキーを見て、何を思いついたのか杏那は口を緩める。
そしてそのチョコクッキーを自分の口元に運び、軽く口づけをした。
「ヒーローは遅れてやってくるものじゃないのー？　ねっ？　だからそんなに慌てなくても大丈夫だって」
なにが大丈夫なのか理解出来ない埜亞は、もちろん納得出来ず、
「で、でもっ……！」
再度懇願しようとして顔をあげた瞬間、
「んぐぅっ！？」
「ほら、黒子ちゃん。糖分とって落ち着こうね」

杏那は埜亞の口に先程のチョコクッキーを無理矢理押し込んで、
にっこりと悪魔のように微笑んで見せた。

（8）

「ね、美味しいでしょそれ。輝十くんちのお店のやつなんだよん」
「座覇くんちの……？」
「うん、輝十のお父さんが西洋菓子店やっててね」
「そうなんですぁ……って！　こ、こんなにゆっくりしてる場合じゃっ！」
杏那のまったりした雰囲気に包まれて流されてしまうところだった埜亞は、なんとか踏み止まって全力で突っ込む。
「せっかちさんだなぁ、黒子ちゃんは。それ食べて、音楽室寄って、そしたら行こうか」
「お、音楽室？」
何故音楽室に寄らなければならないのか、埜亞にはわからなかった。しかしその言葉の中には“既に輝十達が何処にいるか見当ついている”というニュアンスを感じる。
「そ。音楽室にあると思うんだ。ちょっとそれを手配しないと大変なことになるからねぇ」
「あ、あのっ……座覇くんが何処にいるか、既にわかってるんですか？」
「んー？　どうだろうねぇ」
杏那は笑ってわざとらしく明後日の方向を向いた。
そして一瞬、いつものだらしのない笑みを消して真摯な顔つきになる。
「むしろ俺達にわからないことがあるとすれば、それは人間の突発的予想外の行動や感情的なものだろうね」
言って、いつもの気さくな笑みを取り戻して肩をすくめる。
杏那はクッキーを食べながら音楽室の方へ歩き出し、
「ま、待ってください！　私も、行きますっ！」
その後を埜亞が小走りでついていった。

女の戦いというものは、男が想像している以上に卑劣で乱暴で生死をかけた戦いであることは知識として知っていた。
例えば好きな男をかけての争いとなれば、想像を絶するものがある。
女という生き物は男が思っている以上に強い生き物なのだ。生命を宿すだけの精神力や体力、忍耐力が元々備わっているからかもしれない。
それでも、これはおかしい。
「しょ、少年漫画かよ！」
それが目の前の状況で得た輝十の感想である。
臨時食堂という密閉された限られた空間で、人が飛び、回転し、戦っている光景は常軌を逸していた。
しかし不思議と恐怖感はなかった。おかしいと思う一方で、どこか受け入れてしまっている自分がいたのである。きっと平和な一般家庭で育っていればこんな風には思っていなかったはずだ。
そもそも既に親父が非常識だからな、うちは……。
嫌なものを思い出し、即刻脳裏から取っ払う輝十。
乱暴に戦う女子生徒達と違い、聖花は鉄扇子を体の一部かのように操り、舞うように攻撃を交わし、受け流し、時に攻撃する。まるで演舞のようで見惚れてしまうほど美しかった。
やっていることは狂気的なのに、何故か綺麗に見えてしまうから不思議だ。
二人を相手に全く気後れしない聖花は相変わらず余裕そうで、
「しつこい女は嫌われるのよ？　だからもう諦めなさいよ、あんた達！」
鉄扇子で女子生徒達の手元を狙い、武器をはね飛ばした隙をつき、聖花は飛び上がった。命中した手首を触る女子生徒達目がけて、両足を開いて蹴りつける。
女子生徒達の胸にクリーンヒットし、そのまま倒れ込んだ。

「これは……ッ！」
輝十は生唾を飲んで、その光景を見守る。
聖花が二人を蹴り飛ばして倒したことよりも、飛び上がったと共に聖花のおっぱいがワンテンポ遅れて飛び上がったこと。そして胸を蹴られたことにより女子生徒達のおっぱいがむぎゅっと形を崩して弾力感を発揮したところに釘付けになったのである。
「なるほど、これが俗に言うおっぱい戦争か……」
この歴史的瞬間に立ち会った俺が勝敗を判断してやらねばなるまい！　などと息を荒くしていたが、そんなことを考える余裕はすぐに打ち砕かれてしまう。
女子生徒達は倒れたまま、口の端をつり上げ、
「！」
両側から聖花の足首を掴む。
「なに勝ったつもりでいるわけ？」
「まだ終わってない」
女子生徒達はわざと倒れて隙を作り出したのである。
「こんの豚共がああああああああ！　往生際が悪いわね！」
返事の変わりに爪をたてて、わざと足首に食い込ませていく。
「ちょ、瞑紅さんッ！」
ずっと聖花優勢だった争いが一瞬で入れ替わってしまったのだ。
さすがの輝十も聖花の名を叫び、おっぱいは一旦胸の内に納めた。
「聖花！　せ、い、かぁっ！」
自分が危機的状況だというのに、それでも下の名前で呼べと言う聖花。
輝十の目から見てもそんな余裕が今あるとは思えない。それでも聖花は言う。
「それどころじゃな……」
「そっちの方が大事なのっ！」
鬼のような形相で言うので、恐怖で輝十は縮こまってしまう。と、同時に鬼ならこんな状況に陥っても大丈夫だよな……という結論に

至る。
その時――
勢いよく開いた扉から二人の陰が入り込み、
「ざ、座覇くん……！　だいじょうぶですか！？」
真っ黒な様相とは裏腹に可愛らしい声をした人物と、
「へぇ、ここにこんな場所があったとはねぇ」
呑気に臨時食堂内を見回しながらゆったり入ってくる場違いな人物。
「おまえら！」
言うまでもなく、それは埜亞と杏那だった。
埜亞は輝十に駆け寄ろうとするが、それを杏那が腕を引っ張って引き止める。
「と、妬類くん……？」
にこにこしているようで本心は全く笑っていない。埜亞が振り返って見た時の杏那の顔は、そんな表情をしていた。
まるで妖狐のように、笑みの中に本心を隠し込んでいるような気がしたのである。ここで手を振り払う勇気はもちろんないし、振り払ってはいけない気がした。
「ひっ！？」
と、思った矢先、埜亞は杏那に引っ張られて腕の中にすっぽり入ってしまう。後ろから手を回され、逃すまいと首を絞めるような形でだ。
埜亞はわけがわからず、半泣きになりながらその腕にしがみつく。
「なっ！？」
それを見て驚いた輝十が声をあげる。
「おまえらは完全に包囲されている！　この子がどうなってもいいのか！」
「なんっで警察と犯人が一緒になってんだよ！　つーか、助けにきたんじゃねえのかよ！」
「えー？」

全力で突っ込む輝十だったが、その声は杏那に届いていない。なぜなら、
「しかもなんでヘッドホンつけてんだよてめえ！」
「なにー？　聞こえないんだけどー？」
「最初から聞く気ねえだろ！」
音楽室で拝借してきたヘッドホンを装備していたからである。
「ああ、うん、そうそう。音楽プレイヤーの方は元々俺が持ってたやつだよん」
「聞いてねえよ！」
元気そうな輝十を見て安心したのか、杏那は無視して聖花達に目を向ける。
女子生徒達は目を逸らし、聖花は面白くなさそうな顔をしていた。
「さて、それ相応のお仕置きをしなきゃだよね」
びくっとする女子生徒達とは違い、聖花はむっとした表情で、
「なんで何もしてないのにお仕置きされなきゃいけないのよ。意味わっかんない」
「えー？　なにー？　聞こえないんだけどー？」
杏那は馬鹿にするような口調で言って、耳を傾ける仕草をする。
「キィィィィ！　なにその態度！　ちょーむかつくんだけど！」
これがこの子の本性なんだろうなあ、とおっぱいを横目で見ながら輝十は思う。
「ほ、本人の同意を得ず……そ、その……だめです！　こ、校則違反です！」
杏那の腕を下げ、顔をひょこっと出して援護する射撃する埜亞。
聖花は瞬間移動するかのごとく、埜亞の目の前に移動し、
「ひっ！？」
腰に手をあて眉間にしわを寄せたまま、まじまじと顔を覗き込んだ。
「なにがだめなのよ？」
「えっ！？」

「なにがだめで、なにが校則違反なのよ？」
「そ、そそそ、そっ、それは……」
「なにをするのが校則違反なのよ？　あん？　言ってごらんなさいよ？　ほら、ほらほらほらほら！」
聖花に問い詰められ、パニックを起こす埜亞。
もちろん“なにが校則違反か”は承知の上で、わざと言わせようと聞いているのである。
「やーね、かまととぶりやがって。言いなさいよ、“本人の同意を得ず、性交を行うことは校則違反です”って。ほら」
「やっ！？」
聖花は埜亞にでこぴんを食らわし、それでもなお顔を近づけて問い詰める。
「同意？　性交？　校則違反？」
それを聞いた輝十はなんのこっちゃ状態で、執拗に瞬きを繰り返す。
「やだ、知らないの？　だーりん。インクブスもスクブスもピルプと同意なしに本番するのは校則で禁止されてるの。でも逆を言えば同意を得ていればオッケーってことになるわ」
「そ、そうだったのか……って、俺いつからおまえのだーりんになったんだよ！？」
その事実よりもだーりん説への疑問が輝十の脳内で渦巻く。
「聞きたい？　ねーねー聞きたいっ？」
その質問が彼女のスイッチを入れてしまったのか、輝十の目の前に移動し、甘ったるい声で詰め寄ってくる。
「いえ、結構です」
即答し、聖花がむくれ面になったところで、輝十が核心に迫る。
「ところでピルプとかチエリとか、さっきからよくカタカナを聞くんだけどよ。なんなんだ？」
「それはっ……」
埜亞が説明しようと口を開いたところで、それを杏那が手で封じ

る。
「？」
どうしてここで言わせてくれないのだろう、と埜亞は疑問に思った。今ここで言うべきことではないだろうか、と流れ的に思ったのである。
だからこそ顔をあげてまで杏那を見上げてしまった。
杏那はそれに応えるかのようににっこり微笑み返し、
「きみの出番だよ。大いにやっちゃってね」
言って、後ろから彼女のフードをとり、眼鏡を外した。

（9）

「！」

フレームが外れ、そこに広がるのはいつも以上に広大な視界。曇った世界ではなく綺麗にくっきり見える世界。

空気を肌で感じ、髪を撫で、光が自分を照らしているような気さえする。

そして直に感じる――その場にいる人達の視線。

埜亞の小さな体はぷるぷる震え始めていた。目からは涙が溢れて零れそうになり、下唇を噛んでそれを堪えようとしている。

「の、埜亞ちゃん……？」

その状態を心配する輝十だったが、それ以上に埜亞が想像以上に可愛らしい女の子だったことに驚いた。

眼鏡をとったら美少女、なんていうベタな展開はよくあることだ。しかしそれに加えて彼女はフードを深々と被っていたのだから、正直顔なんて全くわからなかった。気付いていたのは、おっぱいが大きいということぐらいである。

きっと一度もいじっていないであろう真っ黒な髪は、光を反射して輝くほど艶やかだった。ボブヘアーというよりおかっぱと表現した方が的確だろう。人を選ぶ真っ直ぐに揃えられた前髪もよく似合っている。

それだけの可愛らしい容姿とおっぱい兵器を持ち合わせていながら、何を恥ずかしがることがあるのだろう。

輝十はそう思っていたのだが、埜亞にとってはフードと眼鏡をとられるということは一生一度の一大事だった。

それを身をもって思い知るはめになる。

「い、い、いっ……」

俯いてぷるぷる小刻みに震えながら、握った拳を胸の前で振り、必死に堪えてはいるものの……、

「おい？　おーい、埜亞ちゃん？　ちょ！　待っ……」
それが爆発するであろうことは、何度も目の当たりにしている“輝十には”安易に想像出来た。
「くる！」
耳を抑えた輝十が叫んだ頃には、時既に遅し。
「イヤァァァァァァァァッ！」
あの殺人ボイスが突き刺すように響き渡った。
よっぽど素顔を晒されたことがショックだったのだろう。格段に威力が増している。
「な、な、なにするんですかぁあっ！？」
叫んで少し冷静を取り戻したのか、尽かさずフードを被って眼鏡を装着。そして怒気を含んだ声色で、涙を拭きながら杏那を責める。
「ごめんごめーん。それより眼鏡を拭いても涙は拭けないんじゃない？」
「ほ、ほっといてくださいっ！」
カチャカチャと眼鏡のレンズを一生懸命擦っていた埜亞は顔を真っ赤にして、杏那の胸元をとんとん叩く。
「まあまあ、落ち着いて。ほら、見てごらんよ」
杏那は埜亞を宥めながらヘッドホンを外し、その状況を見るよう目配せする。
「ひっ！」
口元に手を添え、その残骸を目にする埜亞。その片隅で、
「なに食って育ったらそんな声が出んだよおまえ……」
目を白黒させ、ふらふらしながら立ち上がる輝十の姿があった。
「ざ、座覇くん！　だ、だいじょうぶ、ですか！？」
「ああ、耳以外はな。……って、あれ？　体が動く！」
手をぐーぱーぐーぱーさせながら、自分の体が自由になったことを確認する。
「どういうことなんだ？　これは」
埜亞の声に絶えられたのは輝十とヘッドホンをしていた杏那だけ

だった。その場にはまるで殺虫剤をかけられた虫のように、蠢きながら気を失っている女子生徒達と聖花の姿があったのである。
「わ、わた、私っ、なんてことを……」
あわあわしている埜亞の肩に手を置き、杏那がそれを手を振って否定する。
「悪魔にとって攻撃的な音波になるよう、黒子ちゃんの声に予め俺の力をちょっと上乗せさせてもらったんだ。人間で言うと黒板を引っ掻いたような音を何倍にもしたようなやつ？」
杏那はテーブルに置いていた紙袋を再び手に取り、中からチョコクッキーを出してみせる。
輝十と埜亞は揃って引きつった顔をしていた。想像もしたくない音だからだ。
「悪魔的に……ねえ」
輝十が意味深に呟き、そんな輝十を埜亞が見つめ、杏那はわざと首を傾げて見せた。
「ま、とりあえずここじゃなんだから移動しよーよー」
チョコクッキーを口に運びながら背を向ける杏那。
埜亞は輝十に視線を送り、どうするのかを窺っている。その輝十はというと、
「おいどうすんだよ、こいつら」
倒れたままの三人を眺めながら杏那に問いかけた。
「んー？　ああ、放っておいても大丈夫大丈夫。俺ら頑丈だから」
杏那は振り返りもせず言って、そのまま臨時食堂を出ていった。
「ざ、座覇くん……」
急かすように埜亞が輝十の名を呼び、
「んあああああもう！　大丈夫つっても放ってはおけねえだろ！」
頭をわしゃわしゃ掻き乱し、一人一人臨時食堂の入口に運ぶことにする。
「そ、そう、ですよねっ！」
それを見た埜亞は口元を緩め、女子生徒達の足を持ってそれを手

伝った。
「ああ、心配すんな」
「え……？」
埜亞が女子生徒の足を持ったことに気付き、輝十は突然声をかける。
「俺、パンツ興味ないから」
「ええっ？」
言って、女子生徒の脇の下に手を入れ、胸の前で手を組んで運んでいった。
埜亞の立ち位置だとパンツを拝むことが出来るだろうが、どう考えてもおっぱいに手があたるこっちの位置の方が俺得だ。
二人は淡々と臨時食堂の入口に三人を運び出した。
「とりあえず廊下に出しときゃなんとかなるだろ」
ふぅ、と汗を拭う仕草をしながら手の感触を確かめる輝十。
「人助けに見せかけて実はおっぱい触りたかっただけだよねぇ、輝十くんって」
壁にもたれかかって輝十達を待っていた杏那が冷静に突っ込んだ。
「おまえな、俺をなんだと思ってんだ」
「おっぱい星人」
「そうだ、俺はおっぱい星からやって来たおっぱいの素晴らしさを伝道するための使者である」
腕を組んで頷きながら、まるで政治を語るかのような口調で言う輝十を無視して、
「黒子ちゃんいこいこー」
「え？　えっ！？」
杏那は埜亞を誘って先に歩き出し、埜亞は輝十と杏那を何度も見比べて困っていた。
「おい！　無視すんな！」
使者の務めを語っているうちにどんどん先に進んでいく杏那に気付き、怒りながら追いかける輝十。

それを見て埜亞は安心し、ほっと胸を撫で下ろして二人の背中小走りで追った。

「うん、ここなら丁度いいね」
杏那の後を追って辿り着いたのは、高いフェンスに囲まれた緑色の地――屋上だった。
校舎が洋風で高級感溢れている割に、屋上は割と一般的だった。もちろんフェンスが異常に高いところや、所々にベンチが備わっていたり、石碑のようなものがあったり、と突っ込みどころはある。それでも地面が見慣れた緑色でふにふにした感触がする、というだけでなんだか安心するのだった。
「誰もいねえんだな、昼休みだってのに」
周囲を見回しながらベンチに腰かける輝十。
「うーん、ここは石碑があるからかな」
言って、杏那は輝十の横に腰掛ける。
「え、え、えっとぉ……」
もちろんベンチにはあと一人、しかも女の子が座るぐらいのスペースは十分ある。しかし多少は密着せねばなるまい。
埜亞は残されたスペースに自分なんかが座っていいものか、と立ったまま葛藤していたのだった。
「ん？　なんだよ、座ればい……」
「黒子ちゃん。せっかくだからそのまま講義したげてよー」
輝十の声を遮って、杏那が埜亞の分厚い本を指しながら提案する。
「講義ぃ？　つーか、黒子ちゃんって誰だよ黒子ちゃんって」
「黒子ちゃんは黒子ちゃんだよ。ね、黒子ちゃん？」
二人の視線が同時に突き刺さり、分厚い本で顔を隠したままおどおどする埜亞。
「彼女が教えてくれるってさぁ。輝十くんのわからないカタカナについて」

「お、そうか！　そりゃ助かるぜ。わっけわかんねえんだよ。なんかもう全部！」
埜亞はそれを聞いて意を決したのか、ゆっくり本を下ろして開いた。
「わかりました！　頑張ってみますっ！」
中から一本のチョークを取りだし、緑色の地面に絵を描いていく。
「まず“ピルプ”ですが、これは私や座覇くんのこと、つまり“人間”を指します」
埜亞が人間とは思えない、幼児レベルのイラストを描いていく。
「いやでもよ、それ見た感じ妖怪じゃね？」
「に、人間ですっ！　このイラストはイメージです！」
その画力でお菓子のパッケージだったら、イメージと違いすぎてかなりクレームくるだろうなぁ、なんて思いながら輝十は黙って耳を傾ける。
「そして妬類くんやあの女子生徒達は“悪魔”で“淫魔”です」
「はい、先生！」
手をあげる輝十の名を恐る恐る呼ぶ埜亞。
「淫乱な悪魔と書いて淫魔、つまりそれですか？」
顔を真っ赤にして二の句が継げずにいる埜亞をフォローするかのように、
「男の姿をしているものを男性型淫魔“インクブス”、女の姿をしているものを女性型淫魔“スクブス”っていうんだよん」
その次を説明する杏那。
「インクブスは言わば人間の男と大差ないよ、見た目が美しいだけで」
「スト――――――ップ！」
輝十が尽かさず杏那の言葉を遮る。
「なにー？」
「見た目が美しいだけで、に意義あり！」
「はぁ？　どう見たって美少年でしょ、俺。一人猿の惑星が何を反

論しようっていうのかなー？」
「ひ、一人猿の惑星！？」
聞き捨てならない語句に反応した輝十が杏那の胸倉を掴み、
「お、落ち着いてくださいぃいっ！」
慌てて止めに入ろうとする埜亞。
埜亞の介入で二人は一旦離れて落ち着きを取り戻す。そして杏那が補足を続ける。
「ま、スクブスよりマシってこーと。スクブスはほんっとえげつないもん。あれこそ淫乱だし、下品だし、精をなんだと思ってんのかねぇ」
ほとんど後半は愚痴のようで、同じ悪魔でも型によって不仲なんだということが理解出来る。
呆れながら杏那が語り終えたのを確認し、埜亞が続きを説明する。

（10）

「そ、それで……この栗子学園には“淫魔”とピルプ、つまり“人間”の二つの種族がいるわけです」
「は、はぁ！？」
輝十がもっともらしい反応を示したので、埜亞は苦笑しながら杏那に視線を送った。杏那は視線を受け、肩をすくめて溜息をつく。
「つ、つまり、この学校には悪魔と人間がいるってことか？」
「はい、そうです」
輝十はがばっと立ち上がり、名探偵のごとく杏那を指差し、
「てめえ悪魔だろ！　ぜってえ悪魔だろ！　悪魔だと思ったんだよ、この悪魔野郎！」
数々の出来事を思い出し、物凄い勢いで捲し立てる。
「あのねぇ、俺は二人で過ごしたあの夜に言ったよね？　インクブスだって。聞いてなかったわけぇ？」
「ふ、ふたりで、すごした……あの、夜？」
思わず気になった部分を顔を真っ赤にして復唱する埜亞。
「だあああああもう！　勘違いを招くいい方をすんじゃねえええええ！」
「んーじゃあ、一緒に寝たあの夜」
「てめえが勝手に部屋で寝てただけじゃねえか！　俺は許した覚えねえ！」
またもや輝十が杏那の胸倉を掴む形になったので、
「ま、待ってください！　落ち着いてぇえっ！　きゃあっ！？」
慌てて埜亞が身を乗り出して止めに入った……まではよかったのだが、勢い余ってベンチで額を打ち付けてしまう。
「ふん。埜亞のおっぱいに免じて今は許してやろう」
「いいもの見れた、みたいな顔で言わないでくれるかなぁ」
「お、落ち着いてえぇえっ！　叫びますよ、私叫んじゃいますよ！

？」
それを聞いた輝十と杏那の顔色が瞬時に変わり、
「俺が悪かったよ、杏那くん」
「いやいや俺こそ悪かったよ、輝十くん」
棒読みで仲直りする。埜亞の絶叫を聞くよりはマシだ、と揃って考えたのである。
「と、とにかく……この栗子学園は淫魔と人間の半々で構成されています」
「この制服の色でってわけじゃないんだな」
自分の黒い制服を見た後、埜亞の白い制服を見る。同じ人間なのに色が違う時点で、そこで分けているわけではないらしい。
「黒も白も俺らとピルプの半々で構成されてるんだよ、平等にね」
黒い制服を引っ張って見せつけながら付け加える杏那。
「ここまではわかりますか？」
「うん、まあ……なんとか」
輝十の返事を聞き、埜亞は人間らしきイラストと淫魔らしきイラストの間にハートマークを書き始める。
「なにそれ、お尻？」
「ハートですっ！」
逆さから見たせいか、お尻にしか見せなかったそのハート。それが重要なキーワードを示していたのだ。
「ここからが本題です。座覇くんが狙われたのは、このためなんです」
「お尻がハートでハートがお尻……いやちょっと意味わかんないです」
手をあげながら言う輝十に、
「おしりじゃないですうぅっ！」
怒りながらハートを書き直す埜亞。怒ると言っても元々温厚なオーラを纏っているからか、ただ拗ねているだけのように見える。
傍らでそのやりとりを眺めていた杏那は溜息をつき、輝十の首も

とに顔を近づけて犬のようにくんくん匂いを嗅ぎ出す。
「なっ！　なにすんだよてめえ！」
「匂いだよ、匂い」
「はぁ！？」
と、言った矢先に聖花や女子生徒達の台詞を思い出す。そういえばあいつらも蜜の香りがどうのこうのって……。
「ピルプの初体験、つまり“童貞”や“処女”のことを俺達の間では“チエリ”って呼ぶんだけどね。そのチエリからは特殊な蜜の香りがするってわけ」
杏那が自分の鼻を指しながら言う。
「それってつまり……俺が童貞だから蜜のような香りがする、と」
「うん。だから言ったじゃん俺ぇ。輝十くんは童貞の甘い蜜の香りがするって。しかも普通より濃い」
全く嬉しくないその事実に混乱し、額を抑えて項垂れる輝十。
「だ、だいじょうぶ……ですか？」
心配した埜亞が声をかけるが返事はなかった。
それを見かねた杏那がフォローするかのように一言添える。
「もちろん黒子ちゃんからもするよん。花の蜜の香りに誘われる蜂みたいに、俺達はその匂いでピルプを判別してるからねぇ」
「つまり俺は花か」
そう思うと可憐な気がしてきた。
「あ、あの……わ、わた、私もですが……この学園の人間はみんなお花なんです。これから咲く、まだつぼみのお花さんだけなんです」
「それって……」
言って恥ずかしくなったのか、埜亞はチョークを地面につけてもじもじするが、あっという間にチョークが折れてしまった。
「そ。ここは童貞と処女の人間しかいない。だからべっつに恥ずかしがることはないんだよー？　ぜーんぜんないんだよー？」
輝十の肩に手を乗せ、にひひ、と嫌味に笑いながら言う杏那。
「てめえぜってえ馬鹿にしてんだろ」

手を払いのけ、ガルルルと今にも噛みつきかねない狂犬のような眼差しで杏那を睨み付ける。
「まあまあ。つまりね、輝十くんは普通のチエリより匂いが濃いんだ。それだけ俺達にとっては格好の獲物ってわけ。性的な意味で」
「性的な意味で……」
どんよりした顔をする輝十。
もちろん性的な意味で狙われるとして、それが女子生徒だったら悪い気はしない。しかし女子生徒といってもまず人間ではない。それにこの流れからすると……。
「聞いてもいいか？」
輝十はどちらかにというのはなく、ただ問いかける。
「男の淫魔、そのインなんとかってのは、人間の男を狙うことも……」
「あるよそりゃ」
輝十が言い終える前に杏那が即答する。
「ピルプほど性別に概念あるわけじゃないし？　欲するのは精だもん。でも好き嫌いとか相性はあるからねぇ。そこもピルプと大して変わらないと思うよ。ピルプだって同性を性的対象として見る奴だっているで……って、ちょっとぉー聞いてる？」
「ざ、座覇くん！？　座覇くん！　どうしたんですか！？」
背もたれに背中を預け、白目ですっかり意識を失っている輝十を埜亜が一生懸命揺らして起こそうとする。
「はっ。俺は一体……」
意識を取り戻した輝十は、杏那の言葉を思い出してうんざりした顔をする。
「つーか、俺にとっちゃ悪魔だろーが人間だろーが男に気をつけなきゃなんねえのは変わんねえじゃねえか」
ぼそぼそと呟きながら、死相の出た顔で深々と溜息をつく。
「退化して人間と共同生活が送れるまでになったとはいえ、所詮俺達は悪魔だからねぇ。自分をコントロール出来ない奴だっているか

もよ？　そういう輩がきみ達の貞操を狙うってわーけ」
輝十はその言葉を噛みしめながら、この学園に来た時のことを思い返す。
そういえば三大式典の時もそうだった。やたら視線を感じたのは、恐らくこういうことだったのだろう。そして聖花がやたら密着してきた時に感じた違和感は、人間じゃなかったからだ。
「おっぱいはおっぱいでも人外だと戸惑いが出るんだろうな、本能的に……」
でも違和感を抱いた後はすっかり慣れて、堪能していた俺の順応力すげえ。
遠い目をして何かを悟っている輝十を埜亞は不思議そうに見つめる。
「ま、本来はあっちゃならないことだし、あくまでここは学舎だからねぇ。心配しなくても俺は二人に手を出したりはしないから」
両手をあげて、意志がないことを示す杏那。
「もちろん頼まれればいつでも抱きますけど？」
にっこり微笑み、埜亞は顔を真っ赤にして聞かなかったことにし、輝十は殺意のこもった鋭い視線を杏那に向けた。
「あーあ、妙な学校にきちまったなぁ。なんだよ悪魔って。ファンタジーかよ」
「ま、まぁ、今は悪魔が執事をする時代ですし」
「そ、そうなのか？」
思っていたより世の中はファンタジーに染まっていたんだな……俺が興味なくて目を向けていなかっただけで、時代は既に変わっていたにかもしれない。
「埜亞ちゃんはわかっててこの学校にきた……んだよな？」
「はいっ！　私は悪魔も魔法も魔術も妖怪も幽霊もだいだいだいだ――――――いすきですからっ！」
眼鏡を通してでも目が輝いているであろうことが伺える。
なによりさっきからあまりどもっていないし、はっきり喋ってい

るところを見ると大好きな分野なのだろう。
つまり彼女はオカルト趣味なのだ、きっと。
「やっぱり……気持ち悪い、ですよね」
元気に勢いよく言って、埜亞はすぐに後悔した。
輝十の困った顔を見て冷静さを取り戻し“やってしまった”と思ったのである。
「いや、気持ち悪いも何も……いるし、気持ち悪いのならここに」
輝十は杏那を指す。
「はぁ？　気持ち悪い顔のくせに美少年に向かって何言ってんのかな、この猿回し」
「なんだとてめえええええ！」
また胸倉をつかみ合う二人を前にして、埜亞ははっとする。
この学校はそういう学校なのだから、と。
「そ、そうですよねっ。悪魔がいる学校ですし、おかしくないですよねっ」
「ああ。おかしいのはこいつの存在で、おまえは決しておかしくねえだろ」
埜亞は顔をあげ、いかにも当然かのように言い放った輝十を固まったまま凝視する。
初めて言ってもらえた、その言葉の意味を理解するまで少しの時間を要した。

（11）

二人の口喧嘩を眺めながら、埜亞はその言葉の意味に気付いた時驚いた顔をする。

おかしくない……？　私はおかしく、ない？

その違和感は決して不快ではない。むしろ心地が良く、感じたことのない情が込み上げてくる。

頬が蒸気するのを感じ、埜亞は黙ってフードの紐を引っ張った。

「なにしてんの黒子ちゃん。ショッカーみたいになってるけど……」

「ええっ！？」

埜亞はフードの紐を引っ張りすぎたせいで、フードが絞られ、顔の中心部だけ見える奇妙な状態になっていた。

「おまえ淫乱悪魔のくせにショッカーとかよく知ってんな」

「あのねぇ、言っておくけど俺の方が何十倍も輝十くんより一般教養あるんだからね」

相変わらずいがみ合う二人をショッカーが止めようとあわあわ慌てふためく。

額をつけて睨み合う二人の喧嘩意識を逸らそうと、

「し、資格！　そうです、資格！　座覇くんは何の資格をとるおつもりですかっ？」

身振り手振りで埜亞なりに声を張る。

「は？　資格？」

杏那の胸倉を掴んだまま制止し、頭上にクエッションマークをいくつも飛ばす輝十。

「彼はなーんも知らずにこの学園にきた無知童貞くんだよ？　資格のこともぜんっぜんわかってないんだってー」

馬鹿にするように言う杏那に食ってかかろうと、

「んだよ、資格って！」

と、言い放った途端、バァァァンッ！　と扉が痛そうな音を立て

て過剰に開かれる。
三人は同時に殺気を感じ、空はこんなにも晴れているのに急に闇に覆われたのではないかと錯覚するぐらい、黒いものを感じた。
ゴオオオオという地鳴りのようなものが聞こえた気さえしてくる。
つかつかつか、と歩み寄る早い足音と人影。
その圧倒的な圧力におされ、恐怖のあまり埜亞はよじ登るようにして地面からベンチに這い上がる。
真っ黒な影がベンチに座っている三人を覆い隠し、三人はその恐怖から逃れることが出来ず恐れを分かち合うかのように寄り添った。
「あ、ん、た、達ィ……」
目を向けるとそこには般若が腕を組んで仁王立ちしていた。
「べ、瞑紅さん？」
「聖花！　せ、い、か！」
「せ、聖花……ちゃん？」
「ちゃんはいらない！　せ、い、か！　はい！」
「せ……いか？」
「いいわ、だーりんのそれに免じて許してあげる」
「許すのかよ！」
思わず声に出して突っ込んでしまった輝十である。
「こんなとこでどうしたの、聖花ちゃん」
「あんたは気安く名前呼ばないでくれる？」
聖花は杏那の台詞をばっさり切り、舌打ちして見せた。
「ひどいじゃないの、だーりん。なんであの豚ビッチ共と一緒に廊下に置き去りにしていくわけぇ？」
「ちょ、なっ！？　つーか、だーりんって誰だよだーりんて！」
聖花は輝十の頭を抱き、胸を押しつける。
胸の圧力で呼吸が乏しくなり、うごうご言っている輝十の横で怯えている埜亞を聖花は一瞥する。
「あんたァ……」

「ふえっ！？」
びくう、と体を震わせ、強ばらせる埜亞に顔を近づけ、
「さっきといい、三大式典の日といい、よくもこう邪魔ばっかりしてくれるわね……たかがピルプのくせに」
左手で輝十を抱きしめたまま、右手で埜亞の両頬を掴んでぷにゅぷにゅ潰す。
「そのたかがピルプに抱かれたくて仕様がない痴女がどの面下げてそんなこと言うんだろうねぇ」
「うっさいわね、妬類杏那。あんたはちょっと黙ってなさいよ」
「はいはい。でもそろそろ離してあげないと輝十くん逝っちゃうよん？　違う意味で」
そんなやりとりの真っ最中も幸せいっぱい胸の中にいた輝十は、酸素不足で意識を失いかけていた。口から泡のようなものが吹き出している。
「こ、これはっ、喜びを表現してるのよ！　ね、だーりん」
「喜び、ねぇ……」
大好きなおっぱいに挟まれてさぞ嬉しいことだろうが、輝十の死体のような顔を見てしまっては誰もが同意しかねる。
返答のない輝十を聖花が往復でビンタし、無理矢理三途の川から引き戻した。
「はっ。なんだ夢か……おっぱいの海に顔面ダイブしてこれからって時だったのに。でも何であんなに痛かったんだ？」
自分の顔をぺたぺた触りながらも腑に落ちない様子だった。
「つーか、俺に何か用か？」
「む……用がないと来ちゃだめなの？」
「いや、そういうわけじゃないんだけどよ」
なんだろう。この子非常に扱いずれえ。
「ならいいじゃなーい。ね、だーりん。さ、抱いて！」
「……は？」
今のは聞き間違いだろうか。いや、つまり、その、今までの出来

事とさっきの埜亞達の説明を照らし合わせるとつまり……。
「抱いて！」
言って、聖花は輝十の膝に飛び乗って抱きつく。
「わ、わわわ！　ちょ、離れろ！」
「どうして？　いいでしょ。ほら、見て？　よーく見て？　この顔、この体！　ロリ巨乳が嫌いなピルプなんていないはずよ！」
大胆に、一切の恥じらいなく、輝十を積極的に誘う聖花。
確かにいいおっぱいをしている。顔だって申し分ないぐらい可愛い。でもそうじゃない。そこに男のロマンなんてものは詰まっていないのだ。
すぐ触れるおっぱいより、触れないおっぱい。見れるおっぱいより、隠されたおっぱい。
いつだって男は高嶺を追う生き物なのだ。
……と、自分なりのプライドに誓って、輝十は聖花を受け入れようとはしなかった。
その傍らで顔を両手で覆って人一倍恥ずかしがっている埜亞と、
「ほんっと節操がないよねぇ、スクブスは」
白い目でその光景を見ている杏那。
「あのなぁ、男がみんなロリ巨乳が好きだと思ったら大間違いなんだよ！」
「な、なんですって……！？」
その予想外の発言で聖花に一瞬の隙が出来てしまい、輝十は聖花を払いのけて膝から引きずり落とす。
「いいか、俺はロリ巨乳が好きなわけでもツンデレ貧乳が好きなわけでもない。ただ“乳（にゅう）”が好きなだけだ」
まるで英雄が名言を吐き捨てるかのような勢いで言うが、言っていることはただの変態である。
極まった……と内心自分に惚れ惚れしていた輝十だが、誰も拍手をくれないところを見るとどこかおかしかったのだろうか。
「輝十くんのおっぱいに対する想いはインクブスの俺でもひくレベ

ル」
「なんで！？」
そんなくだらない会話を繰り広げながらも、杏那は抜かりなかった。
地面に四つん這いになり、素でショックを受けている聖花に追い打ちをかけるようなことを吐く。
「輝十くんのチエリは俺が保守するんでぇ。無闇に手を出そうとしないでもらえるかな？」
冗談めいたいつもの口調ではあったが、またその笑みには感情がこもっていない。有無言わせぬオーラを纏っている。常に自信満々の聖花が反論出来ない程に。
しかしそれでも聖花は聖花だ。黙って後を退くわけがなく。
「うっさいわね。なんであんたにそんなこと言われなきゃいけないのよ。そもそもあんたはだーりんのなんなわけ？」
「婚約者だけど？」
「はぁあああああっ！？」
あまりの驚愕に聖花は力を制御出来ず、その場で突風が起こる。
ブォオオンッ！　と呻るような音をたてて物凄い風が吹き、輝十と埜亞はベンチごと飛ばされて倒れてしまった。
「な、な、なっ……」
杏那は勝者の顔で微笑んで見せ、それ以上は何も言わなかった。
「そ、それでも、諦めないんだからぁあっ！」
また突風が起き、何事かとベンチにしがみついて輝十と埜亞は杏那達の様子を伺う。
「なーんでそんなに固執するかねぇ」
「私はね、そこらの下級なスクブスとは違うの。ピルプなら誰でもいいってわけじゃないわ。私が自ら選んだピルプを体だけじゃなく心も物にするのよ」
大きな胸を張って、ぽむぽむ叩きながら宣言する。
「例えあんたがライバルでもよ、この男女淫魔！」

「……よくご存じで」
びしっと指を差して啖呵を切る聖花だったが、絶対零度な冷ややかな顔つきになった杏那には恐れを感じている様子だった。
「モ、モテ、モテですね……座覇くん」
「今日から人間の女の子以外にモテた場合はカウントしないことにするわ、俺……」
ベンチに隠れて杏那達のやりとりを見ていた輝十は、うんざりした顔で呟いた。

人があまり寄りつかない場所といえば、石碑のある屋上だ。人間ならまだしも淫魔共が好んでこんな場所にくるはずがない。
昼休みなので石碑がない屋上はきっと生徒達で賑わっているだろう。
そんな場所には行きたくなかった。
誰もいない静かな場所でゆったりした時間を誰にも邪魔されず過ごしたかった。そうすることで唯一自分を保っていられるからだ。
彼女は三大式典の時もそうして身を隠していたのである。
今日も同様に屋上の扉に手をかけた時だ。
「……誰か、いる？」
思わず顔がひきつってしまう。
扉を１０センチほど開けたところで、屋上から賑やかな声が聞こえてきたのだ。
女の声と男の声。どうやら言い合いをしているようだが、決して本気の言い合いではないだろう。声色からして兄妹レベルの喧嘩だ。
なんでここに……。
彼女にとって唯一の居場所になりえた場所には、先客がいたのである。
もちろんベンチは一つではないので気にせず屋上に出ることは可能だが、人がいる所に行こうなど絶対に思わない。
彼女は静かに扉を閉めた。

今後の昼休みもいるようなら新しい場所を見つけなければいけない。そう思うとめんどくさく、気も重かった。それでも他人と極力関わらない道を選ぶのである。

彼女は踵を返し、階段を降りていく。

灰色のスカートを揺らしながら。

（1）

「ぬう……」

輝十は唸り、抱きつき慣れた枕をしっかり抱きしめたまま寝返りを打つ。

いい加減起きなければいけない、とわかっていても体がまだ寝ていたいと言っている。そんな誰もが毎朝行うような葛藤を繰り返し、渋々瞳を開く。

「……」

そして視界に何かが入り込み、一気に目が覚めてしまった。

あの強力な睡魔さえも吹き飛ばしてしまう、それは言うまでもなく、

「おい！　だからなんでてめえは俺の部屋で寝てんだよ！」

淫魔こと妬類杏那なのでした。

人間の三大欲求である睡眠欲を司る睡魔さえも、この性欲を司る淫魔の前では赤子同然である。

輝十は布団をマントのように勢いよく翻し、ベットから降りて寝袋で熟睡している杏那を足でサッカーボールのようにころころ転がす。

しかし蹴っても起きないことは前回実証済みである。

「なんっで俺の部屋で寝るんだって言って！　ん！　だよ！」

ズズズゥ、と勢いよく寝袋のチャックを全開に下ろす。

「な、んなっ……」

するとまるでサナギが脱皮したかのように、中から見た目だけは蝶のように綺麗なものが現れる。

恐らくお腹いっぱいのまま寝てしまったのだろう。杏那は女型の姿で、男性用の長袖を一枚羽織っただけの装いだった。無防備に熟睡しているその姿は人間の女の子そのものである。

布を一枚見つけているだけの状態なので、女の子特有の丸みをお

びた体つきが明確で、特に胸に関しては重要な部分がはっきりと突起している。
一瞬その魅惑なモノに目を奪われた輝十だったが、すぐに冷静さを取り戻した。
そう、彼は男なのだ。もっとも俺が忌み嫌う、俺を苦しめてきた存在、男なのだ。
輝十はぐっと拳を握り締め、瞳を閉じる。
体内に秘められた煩悩という名の魔力が、朝の力を借りて一点に集中し、今暴れだそうとしている……！　否！　ここでそれを許してしまっては、男のおっぱいに反応している、言わばホモと腐女子歓喜の存在に成り下がってしまうのだ。いかん、それは断じていかん！
「例え、いいおっぱいをしていても……！」
「そんなに触りたいなら触ってもいいのにー」
「！」
煩悩組織との首脳会議中に、突然声をかけられてびくっと反応する輝十。
「ピルプは理性ってのがあるから大変だねぇ」
言いながらむくっと上半身を起こす。それだけで大きな実が二つ揺れ動くので憎い。サイズ的では埜亞や聖花に劣るが、弾力で言うとこいつの方が上かもしれない。言うなれば、鍛えられたハリのある上向きのバスト。
そこまで考え、男のおっぱいについて真剣に考えてしまったことを輝十は自己嫌悪した。
「俺としたことがあああああ！」
「ちょっとー朝っぱらかさ叫ばないでくれる？　うるさいんだけど」
そんな低血圧な淫乱悪魔に輝十は、改めて冒頭の台詞を言うことにする。
「いやいや、そもそもおまえがここで寝るのが悪いんだろーがよ」
「なんで？」

「なんで？　じゃねえええええ！　ここは俺の部屋だろーが。てめえの部屋は向かい側のはずだろ」
杏那は答えず、寝袋から抜け出し、四つん這いになって輝十の足下に近づいていく。
「な、なんだよ」
「今……」
そして無言で下から上目遣いで見つめ続けた。
動揺が自分を包み込んでいることに気付き、輝十は慌てて冷静を呼び戻す。
男だとわかっていても埜亞や聖花にはない、異様な魅力を放っているのが杏那の特徴である。けだるそうに、しかししっかりとした、確立された大人の色気が備わっている。
それは大人の女性に弄ばれる年下童貞のような関係性。小悪魔ではない、それは完全な悪魔の魅力だ。
だからこそ聖花や埜亞の時には訪れない、動揺が輝十を襲うのである。
「えろい目で俺のこと見てたでしょー」
「見てねえよ！」
「ふーん、あっそ。つまんないの」
からかうことに飽きたのか、杏那は体勢を戻して背伸びする。
女の姿で毎朝寝られたら厄介だな。さすがに間違いを起こすことはないと自分を信じてやりたいとこだが……はっ、もしかしてこうやってノンケは堕ちていくのか？　付き合った女がたまたまニューハーフだった、仕方ない、みたいなノリか？　ない、それは絶対にない。
「なにそんな険しい顔してんの？」
「あ、いや……」
輝十は頭を振って、脳内を占めるその問題を一旦取り払った。
「そういや、さ」
そして何かを思い出し、杏那に声をかける。

輝十から改まって話しかけてくる、など滅多にないことだ。その声色からもさっきのような攻撃的要素は見受けられず、杏那は小首を傾げる。
「昨日は……ありがとな」
杏那は目を見開き、照れくさそうに礼を言う輝十を凝視する。
「な、なんっつーか、まあ、おまえにも結果助けてもらったしな。おかげで俺の貞操は守られたわけだし。礼を言うよ」
頭を掻きながら、視線を彷徨わせる輝十。そんな様子を目の前にすれば、その言葉を口にすることがどれだけ勇気がいることかわかる。
まさか礼を言われると思っていなかった杏那は、きょとんとしていた。
「な、なんか言えよ！　恥ずかしいだろーが！」
無反応、無口のまま、じっと見てくる杏那に返事を急かす輝十。
杏那は悪戯に微笑み、
「貞操守れてよかったって、女の子みたいなこと言うねぇ」
「う、うるせえな！」
「人間の男は早く童貞を捨てたがるものだと思ってたけど」
「そっ、それは否定しねえけど……相手が誰でもいいってわけじゃねえからな」
杏那はぷくくっと含み笑いをし、
「なにそれ乙女？」
輝十を小馬鹿にし、腹を抱えて盛大に笑い出す。
「だあああああもう！　うるせえな！　いいだろ、別に！　俺が助かったって言ってんだからよ！」
顔を真っ赤にして言う輝十を見て、
「ま、俺は人間に優しく、悪魔に厳しくがモットーだからね」
杏那は笑みを消して真剣に言う。
そして「えっへん！」と言いながら、形のいい胸を叩きながら反って見せた。

「輝十くんの童貞の一つや二つ、守るのなんて容易いご用ってこーと」
「童貞が一つも二つもあってたまるかよ」
そう突っ込みながら杏那に背を向け、服を脱ぎ捨て制服に着替え始める。
「あ。あと、それいらねえから」
「それ？」
「くん付け。気持ちわりいだろ。いいよ、呼び捨てで」
シャツのボタンをかけながら言う輝十をまたしても驚きを隠せない顔で凝視する杏那。
しかしその顔は次第に緩み、優しく微笑む。
何か言ってからかおうかと思った杏那だったが、そこはあえて言わずに飲み込んだ。嬉しそうに輝十の背後で胡座をかいて、着替えるのを観察している。
「つーか、おまえ……」
ボタンをかけおえた輝十は振り返って、腰に手を添え、小姑のように周辺を指差しながら怒鳴る。
「これ片付けろよ！　片付けるまで学校くんな！　いいな！」
「えー」
輝十の指差したあらゆるところにチョコレートの食べたゴミやら、チョコレートそのものが散らばっていた。
「だっておじさんのチョコレート大好きなんだもーん」
「チョコレート好きなのと散らかすのと関係ねえだろーが！」
杏那は甘えた声で駄々こねるように言うが、それをすぱっと切り捨てる輝十。
「おまえが昨日の昼、食ってたクッキーも親父が作ったやつだろ？」
「うん、そう。おじさんの作ったお菓子は昔から好きなんだよねぇ」
「……昔から？」
輝十は気になる語句を耳にし、そのまま問い返した。
「詳しくは覚えてないんだけどね。おじさんに聞いた話では、俺が

おじさんを助けてそのお礼にお菓子と将来子供を婚約者としてくれるっていう約束をしたらしい」
「らしいって、おまえ覚えてねえのかよ」
「お菓子の味だけははっきりを覚えてんだけどねぇ」
輝十はいらっとした顔で、問いただす。
「ほら、もっとあるだろ？　何から親父を助けたのか、とか！　なんで親父がそういう目にあってたのか、とか！」
「うーん。それが本当に覚えてないんだよ。なんでだろうねぇ？」
「なんでだろうねぇ？　じゃねえよ、呑気だなおまえ。じゃなんで婚約者なんて馬鹿げた話を引き受けたんだよ。親父に聞かされただけで、おまえは覚えてなかったんだろ？　断ればいいだろーが断れば」
杏那はそれはないない、と手を振って全力で否定する。
「いやいや、だって面白そうだし」
「なっ！　もしかしておまえ……そんだけの理由で……」
「うん。約7割は」
呆れかえっている輝十に、杏那はいつもの笑みを向ける。
残り3割は他に理由があったが、それはあえて口にしなかった。
「まあいい。とりあえず片付けるまで学校くんなよ、ぜってえだからな」
「えー」

(2)

「うーん……」
輝十は頬杖をついて、移り変わる窓の外を眺めていた。
杏那の言っていた“覚えていない”が、どうしても引っかかるのである。
覚えていながら嘘をつき、自分に言わないだけなのか。それとも本当に覚えていないのか。
「悪魔ってそんなに物覚えわりいのかよ」
輝十は窓の外を睨むかのように目を細める。
そんなはずはない、と思うのである。もちろん悪魔について自分はよく知らない。しかし語り継がれてきた空想上の生き物として考えても、そんな簡単に記憶を失うようには到底思えなかったのだ。
「そのうち埜亜ちゃんに聞いてみるか」
彼女なら色んなことに詳しそうだしな。
きっと自分は知らないことだらけなのだ。彼らのことも、学校のことも、自分がどういう立場に置かれているのかも。
貞操を狙われたことをきっかけに、輝十の中で少しずつ関心が沸いてきていた。

櫻都市に到着すると、見ての通り地獄のような坂道が待っていた。これを生徒達が地獄坂と呼んでいることを知ったのは、ついさっきのこと。
もはや名物となりつつある、通学路の最後の難関である坂道の前で輝十は足を止めていた。
前回のような無意味な争いはもうしない、と心に決めている。
なによりあの散らかったものを片付けるとなれば、早々追いついてはこないだ……、
「今日はバスで行くの？　輝十」

と、思っていたら背後から聞き覚えのある声がし、振り返りたくない気持ちを押し殺して、ゆっくりと振り返る。
「おまえぇ……」
「あ、片付けなら終わったよん。輝十」
これが今の時代、悪魔が執事を行っているという所以か。人間とは思えない早業で片付けも準備も行い、尚かつこの場にやってきている。いつもこいつどうやって通学してんだよ。
しかし男性型に戻っているところを見るに、カロリーを消費しているということになる。片付けをしたのは本当だろう。
「そ、そうか。片付けが終わってるなら別に文句はねえ」
「うん、つまり一緒に通学しても問題ないよねぇ。輝十」
「てめえさっきから俺の名前呼びたいだけだろ！」

そんな定番となりつつある二人のやりとりに気付いた彼女は、自分なんかが話しかけていいものか悩み、ただそれを遠くから見つめていた。
仲良くしようと初めて言ってくれた彼――座覇輝十。
しかし仲良くするということは、具体的にどういうことなのか彼女にはわからなかった。
たった一言「おはよう」と声をかけることを躊躇ってしまうほどに。
遠目で見ていた彼女に輝十が気付き、手を振りながら声をかける。
「よう、おはよう」
埜亞は後ろを振り返り、左右を確認し、その相手が自分なのかを確認する。
「そんなにきょろきょろしなくても黒子ちゃんのことだよ。おはよー」
杏那の言葉に安堵し、埜亞は小走りで駆け寄って、深々と頭を下げる。

「お、おっ、おはよう、ございますっ！」
すると頭を下げすぎて、また頭部が地面についてしまい、
「ほんっと体柔らかいよな、埜亞ちゃん……」
輝十が関心と驚愕が混じった微妙な表情で突っ込む。
「そんなに頭下げなくていいのにねぇ」
杏那が輝十に同意を求め、埜亞は慌てて頭を上げる。
「えっ！？　あ、は、はいっ。すみません……」
「いやいや、そんな謝らなくても」
「そうですよね、すみませ……あっ！　ご、ごめんなさい！　ああっ！？」
「まあまあ、落ち着いて」
輝十は慌てている埜亞を落ち着かせようと笑いかける。
「黒子ちゃんっていっつもあわあわしてるよねぇ」
「す、すみません……」
杏那の言うことはもっともだった。だからこそ埜亞は分厚い本を抱きしめてしゅんとしてしまう。
「おまえな、余計なこと言うんじゃねえよ」
「えー？　俺がいつ余計なことを言ったのかな？」
「存在が余計なんだよ！　てめえは！」
埜亞は二人のやりとりを顔を隠した本の隙間から覗き、苦笑する。
もちろんその笑みは二人には見えていないし、埜亞自身も見せるつもりはなかった。
喧嘩腰だが、埜亞の瞳には二人が決して仲が悪いようには映らない。むしろ仲がいいからこそ、これだけ本音でぶつかれるのではないだろうか。
もちろん自分にはそんな“友達関係”については記述程度の知識しかない。
それでもこうやって側で見ていると感じるものがあった。
だからこそ思う。
ここに自分はいて、いいのだろうか……？

「どうした？　埜亞ちゃん」
「ふぇ！？　や、いや……も、問題ないです。す、すみません」
固まっていたかと思えば、再び慌て出す埜亞。
「そ、その……お、お二人は、本当に、な、仲がいいんです、ね」
「どこが！？」
そのやりとりを黙って見ている杏那は、埜亞を横目で見るなり訝しむ。
「ま、婚約者だからねぇ」
「てめえは黙ってろよ、永久に」
「一生喋るなってこと？　なにそれ、そんなマニアックなプレイが好きなの？　インクブスの俺でもひくんだけど」
「いつ俺がプレイの話をしたんだよ！」
埜亞は喋るタイミングが掴めず、その勢いに圧倒されて、ただただ微笑んでいた。
「ったく、おまえが話に加わるとわけわかんなくなるだろーが」
輝十がぶつぶつ言いながらバス停に向かいだし、杏那もその傍らを歩いていく。
「……埜亞ちゃん？」
そして埜亞がついてきていないことに気づき、輝十は立ち止まって振り返る。
「え、あっ……その……」
埜亞は地獄坂の前から動こうとはせず、輝十達と地獄坂を交互に見た。
「バス、来ちゃうぜ。乗んねえの？」
輝十がバス停を指しながら言うと、埜亞は唇を噛みしめて言うか言うまいか躊躇う。
「今日はもう俺らも競争しないからねぇ。人間の体力じゃ結構きついんじゃない？　その坂。黒子ちゃんもバス乗ろうよー」
そして杏那までもが誘ってくれている。
きっとこの場合は二人のご厚意に甘えても罰は当たらないだろう。

むしろ甘えたい、そう心の奥で自分が思っていることくらい埜亞は気付いていた。
それでも、
「わ、私……あ、歩いて行きます、ので」
彼女はこう言うしかなかった。
優しくしてくれる、話しかけてくれる、そんな二人を好いているからこそ。
そしてなにより自分自身がバスに乗ることなど、出来るはずがなかったのである。
私なんかが乗っていいはずがないのだから……。
「え？　マジ？　今日もこれ歩くのかよ」
どんよりした顔で言う輝十に向かって、埜亞は両手で掴んだ本を左右に振り、
「は、はい。な、なので、座覇くん達は……バスで……」
「座覇くん達は、ねぇ」
その言葉を意味深げに杏那は復唱し、埜亞をしげしげと見ていた。
「なに言ってんだよ。だったら俺らも歩いて行くって。なぁ？」
「女の子が歩くのに俺だけバスで行くなんてかっこわりいだろーが！　って輝十は言いたいんだよねぇ」
肩をすくめながら通訳するように言う杏那の胸倉を掴み、何か言いたげに顔を真っ赤にする輝十。
「ええっ！？　で、でも……そんなぁ……」
埜亞が俯いてしまったのを見て、輝十は杏那から手を離して向き合う。
「おまえさ、気ぃ遣いすぎなんじゃねーの」
「……え？」
「謝ってばっかだしよ。んな、バスだの歩くだのぐれえで何そんな落ち込んでんだよ」
「は、はい、です……」
言った側から落ち込んでしまった埜亞を見て、輝十は難題の解け

ない浪人生のごとく、声をあげながら頭を盛大に掻きむしる。
そんな輝十の代わりに、杏那が輝十が言いたかったであろうことを直球で言ってやった。
「もう俺ら友達なんだからさ、そんな気にしなくていいんだよ」
「と、とも、だち？」
そうそう、と頷いていた輝十はおかしな点に気付いて、はっとなる。
「俺と埜亞ちゃんは友達だが、おまえは違うだろ」
「空気って読める？　あ、そっかー輝十はお猿さんだから読めないのかー困ったなー」
「てんめえ……！」
友達……？　私が座覇くん達と、友達？
埜亞は何度もその言葉を脳内で繰り返していた。二人のやりとりが効果音程度にしか聞こえない程に。
友達……それはつまり一緒にいてもいい、ということだろうか。仲良くすることと、友達でいること、どう違うのだろうか。
彼らにとって、自分はどう映っているのだろうか。
埜亞の心を嬉しさと恐怖が覆い隠す。今までに感じたことのないその感情からは戸惑いしか生まれず、彼女はどう受け入れればいいかわからなかった。
分厚い本を抱きしめたまま、小刻みに震えている埜亞。
輝十に胸倉を掴まれて揺らされながらも、杏那はその変化を見逃さなかった。

（3）

授業終了のチャイムと共に女子生徒達は一斉に準備を始め、ぱらぱらと教室を後にしていく。

次の授業は体育だった。体育が行われるのは今日が初めてである。

体育は隣のクラスと合同で男女別で行われる。もちろん着替えも別だ。

埜亞はごそごそと体操服の入った袋を取り出しながら周囲を窺った。

「……」

まるで助けを求めるかのように目で追ってしまった彼は、もちろん授業は別。着替えも別。つまり一緒に行動することは出来ないのだ。

私はなにを期待しているのだろう。

杏那に絡まれて、いつものように苛立っている輝十。その二人の姿を見ながら埜亞は息を飲んだ。

朝、会えば声をかけてくれる。

昼、自分の名を呼んでくれた。

そうやってどこかで甘えている。彼の優しさに、彼らの笑顔に、甘えてしまっている。

「ね、次体育でしょ？　一緒に着替えに行こうよ」

「！」

埜亞はその声に反応して、思わず顔をあげた。

目の前の席の女子生徒が体操服を抱きしめ、立ち上がる。

「うん、いいよー」

埜亞は顔をあげたまま、動くことが出来なかった。

後ろの席の女子生徒は返事をするなり立ち上がり、前の席の女子生徒と合流する。

埜亞という存在はなかったことにされ、彼女を通り越して女子生

徒同士は声をかけあっていたのである。
「あの子、反応しなかった？」
「え、そうなの？　誘うつもり全然なかったんだけど」
「なんかこわいよね、いつもフード被ってるし」
女子生徒達は振り返って、不審そうに埜亞を見て呟く。
彼女たちの瞳に映っている私はきっと“気味の悪い子”でしかない。そう、目が教えてくれる。
「……私の、バカ」
わかっていた、わかっていたはずなのに。
どうして顔をあげてしまったのだろう。期待なんてしたって裏切られるだけなのに、どうして期待してしまったのだろう。
それはきっと……。
埜亞は再び輝十達を見る。それだけで彼は小さな安堵をくれた。きっと優しさに甘えてしまったから。身の程を弁えることを忘れかけていたのかもしれない。
いつだって私は一人で、独りだったのだ。これが本来あるべき自分の立場であり、姿なのだから……なにも落ち込むことなんてないのに。
埜亞は周囲が男子生徒だけになったことに気づき、慌てて教室を飛び出した。

「あれ？　なんかこっち見てた気がしたんだが……」
輝十は教室を飛び出していく埜亞の後ろ姿を見て漏らした。
「黒子ちゃん、同性の友達いるのかねぇ」
「は？　なんだよ急に。そりゃいるだろ」
「一緒に誰かといたところ、見たことあるー？」
そう言われてみれば授業の合間はいつも机にいるし、昨日の昼休みは一緒だったし、三大式典も……。
「人間にとって同性の友達って重要なんじゃないの？」
「まあそうだな。よくわかんねえけど、女は特に大事なんじゃねえ

の。いつも群がってるし」
輝十は急に心配になり、そんな輝十の気持ちを察するかのように杏那は苦い顔をした。

更衣室に移動したものの、他の女子生徒達のように埜亞は着替えることが出来なかった。
フードをとり、パーカーを脱ぎ捨てることに抵抗があるからだ。
下着姿になり、続々と女子生徒達が着替えていく中で、埜亞はロッカーの前で突っ立ったまま何も出来ずにいる。
「ね、なんであの子着替えないの？」
「さぁ？　つーか、なんでいつもフード被ってんの？」
そんな声と視線がちらちらと自分に突き刺さってくる。
この学園の半数は人間なのだ。埜亞は気付いていた。つまり自分にそういう視線を送ってくるのは“人間”であるということに。
埜亞にとって“淫魔”と“人間”を判別する大きな手段はそこにある。
人外にとっては細かいことなど恐るるに足らず、気に留めることではない。しかし人間にとってはどうだろうか。自分達とは近しいのに違う存在は気味が悪い、警戒すべき、仲間外しにするべき存在なのではないだろうか。
悪魔のいる学校でも人間は所詮人間だ。
埜亞は人が少なくなったのを確認し、ロッカーを開けて分厚い本を中に仕舞う。
それでもフードをとり、パーカーを脱ぐのは誰もいなくなってからだ。
人気が完全に無くなり、更衣室が貸し切り状態になったところで埜亞はパーカーを脱ぎ捨て、眼鏡を外した。
世界を黒で覆い、何も見えなくすることで私は自分を保っている。こわい視線を避け、こわい声を遮断し、世界を裸眼で見ないと決め

たあの日から――
「なに？　まーだ着替えてないわけぇ？」
「！」
埜亞は入口を見るなり、体操服で顔を覆った。
突然入ってきた女子生徒は、そんな埜亞の反応を気に留めることなくずけずけと更衣室へ入り込む。
「なにやってるの、顔隠して」
「……」
埜亞は答えず、体操服の隙間から仁王立ちしている女子生徒を見据えた。
「ま、いいや。早く着替えなよー体育間に合わないよ？」
「だ、だ、だって……」
女子生徒は真っ赤に染まった綺麗な髪を耳にかけながら、あっけらかんとして言う。
「だって、なに？」
その力強い声色を聞き、埜亞は問い返す。
「あなたは……淫魔ですね」
「そうだけど。それがなにか？」
「い、いえ……」
じゃなければ、自ら自分なんかに声をかけてこないだろうし、変なものを見るような目をしていない。
埜亞は恐る恐る体操服を下ろし、女子生徒に背を向けて、着替え始めた。
「そーんなに他人の視線がこわい？」
女子生徒はロッカーに寄りかかり、手に持っていたチョコレートを口に運ぶ。
「……こわい、です」
みんな気味悪そうに自分を見る。そんな目がこわくないわけがなかった。
いつもいつもいつもいつも、そうだった。嫌そうな顔をして、近

寄るなと言わんばかりの顔をして、遠ざけようとする。
どうして好きなものを好きと言ってはいけないのだろう、と何度自問自答したことかわからない。
可愛いものより、美味しいものより、ただ自分が悪魔や魔術やらに興味を持って好んでいた、それだけなのに。
「そりゃずっとフード深々と被って、でっかいぐるぐる眼鏡かけて、分厚い本抱きしめて、いっつも俯いてりゃー気持ち悪いよね、普通は」
「そ、そう……ですよね」
埜亞は体操服の上にパーカーを羽織り、フードを被って眼鏡を装着する。
“普通”はね。でもいいんじゃない？　この学校は“普通”じゃないんだし」
「で、でも半数は人間ですから……」
「ただの一般人じゃなくなるんだから、そんなことも言ってらんなくなるって」
埜亞はその言葉を聞いて、その続きが聞きたくて、ゆっくりと恐る恐る振り返る。
「ここ、そういう学校でしょ？　それ望んできみはきたんでしょ？
また今までのような学校生活を送るの？」
炎のように赤い髪をした女子生徒は、ロッカーに寄りかかったまま微笑みかける。
「きみならわかってるはずだよ。ここがどういう場所か、そしてどうなっていくのか」
そう、私はわかっていた。望んでこの学園を選んだのだから。
今まで色んな人に虐げられた、気持ち悪いと罵られた、汚いもののように扱われてきた、そのすべてが反対の意味となる“ここ”を。
気味が悪いとされてきた自分の趣味を、大好きなものを、誰かの役に立つことに使う為に。
「誰かさんが言ったでしょ？　気持ち悪いも何も悪魔がここにいる

んだから。おかしいのは俺らのような人外的存在で、きみはなーんもおかしなところはないと思うよ」
女子生徒は人懐っこくにっこり笑いかける。
「ど、どうして、ですか？　どうして……」
会ったことも喋ったこともない彼女が、自分のことをまるで知っているかのような口ぶりで言うので埜亞は不思議で仕様がなかった。
そしてその“誰か”というのはきっと……。
「それは……」
と、言いかけたところで、女子生徒の体が急に大きくなっていく異様な光景を目の当たりにする。
「ななぁっ！？」
幸い大きめの体操服を着ていたので体操服がはち切れることはなく、元ある姿に戻ったと言った方が的確だろう。
「あーあ、やっぱだめか。急いでカロリー摂取してみたんだけどなぁ」
「と、妬類くん！？　あ、あれ？　さっきのは女の子だったような……」
杏那は頬を掻きながら、長ったらしい説明を省略し、
「ま、まあ、それはおいといて」
わざとらしく咳払いしてごまかす。
「俺は悪魔だからね。人間の心の隙間に入り込むような生き物だよ？　だから人間以上に心の変化には敏感なんだ」
「そ、それで……」
「黒子ちゃんは心が乱れやすいし、隙が多すぎるからねぇ」
杏那は笑みを消し、強く言い聞かせるように言う。
「わかってるよね。所詮悪魔は悪魔なんだ。友好的な奴ばかりじゃない」
彼女にはきっと拭いきれない闇が存在している。そんな闇こそ、悪魔の十八番であり、ディナーなのだ。
「輝十も心配してたよー」

「ざ、座覇くんが！？　そ、そんなぁ……」
「うん、だからそんなに悩むことはないんじゃないかな」
杏那は言って、埜亞に更衣室を後にするよう促す。
「あ、あのぅ……」
「なにー？」
照れくさそうに口をぱくぱくさせながら、埜亞は思い切ってそれを口にする。
「あ、ありがとうございますっ！」
そしてそのまま更衣室を出ていった。
「ありがとう、ねぇ」
杏那はその言葉が嫌いじゃない。むず痒くなるが、それでも嫌いじゃなかった。
人間しか口にしない、その感謝の言葉が。

（4）

埜亞はいつも思う。

どうして体育ではたびたび“ペアを作らなければいけないのか”と。

まだ出会って間もない同士で声をかけあいペアを作っていく姿は、埜亞には理解し難いものだった。

もちろん自ら声をかける勇気なんてないし、誰かがかけてくれるわけもない。

女子生徒達は各自でバレーボールを持ってペアを作っていく。ウォーミングアップの一環としてバレーボールを使い、ペアでパスやトスを笛が鳴るまで行うというものだった。

埜亞は賑やかな声のする場から少しずつ離れていき、陰に腰を落として体育座りした。そして遠目に女子生徒達の光景を眺め、普通の体育となんら変わらないんだなぁ……と、他人事のように関心していた。

まるで興味のないテレビを呆然と眺めているかのように、埜亞は女子生徒達を見て、そして杏那の言葉を思い返す。

この学園にくれば変われるかもしれない、そう思ってた。

自分の好きなことを学べるし、自分の好きなものそのものが学園にいる。そんな自分にとって恵まれた環境に身を置けば、自然とどうにかなるんじゃないかと思っていた。

でも現実そうはいかない。

ボールを拾いながらちらちらと見てくる女子生徒の視線に気付き、埜亞は目を逸らす。

妬類くんの言うことはもっともだけど……だからって状況が変わるわけじゃない……。

彼の言葉で気が楽になったのは確かだが、それで自分が変われるなら今こうして隅に体育座りなんかしていないだろう。

わかってる、本当は私が変わらなきゃいけないんだって。逃げて、隠れて、目を逸らしてばかりじゃだめなんだって。
「……」
埜亞は両膝の間に顔を埋める。
暗闇の中で目の裏に蘇る今までの出来事を思えば、そう簡単に行動に移せるものではなかった。
「なにやってんの、あんた」
その時、上から声が降ってくる。
自分に声をかけてくる人など滅多にいないので、反射的に顔をあげてしまった。
「ああっ！　やっぱり！　黒いパーカーとこの匂い！　そうじゃないかと思ったのよ！」
埜亞はぎょっとして慌てて俯こうとしたが、その女子生徒に首根っこを掴まれてしまう。
「……せ、聖花さん？」
「あら、よく名前覚えてたわね。でもあんたはさんじゃなくて様をつけなさいよ、様を」
首根っこを離し、埜亞の目の前に屈んで目線を合わせる。
「で、あんたなにやってんのここで？」
「な、なっ、なにって……」
じとーっと見てくる聖花の視線に怯え、埜亞はあわあわしだす。
「……わかったわ」
「ええっ！？」
「あんたここでサボってんでしょ！」
「ち、ちがっ……」
首を左右に振って必死に否定する埜亞を見て、聖花は半ば残念そうに「あ、そう」と相槌を打つ。
「こんな球を投げ合って一体何になるのかしらね。ピルプの思考ってほんっとわけわかんないわ」
言って、聖花は人差し指の上にバレーボールを乗っける。人差し

指の上で回しているわけではない。恐らく人差し指の上で浮いているのだ。
「で、でも、これが体育ですし……」
「ふーん。あんた達、いっつもこんなことやってんの？」
「いっ、いつもでは……で、でも、よく二人組とか、グループになって、いろいろ、することは多いです。と、特に球技は」
「へえ。めんどくさいけど仕方ないわね。成績とやらに響くみたいだし」
聖花はめんどくさそうに立ち上がる。
「……」
その時立ち上がって歩み出る聖花の背中を見て、埜亞は少し寂しいと感じていた。
まさか喋りかけてもらえるとは思っていなかったし、こうやって少しでも話せたことが嬉しかったからである。
もちろん輝十や杏那も嬉しいが、それとは違う嬉しさがあった。例え悪魔であっても、見た目は全く人間の女の子と変わりない。つまり同性の女の子に話しかけてもらえる、というのは何とも言い難い気持ちにさせられたのだ。
「ちょっと。なにやってんのよ」
立ち上がって振り返るなり、聖花はしかめっ面で埜亞を睨み付ける。
「え！？　ええっ！？」
急に怖い顔をされて、埜亞はわけがわからずフードを引っ張って顔を隠そうとした。
「パス、するんでしょ？　なに座ってんのよ。日本語が通じないピルプなんて初めて見たわ」
心底呆れたように言う聖花。
パス？　誰と？　誰が？
混乱している埜亞にあからさまにイライラしながら聖花は補足する。

「あんたバッカじゃないの？　一緒にパスしてあげるって言ってるのよ。ここまで言わないとわからないわけ？」
普通この流れでわかるでしょ？　とぶつぶつ言いながら、手の平でボールを転がす。
「えっ……？」
真っ直ぐに自分を見てくる透き通った瞳。その青みがかった綺麗な瞳は決してからかっているようにも、嘘を言っているようにも見えなかった。
「パス、しなきゃなんでしょ？　この体育とやらは」
「は、はいっ、です」
埜亞は重い腰を持ち上げて、聖花を真っ直ぐ見つめ返した。
顔をあげることすら怖かったのに、今は不思議と恐怖を感じていなかった。彼女はきつい言い方をしているようで、瞳は全く怒っていない。
沢山の視線と瞳を警戒してきた埜亞には、その目が自分を一人として扱っていることがすぐにわかったのだ。
埜亞が立ち上がったのを見て、聖花はふんっと鼻息を荒くし、
「それと」
「！？」
勢いよく、埜亞のフードを払い飛ばした。
する……っとフードが肩に落ち、埜亞の綺麗な黒髪が露わになる。
「私と話す時はフードぐらいとりなさいよ、礼儀知らずね。それでもピルプなの？」
いつもの埜亞なら絶叫し慌ててフードを被り直すのだが、不思議とそんなことまで頭が回らなかった。
聖花は埜亞にそんな余地を与えぬ程、きっぱりとその言葉を叩き付けたからだ。
その言葉は今まで聞いたものとは違った。それは初めて“叱られた”瞬間だったのである。
誰かを叱るということは、その人への気配りがないと成立しない。

一方的に叱るというのはただの罵倒にすぎないのだ。
埜亞にとってそれは文句でも嫌味でもない、初めて受けたお叱りだった。
「あ、あのっ……す、すみません、です」
聖花は答えず、付いてこいと言わんばかりに先を歩いていく。
埜亞はフードに手を添え、そのまま被りたい気持ちをぐっと堪える。それは埜亞にとって息苦しく、目が回りそうな気分だったが、それでもここで被ってしまってはいけない気がしていた。
埜亞は艶やかな黒髪を揺らしながら、聖花の後追う。

「あれ？　あいつらいつの間に」
輝十はボールをキャッチしたままの体勢で、首だけ回して女子の方を向く。
杏那が変なことを言うもんだから、あれから埜亞の様子が気になっていたのだ。同性の友達がいないというのは、きっと女としては致命的できついことだろう。こうやって男女別の授業もあるわけで。
輝十が目を向けると、意外にも聖花と組んでパスをしている埜亞の姿があった。運動音痴らしい埜亞と手加減を知らない聖花の組み合わせでは、決してパスは成立していなかったが。
「なにー？　黒子ちゃんが心配？」
にやにやしながら、杏那は輝十からのパスを受け取る。
「てめえが変なこと言うからだろ。ま、見た感じ大丈夫そうで安心したけどな」
「優しいねぇ、輝十くんは。女の子のそーんな心配までしてあげるなんて」
「俺は元から優しいっての。それに埜亞ちゃんみたいにまともな女の子は貴重だからな」
挙動不審でちょっと変わってはいるが、人間で、しかも腐女子ではない。そして大きなおっぱい。顔も可愛かったし、そんな女友達がいれば仲良くしたいと思うだろ普通。

杏那の投げ返したボールをキャッチし、輝十は投げ返しながら言う。
「つっても男の俺がいつでも側にいられるわけじゃねえしな。やっぱ大事だろ、同性の友達って」
それは自分にも言えることだ。
中学の頃は男にモテたせいで基本的に同性は避けるようにしていたし、常に警戒してたが、赤井と青井だけは違った。あの二人がいたから助かったこともある。た、多分。
同性にしかわからないことってのは、今からもこの先もきっと大いにあるだろう、と輝十は思うのだった。
「同性の友達、ねぇ。彼女は立派なスクブスだけど」
「んでも見た感じ女じゃねえか。大差ないんじゃねえの」
「俺だってお腹いっぱいになったら女の子になっちゃうけど」
「おまえは男だろ。世の中にはな、人間でもおっぱいのある男がいるんだよ」
それは造られたもっとも憎むべきおっぱいなんだけどな。
輝十はボールを投げ返しながら再び埜亞達に一瞥くれる。
飛んできたボールをキャッチしながら、そんな輝十を見て杏那は仕様もなさそうに笑みを零した。

（5）

体育が終わり、教室に戻る頃には通常通りフードを被っていた埜亞だが、内面的にはフードの一枚や二枚とったような気持ちでいた。
昼休みになると一斉に生徒達は散らばり、また同じように埜亞の前席の女子生徒は埜亞を通り越して後ろの席の子を食堂に誘う。
埜亞は唇を噛みしめて、ぐっと堪えた。
さっき声をかけてくれた聖花の顔を思い出すと気分が中和される。不思議と最初のように気分は沈まなかった。
「なーに突っ立ってんだよ」
突っ立ったまま教室を後にする女子生徒二人組の背中を見ていた埜亞は、肩を叩かれ、全身に電流が走ったかのようにびくつかせる。
「な、なんだよ……驚かせて悪かったな」
そのあまりの驚きように思わず声をかけた主は謝ってしまう。
「ざ、座覇くん！　と、妬類くんも……！」
深呼吸し、気を落ち着かせ、振り返るとそこには輝十と杏那が立っていた。
「飯行こうぜ、飯」
あたかも当たり前の流れかのように誘う輝十。
返答に困っている埜亞を見て、
「あ、わりい。もし誰かと約束してんならそっち優先で」
はっとして気遣いの言葉をかけた。
埜亞は水浴びした子犬のように、小刻みに首を振って、
「い、いえっ。ぜ、ぜひっ、ご一緒させて、ください」
ぺこり、と頭を下げる埜亞。
輝十達と一緒に昼休みを過ごせる。それだけで埜亞は嬉しかった。
なんだろう、このほっとする感じ……。
あるべき場所に戻るかのように吸い寄せられ、二人といると居心地がよかったのである。

それに聖花さんともまたお話出来るかもしれないっ。
唯一の接点である彼らと一緒にいることで、もしかしたらまた話す機会があるかもしれない。それはそれで、また埜亞にとっての楽しみとなった。

三人が教室を出た後、まるで狙っていたかのようなタイミングで聖花がずけずけと教室に入ってくる。
自分の教室ではないというのに、堂々と我が物顔で入ってくるその姿は人目をひいていた。
「いないじゃないの」
一通り教室内を見回したところで、口を尖らせて拗ねる聖花。
「ちょっと、あんた達。輝十くん見なかった？」
そして消息を確認すべく、秀でて綺麗な顔立ちの男子生徒達に声をかけた。
「輝十……？」
その反応にいらっときたらしい聖花は、腕を組んだまま舌打ちする。
「蜜の香りが異常に強いピルプのことよ」
「ああ。彼なら妬類杏那とピルプの女の子と一緒にさっき教室出てったけど」
「はぁ！？　出ていった？　どこに！」
「さあ？」
本当に知らない様子で、男子生徒達は顔を見合わせる。そして聖花に顔を近づけ、
「なに、おまえあのピルプと知り合いなの？　紹介してよ。あの匂いは反則でしょ。マジたまんないんだよね」
耳元で艶っぽく囁く。
「はぁ？　冗談じゃないわよ、この淫乱家畜風情の下級脳。同じクラスのくせに……私だって同じクラスがよかったのにぃ……！」
恨み言をグチグチ言いながら、男子生徒達を睨み付ける。

男子生徒達はそれを小馬鹿にするような態度で、
「同じクラスつったって……なぁ？」
「ああ。あのピルプの傍らにはいつもあの妬類杏那がいるんだぜ？」
それを聞いた聖花がひきつった顔で、彼らを見る目を細める。
「悪いことは言わない。あのピルプにそそられるのはすげーわかるけどさ。妬類杏那のお手つきなら辞めとけって」
「だよな。同じ下級悪魔とはいえ、あいつは……」
聖花は地団駄を踏み、そのまま椅子を蹴っ飛ばす。あくまで力には頼らず、ただ八つ当たりするかのように椅子を蹴っただけだ。椅子はガタン、と音を響かせて倒れる。
「ふん、悪魔が悪魔を恐れてどうするのよ。そんなのピルプがピルプを恐れるのと同じじゃない」
男子生徒達は顔を見合わせて、肩をすくめる。
聖花はそれ以上何も言わず、あからさまに不機嫌さをまき散らして教室を出ていった。

一方、その頃。
教室を後にした輝十達は、昨日の石碑前のベンチを陣取っていた。
相変わらず昼休みというのに、石碑のある屋上には他の生徒の姿が見当たらない。
「ここ穴場だよなぁ。他に人こねえし」
輝十がそう漏らすと杏那は苦笑した。
埜亞は二人がベンチに腰掛けたのを見て、どこに座ればいいかわからず、おろおろしていると、
「ん？　なにやってんだよ、座れば？」
それに気付いたらしい輝十が自分の隣を手で叩き、座るよう促してくれた。
「あ、ありがとう、ございますっ」
埜亞は元気よくお礼を言い、そっと輝十の隣に腰を下ろす。

何事もなかったかのようにビニールからパンを取り出し、コーヒー牛乳のパックにストローを射している輝十を横目で見て、埜亞は急に顔が熱くなるのを感じた。
どうしてこんな私なんかに優しくしてくれるのだろう。なんで昼食も誘ってくれたのかな……。
輝十自身に深い意味はなく、三大式典で知り合ったのも何かの縁だし、腐女子ではないし、同じ学校に通う者同士仲良くやっていこうぐらいにしか思っていない。
しかしそんななにげない優しさが彼女の心の隙間を優しく包み込むように埋めていた。
さっきの聖花の時とは違う、嬉しさが込み上げてくる。どうして二人でこうも感覚が異なってしまうのだろう。
杏那は紙袋からチョコチップマフィンを取り出して口に運びながら、お弁当箱を膝の上でもそもそと開けている埜亞を見ていた。見ていたといっても決して“行動”だけを見ていたわけではない。杏那は杏那で彼女の心の移り変わりを察していたのである。
「埜亞ちゃんって自分で弁当作ってんの？」
「えっ！？　あ、はい、です。ざ、座覇くんは……パン、ですか？」
「ああ。俺料理出来ねえし、母さんもいねえしな。男所帯だから」
「そう……なんですか……ご、ごめんなさい。へ、変なこと言って」
聞いてはいけないことを聞いてしまった気がして、埜亞は一人で落ち込み出す。
「いやいや！　別に気にしてないって！　んな母さんいなくて寂しがるような歳じゃねえって」
杏那がうんうん頷きながら、
「輝十のお父さん、お菓子以外の料理も上手だし、単に弁当持っていくのが恥ずかしいだけだよ。だから黒子ちゃんが気にする必要ないない」
紙袋から再びマフィンを取り出す。
「てめえが言うとなんっかむかつくんだよな」

「えー？　だって事実でしょ？　これもおじさんがくれたやつだもん」
言って、杏那はマフィンを見せびらかしながら口に運ぶ。
それを見た埜亞は、言わねばと思っていたことを勇気を出して口にする。
「こ、このっ、間！　も、もらったクッキー……すごく美味しかった、です。て、輝十くんのお父さんが作った、クッキー！」
拳を握り締め、力んで言う姿を見て、
「そ、そうか。ならよかった。ま、あんなクッキーでよけりゃいつでも食わしてやるよ。店やってるし」
「ほ、本当ですか！？」
「ああ。ケーキでもいいし、一応西洋菓子は一通りあるからよ」
箸を握り締めて、顔をあげる埜亞。ぐるぐる眼鏡で表情がはっきりわからなくとも喜んでいることぐらい雰囲気でわかる。
たったそれぐらいで心底嬉しそうにしてくれる埜亞が可愛く思え、輝十がほっこりした気持ちでいると、突然突風に煽られる。
その嫌な風に全身を煽られたのは、初めてではない気がした。
風向きが不自然で、まるで巨大な扇風機があるかのように屋上の入口から風が溢れ出ている。
「……せ、聖花？」
輝十が台風の目のごとく、風の中心部にいる人物を呼んだ。
何故怒っているのか輝十にも埜亞にもわからなかったが、明らかに穏やかではなさそうだ。
「！」
輝十は殺気を感じ、埜亞の腕を引っ張ってベンチの後ろに隠れる。
突風に吹かれ、ベンチはガタガタガタと震える音を響かせる。
びくともしない杏那はめんどくさそうに溜息をつき、
「ちょっと時間稼いでくるから」
輝十ではなく、あえて埜亞に向けて言った。
首を傾げる輝十の横で、埜亞はその言葉の意味を必死で探る。

「あのさぁ、もう少し力を制御したらどうなの？　石碑なかったら人間死んでると思うんだけど」
向かってきていた聖花を通せんぼするかのように、杏那は目の前に立ちはだかって言う。
「う、うるさいわね！　そもそもあんたがいけないのよ、妬類杏那！」
「えーなんで？」
「私が輝十くんとお昼一緒に食べようと思ったのに！　ぬけがけして屋上に、しかもまたコテージガーデンなんかに連れ込みやがってェ……」
悔しそうに言う聖花に向けて、再び盛大な溜息をついてみせる杏那。
「あのねぇ、ちょっと考えればわかるでしょ。学園内ならここにいた方が輝十達は極力安全なんだから」
「それは！　そうだけどぉ……」
杏那は歩み出て、
「ちょ、ちょっと！　なにすんのよ！　気安く触るなバカ！」
聖花の背中を入口まで押し、屋上から追い出す。
「はいはい。落ち着いて。昼食なら後で交ぜてあげるから」
「キィィィィ！　なんっであんたはそう上から目線なのよ！　どうせ見下してんでしょ、私が下級悪魔だからって……」
杏那から表情が消え、目の色が変わり、さすがの聖花もそれ以上何も言えなかった。
「ほんっと血の気が多いね、スクブスは。ちょっとは落ち着けないのかな」
「う、うっさいわね。ほっときなさいよ」
その言葉の通り、さっきからずっと怒鳴り散らしてばかりの聖花。
しかし杏那がまともに相手していないことに気付いたのか、気を落ち着かせ、核心に迫ることにする。

（6）

「そもそも……あんたみたいなのが輝十くんにこだわる理由ってなによ。婚約者ってだけじゃないんでしょ？」
杏那は一拍おき、考えたふりをして答える。
「んー7割は婚約者だって聞いて面白そうだったからだけど。3割は自分でもよくわかんないんだよねぇ」
「はぁ？　わからない？」
「うーん？　うん。なんていうか、放っておいちゃいけないような、構いたくなるような……まるで昔から知っていたかのような。不思議な感覚っていうか」
「昔から知ってたようなって……知ってたんじゃないのそれ」
「さあ？　俺、昔の記憶が一部欠落してるみたいだから。人間でいうと記憶喪失みたいな？」
「……」
聖花は言葉を失い、怯えるような顔で杏那を見た。
「あはは、そんな顔しないで欲しいねぇ」
「あははじゃないわよ！　悪魔の、しかもあんたクラスの悪魔の記憶を操作するってよっぽどじゃない！」
杏那は作り笑いを浮かべた。
「ま、プロテクトだろうね。だったら必要な時がくれば解けるでしょ、多分」
二人の間に沈黙が訪れ、聖花が気まずそうに髪を耳にかける。
杏那は半ば呆れた様子で笑みを零す。
「あんたもここがコテージガーデンだってわかっててやってくるんだから、結構な物好きだと思うんだけど？」
「し、仕方ないじゃないの。輝十くんがここにいるんだから」
「ご執心だねぇ。性に忠実というか、ただの痴女というか」
青筋をたてて、キッと杏那を睨み付ける聖花。

睨まれた杏那は両手をわざとらしくあげて降参を示す。
「まあいいわ。あんたがいれば他の淫魔も早々手は出せないでしょうし。せいぜい輝十くんのボディーガードでもやっててて頂戴」
「はいはい、そうさせてもらうよ」
「輝十くんと使役契約をいずれ交わすのは私なんだから！」
言って、聖花が屋上に戻ろうとすると杏那は入口に手をかけて通せまいとする。
「ちょっと、なに？　まだなにかあるの？」
心底うざそうに可愛らしい顔を歪め、杏那を睥睨する聖花。しかし杏那の視線は違うところを向いている。
その異変に気付いた聖花が振り返って杏那の視線を辿った。
「ねーあんたさっきからそこにいるよね」
杏那は階段下の踊り場に向かって声をかける。
灰色のスカートを揺らし、その人物はそそくさ身を隠した。
「灰色の制服……」
聖花が苦い顔でぽつりと呟く。
杏那達、淫魔はその制服の色の意味を知っている。黒でもない、白でもない。精霊式で“精霊に判別してもらえなかった者”を示す、その灰色の意味を。
「俺らに何か用？」
杏那が声を大にして話しかけると感情のこもっていない声色で、
「別に用はない」
即答する灰色の彼女。
「ふーん。ま、来たかったら来なよ。どうせここには俺らしかいないからねぇ」
何故、ここには杏那達しかいないのか。コテージガーデンとは何なのか、がわかっている前提で話をする。
「ねぇ？」
杏那が聖花に同意を求めると、
「はぁ？　なんで私に振るのよ。意味わかんない」

ぐするように唇を尖らせたが、それに付け加えるようにして、
「まあ私みたいに心が広い高貴なるスクブスともなれば、別に灰色ごとき気にしないけどね」
自慢げに言って髪を靡かせた。
そう言うだろうと思った上で話を振った杏那だったが、案の定すぎて呆れ顔になっている。
「ちょっと。なによその顔」
「いや誰が高貴なのかなーと思って」
「はぁ！？　どう見たってこのわたわたたたたんうっ……！」
杏那は聖花の口を塞ぎ、屋上に追い出すようにして押し出す。
振り返り様に踊り場を確認するが、灰色の彼女の姿はなかった。

杏那達がそんなやりとりをしている頃。
杏那と聖花が向き合い、屋上から姿を消してから嘘のように突風がなくなっていた。
「なにやってんだ、あいつら……」
輝十はじと目で杏那達が出ていった入口を眺めていた。
何事もなかったかのように座り直し、再びパンにかぶりつく輝十。
それを横目で見つつ、埜亞はさっきの杏那の言葉を思い出していた。
あれは自分に向けて言ってくれた台詞だ。何故、自分に向けてあんな台詞を吐いていったのか。
埜亞がそれを理解するには少々の時間を要した。
「え、なに？」
「い、いいい、いえっ！」
視線を感じた輝十が埜亞に問うが、埜亞は顔を真っ赤にして慌てて否定する。
もちろん顔の赤みなど、フードと眼鏡の完全防備なので輝十にとってはわかりやしない。
深く気に留める様子もなく、コーヒー牛乳を口にする輝十。

この時、埜亞はあることに気付く。
な、なんでだろう……妬類くんがいる時は平気だったのに、いざ二人きりになると今まで以上にどうしていいかわからない……。
何を話せばよいのか、どういう顔をすればいいのか、ここで食事を続行していいものか。そんな細かいことまで気になってしまう。
三大式典の時と何かが違った。あの時は輝十のペースに巻き込まれていたが今は違う。同じ時間を同じように刻んでいて、一緒に過ごしている。
自ら望んで、彼の隣に今自分はいるのだ。
「……っ！」
そんなことを考えていたら脳内がヒートアップしてしまい、埜亞は叫びたい気持ちを堪えて俯く。
様子がおかしい埜亞に気づき、輝十は食べ終わったパンの袋を丁寧に結んで小さくしながら、
「あのさ、おまえなんですぐ俯くの？」
気になっていることを率直に問いかけた。
埜亞は顔はあげなかったが、丸まった背中を伸ばして姿勢を正す。
どうしてすぐに俯いてしまうのか――それは自分でもわからなかった。いや、わかっていて、ずっと無意識で行ってきていたのだ。
「こ、こわくて……」
「お、俺が？」
「ち、ちがっ、違いますっ！」
それだけは顔をあげて、全否定する埜亞。
「あ……その……」
そしてまた気まずそうに自分の太ももと睨めっこした。
埜亞は言うか言うまいか悩み、太ももの上でぎゅっと拳を握る。
しかし今しか言う機会はないだろう、と思ったのだ。
何故それを彼に言うのか？　言う必要があるのか？
埜亞にはわからなかった。それでも輝十には聞いて欲しい、言っておきたい、そう思ったのである。

重い口を小さく開き、金魚のように何度かぱくぱくさせてからやっと声を吐く。
「わ、私……しょ、小学校も中学校もずっと、いじめられてたんです」
フードの紐をいじりながら、埜亞は震えた声で静かに語り始めた。
「こ、こんな、んだから……趣味も、オカルト的、だし……みんなに気持ち悪いって、言われてました」
へへ、と力なく笑って見せる埜亞。
輝十は笑いも茶化しもせず、黙ってその言葉に真摯に耳を傾ける。
「しゃ、喋り、方だって、どもってるし……み、みんなが汚いものを見る、ような、軽蔑した目で私を見る、んです」
いつも以上にどもりながら喋る埜亞を眉尻を下げて見つめる輝十。
「こ、こうやってれば、視線があまり目に入らない、んです」
言って、フードと眼鏡を触って見せた。
「友達も、いた、ことなくて……こうやって、人と一緒に、お、お弁当食べるの初めて、です」
「そうか……」
力なく言うその台詞には明らかに感情がこもっていて、本当に今まで一人だったんだな、と輝十に感じさせる。
たったこれだけのことで、そんな嬉しそうにしてくれる。
「まあ、確かに埜亞ちゃんの趣味は変わってるっちゃー変わってんだろうけどよ」
輝十は居たたまれない気持ちになりながらも、いつも何かに怯えている彼女に言わねばと思ったソレを口にした。
「だからってそんな気にすることないんじゃねーの？　いいじゃん、別に他人がどう見てようとさ。好きなもんは好きで」
「……え？」
いつだって、人は気持ち悪いといって避けたがった。ありえない、と言って全否定されてきた。
それを彼は……。

埜亞は顔をあげ、真っ直ぐに輝十の顔を見る。
人の顔を真っ直ぐに見ることは恐怖でしかなかったが、そんな言葉をくれる彼を見ずにはいられなかったのだ。
どんな顔をして、そんなことを言ってくれるのか気になったのである。
レンズ越しに見る彼の顔は、今まで自分に向けられたことのない優しい顔をしていた。人がこんな顔をするのを見たのは初めてかもしれない。
自分が見ることを恐れていたのか、自分にそんな顔をしてくれる人がいなかったのか。
「あとさ、俺思うんだけど」
輝十は埜亞のフードを払いのけ、両手でそっと眼鏡を外す。
「やっぱりどっちもない方が可愛いよ、うん」
真っ黒な艶やかな髪とくりっとした大きな黒目が特徴的な可愛らしい顔。そんな彼女本来の姿を前にして、輝十は歯を見せて笑った。
「……」
この事態を埜亞の脳が処理するまでには結構な時間を要し、硬直したまま執拗に瞬きを繰り返す。
「か、かか、かかか……かわっ……！」
全身を電流が駆け巡り、いつも以上にあわあわし出す埜亞。
やっと処理が終わったらしい脳からの伝達を受け、今自分が彼に何を言われたのか理解したのである。
「うん、勿体ねえと思うんだよな。むしろパーカーごと脱いで欲しいぐらい」
言いながら輝十は埜亞の大きな膨らみ部分に視線を熱く注ぐ。

(7)

「そ、そん、そんなっ……そ、それは……」
埜亞はそれを拒否するかのように自分の体を抱きしめて見せる。
埜亞の腕に押し潰されて柔らかく弾力のあるソレは形を変え、むにむにした感触が目で見てわかるように腕の隙間から零れ落ちそうになっていた。圧迫されたせいで普段の二倍胸が大きく見える不思議効果だ。いわゆるショルダーバックの時に斜めかけの紐が胸を圧迫すると大きく見える現象のソレである。
それを輝十が見逃すはずがなく、その一点をまじまじと見ながら、
「そっか、残念だな」
心底残念そうに呟く。
「……どこ見て言ってるのかな？」
溜息交じりの声が傍らから聞こえ、輝十が振り返るといつの間にか杏那が隣に腰掛けていた。
「どこってそりゃ女の子を前にして見るところなんて一つしかないだろ。正確には二つついてんだけどな」
なんて輝十がどや顔で言うもんだから、輝十の目の前で仁王立ちしていた彼女が、
「そんなに見たかったら私のを見て？　いくらでも見てくれていいんだからっ！」
「！？」
ぐわしっ、と輝十の顔を両手で押さえ込み、自分の胸の前に持っていく。
「聖花！？　わ、わかった、わかったから！　とりあえず顔を離してくれ！」
ぐいぐいと顔を引っ張られ、痛みと共に顔面に肉感のいい柔らかなものがあたってくる。
嗚呼、これが母性というものか……。

「ん！　んんっ！」
そう悟った時には、既に肉に溺れて呼吸困難になっていた。
すっかり気後れした埜亞は、その光景を眺めながらどうしていいのかわからないでいる。
そんなおろおろしている様子に気付いたらしい杏那が、
「このままだと輝十は窒息死するんじゃない？　ま、大好きなおっぱいで死ねるなら本望だろうけどねぇ」
「ち、窒息死！？　だ、大好きな……」
埜亞の中で輝十の大好きなものがソレであるという事実が脳内でぐるぐる回り始める。
「ほらほらぁ、早く助けないと」
それを挑発するかのように、楽しげに言う杏那。
輝十は聖花の谷間に押し潰されて、それどころじゃなくなっている。聖花は輝十の顔を抱きしめて、息苦しそうにしている輝十が喜んでいると完全に勘違いしている様子だった。
「うう……」
埜亞は自分の眼鏡のように、目の前がぐるぐる回っていくのを感じていた。
混乱と葛藤が同時に襲い、その結果、結論を実行するには今までの自分がこもっていた分厚く硬い殻を壊さなければならない。
杏那はそれを横目で興味深そうに見つめていた。
どうしよう、どうしよう……どうしよう！　何度も心の中でその言葉を口ずさむ。
『やっぱりどっちもない方が可愛いよ、うん』
脳内で再生された、その台詞は埜亞にとって良い引き金となった。
まるで再び今言われたかのように、声色も声量も輝十の表情も鮮明に刻まれている。
かわいい……わ、私が？
今まで言われたこともなければ、考えたこともなかった。女性である意味も考えたことがなく、自分が人として扱われているかどう

かすら危うかった。
気色悪いと何度言われたことだろう。それがかわいい……？
本当に気色の悪いと思っている相手に、お世辞でも“かわいい”なんて言うだろうか。きっと言う人間はいるだろう。でも彼がそういう人間じゃないことぐらいわかっている。
埜亞は俯き、フードのチャックに手を添える。
「あ、あのっ……！」
その声に気付き、聖花が邪魔されたとばかりに顔を歪める。
輝十も埜亞の声に気付き、谷間の中で肉欲と戦いながら顔を横に向けた。
「わ、わわわ、私のも、どう、どうですかっ！？」
言った瞬間、埜亞は勢いに任せてフードのチャックを全開にし、黒いベールを脱ぎ捨てた。
予想以上の行動に杏那は噴き出し、
「なっ！」
聖花は眉をぴくぴくさせながら、言葉を失っていた。
それから聖花の力が緩んだ隙に脱出した輝十がワンテンポ遅れてそれを見て、
「え……」
自分で言っておきながら、まさか本当にパーカーを脱いでくれるとは思っていなかったので、驚愕のあまり口が閉まらなくなっていた。
フードの下に隠れていた大きな胸がここぞとばかりに自我を主張している。
「え、え、えええええっ！？」
三人の異様な視線に気付き、恥ずかしさが倍増したのか、顔を真っ赤にした埜亞はパーカーを抱きしめて胸元を隠す。
「これは予想以上」
杏那が頷きながら関心していると、
「だな、予想以上にでかかった。まあ知ってたけどな」

予想違いのことを言い出した。
「俺が言ってるのはおっぱいの大きさの話じゃないんだけど」
「あ？　んじゃなんの話なんだよ」
そんな会話を目の前にして、埜亞は顔から火が出そうな勢いだった。
「誰かと思えばあんたじゃない。なに脱いで誘ってんのよ。ええ？」
「ひええっ！？」
聖花は埜亞の胸を指で突きながら舌打ちする。
「体育の時までそれ着てたくせに。なによ、脱ごうと思えば脱げるんじゃない」
「え、あ……その、は、はい」
埜亞は抱きしめていたパーカーを見つめ、今自分がこれを脱いだことを実感する。
今まで人前でこれを脱ぐことなんて考えられなかった。この黒で自分を覆うことで自分を守ってきたのだ。それを今脱いでいる。
埜亞はパーカーと三人を見比べる。
「な、だから言っただろ？　脱いだ方がいいってよ」
輝十に笑みを向けられ、埜亞は顔が熱くなるのと同時に胸がきゅっとなるのを感じた。決してそれは痛いものではなく、嬉しいようなむず痒いような不思議な気持ちだった。
埜亞は輝十の言葉に小さく、こくんこくん、と頷いて見せた。
「そもそもそんな黒いの制服の上に着てるなんてナンセンスなのよ」
腕を組み、自分のスタイルを自慢仕返すかのようにどや顔しながら言う聖花。
「そんなの着るなんて勿体ないわよ、って彼女は言いたいんだと思うよー」
髪を靡かせている聖花に杏那が棒読みで突っ込みを入れる。
「はあっ！？　誰もそんなこと言ってなっ……」
「まあまあ、そう怒らずに」
胸倉を掴んで今にも殴りかかってきそうな勢いで怒鳴る聖花を宥

める杏那。
「ふんっ。別にそんなこと思ってないわ。ただ私と一緒にいる時にそんなダサい格好で気弱なオーラ出されちゃ迷惑なのよ」
その言葉の意味を思案しながら、埜亞は聖花に視線を送る。
腕を組んだまま膨れっ面で視線を逸らす聖花。でもそれが怒っていないことは埜亞にもわかる。
「……なによ？」
埜亞の視線に気付き、聖花は視線を突き返す。
「い、いえっ！　あ、あの……今日、嬉しかった、です。キャッチボール……わ、私なんかとして、くれて。ありがとう、ございますっ」
まさか礼を言われると思っていなかった聖花は、狐につままれたような顔をする。
にっこりと笑う埜亞。フードも眼鏡もない、パーカーすらない、すべてを脱ぎ捨てた彼女の笑顔はそこにいる三人の心を温かい気持ちにする。
「べ、別に礼なんて……てか“私なんか”って辞めなさいよ、“なんか”って。そんな自分を卑下することないでしょ」
「は、はいっ！」
そんな二人のやりとりを見て、輝十と杏那は微笑ましい気持ちになり、互いに顔を見合わせて安堵の溜息をついた。
そしてタイミングよく鳴り響くチャイム。
「ちょ、私何も食べてないじゃないの！　どうしてくれんのよ！」
「いいじゃーん、一食ぐらい。別に俺ら死なないんだし」
適当にあしらう杏那の胸倉を掴んで、聖花は怒り任せに揺さぶる。
昼休み終了のチャイムと共に、ベンチから立ち上がる輝十。埜亞は立ち上がった輝十を見上げ、口をもごもごさせて“それ”を言うか迷った。
今の自分なら言えるかもしれない。
でもこわい、私なんかがこんなこと言っていいはずがない……、

と思ったところで、さっきの聖花の言葉を思い出す。
私が言ってもいいのかな。みんなは嫌な気持ちにならないかな。
しかしきっと言わないと後悔するだろう、と埜亞は思った。今、この時、この瞬間に――自分から言わないときっと変われない。
今までの出来事が走馬燈のように駆け巡り、そして最後に浮かぶのは……。
埜亞は息を飲み、口を大きく開け、
「あ、あのっ！」
立ち上がって、出入り口に向かおうとしている三人を呼び止めた。
「どうした？」
振り返って一番に声をかけてくれたのは輝十である。
埜亞はもう迷わなかった。言うしかない、とそれしか頭になかったのである。
「ま、またっ！　昼食、一緒に食べてもいいですか？」
そんなことを何故聞くんだろう、と普通なら思うかもしれない。
でもその場にいる誰もがそうは思わなかった。埜亞が精一杯の勇気を振り絞って言っていることぐらい、わかっているからでる。
埜亞が制服のスカートをぎゅうっと強く握り締めているのを見て、輝十は務めて明るく、そして優しく答えた。
「いいに決まってんじゃん。つーか、毎日でも一緒に食べようぜ」
輝十の声に便乗するかのように、
「うんうん。そうしよーみんなで食べた方が楽しいしねぇ。ねぇ？」
杏那は言って、わざとらしく聖花に話を振る。
「ふんっ。いいんじゃないの。私は輝十くんがいれば別になんでもいいわ」
「またまたぁ、素直じゃないんだから聖花ちゃん」
「気安く名前を呼ぶな気持ち悪い死ね」
聖花が杏那に蹴りを入れるが、可憐に交わされる。
そんな三人三種の反応を見て、埜亞は目を大きく開いてぱちくりさせた。

（8）

「いい……んですか？」
「もちろん。よくなかったら今も一緒にいねえだろ。な？」
と、言った側から杏那に向けて跳び蹴りしたはずの聖花の蹴りが、ぎりぎりで避けたせいで輝十の横っ腹に命中してしまう。
「ギャアアアアッ！　輝十くん！？　大丈夫！？　全部このインクブスが悪いの！　本当よ！　ちょ、何この泡……輝十くん！？　輝十くんしっかりしてぇ！」
白目むいて泡を吹き出す輝十を介抱しながら、慌てふためく聖花。
その超展開に呆然とする埜亞だった。
「話、ゆっくり出来たかな？」
そんな二人の命がけコントは放っておいて、杏那は埜亞の隣に歩み寄って小声で問いかける。
「え……？」
「輝十と二人っきりにしてみたんだけど」
埜亞はその言葉の意味に気付き、頬を赤らめて地面を見る。
「ま、その反応だけで十分だけどねぇ」
にひひ、と茶化すように笑ってみせる杏那。
埜亞は大きく深呼吸をし、心を落ち着かせ、相手は悪魔相手は悪魔……と自らに暗示をかけるように呟いて顔をあげる。
「と、妬類くんは言いました。俺は悪魔だから人間の心の隙間に入り込むような生き物だって。だから……妬類くんは私の心の隙間の埋め方を教えてくれた。導いてくれたんですよね？」
面食らった杏那は、何も言えずに埜亞の別人のような明るい笑顔を目にした。
「心の隙間がわかるからこそ、だと思います。妬類くんの言うように友好的な悪魔だけじゃないことはわかります。でもいい悪魔だっていますよね」

「さぁ？　どうだろうねぇ。所詮、悪魔は悪魔かもよ？　ま、でも……」
杏那は今だに泡を吹いて意識を取り戻さない輝十を眺めながら、口元を緩める。
「少なくとも俺は好きなんだよねぇ、人間」
それを聞いた埜亞はなんだか嬉しくなり、持っていたパーカーを抱きしめた。
「私も好きですっ！　大好きです！　悪魔！　そ、それと……」
悪魔は今までもずっと興味があって好きだったものである。でも“アレ”については違う。好きか嫌いかと問われれば嫌いだった。ただの恐怖対象だったから。
でも今はちょっとだけ変わった気がする。
埜亞は意識を取り戻したらしい輝十に視線を送りながら言った。
「人間も……きっと、好きです」

（1）

「やっぱりパンにはコーヒー牛乳だよなぁ。ま、俺は飯にコーヒー牛乳でも平気だけど」
「ざ、座覇くんはすきですね、コーヒー牛乳」
「そりゃコーヒーと乳の結合だからな。おっぱいに苦みを加えたようなもんだ」
うんうん、と深々と頷きながら語る輝十を白々しい目で見て、
「なんでもおっぱいに結びつけるのやめなよね」
杏那が冷静に突っ込んだ。
その傍らで埜亞は反応に困っておろおろしている。しかし今までよりも落ち着いており、どもった喋り方もましになっていた。
あの一件があってから、彼女の中で彼女を硬く深く覆っていた殻が破れたのだ。
制服の上に羽織っている真っ黒なパーカーは相変わらずだが、決定的に違うのは……。
「ね、気になってたんだけど。それってレンズないの？」
杏那が埜亞の眼鏡を見ながら問いかける。
「は、はいっ。今流行っていて、オ、オシャレとお聞きしたので……」
頬を赤らめて恥ずかしそうに眼鏡をかけ直す埜亞。
埜亞のかけている眼鏡はあられちゃん眼鏡といわれる、黒縁でフレームの大きな眼鏡である。レンズがない為、フレームだけの完全ファッション用商品だ。
「え！　マジ？　それレンズねえの！？」
輝十は隣にいながらもそれに気付かなかったようで、興味津々で埜亞に顔を近づけてまじまじと見つめる。
「ひえええっ！？」
埜亞は慌てて顔を逸らし、輝十から逃げるようにして体を離した。

「おい、なんで逃げんだよ」
それを追いかけようとする輝十に、
「女心を汲み取ってあげたら？」
杏那が苦笑しながら溜息交じりで突っ込んだ。
杏那の言っている意味が全く理解出来ていない輝十は深く気に留めず、そのまま屋上へ向かう階段を上っていく。
「ま、レンズがあるにしろないにしろ、あのぐるぐる眼鏡より全然そっちの方がいいと思うぜ」
埜亞はぐるぐる眼鏡を卒業し、あられちゃん眼鏡に変え、そしてフードを被ることを辞めたのである。
「あ、ありがとうございますっ」
嬉しそうにお礼を言う埜亞の頭上を見ながら、輝十は顔をしかめた。
「しかしそれ……それは一体どういう心境の変化なんだ？」
「それは俺も興味があるねぇ」
輝十と杏那は二人して、埜亞の頭上についているものを不思議そうに見る。
埜亞は頭上のソレを触りながら、
「こ、これですか？　これは……せ、聖花さんがくれたんです。あんた地味だからつけてなさいって」
えへへへ、とはにかみながら言う埜亞に二人は何も言えなかった。
埜亞の頭上には赤くて大きなリボンがついていたのである。
「そ、そうか。いや、まあ、可愛いんだけどよ。可愛いんだけど、目立つっつーかなんっつーか……」
輝十はそれ以上、何も言わなかった。言えなかった。制服にそのリボンは何か違うだろ、なんて。
「うーん、それどっかで見たことあるんだよねぇ」
杏那が首を傾げながら、リボンを睨み付けるように見つめる。
「あ、えっと、なんでも宅配便をしている魔女がモチーフだそうです。聖花さんがそう言ってましたっ！」

今までで一番嬉しそうに、しかもはきはきとした声で言う埜亞。恐らく“魔女”がモチーフだからだろう。目の輝きが増している。
「ああ、あれか。有名な映画だよね。俺も見たことある」
「私もですっ！　大好きな作品の一つです！」
二人が名作の話を熱く交わしている間に、輝十は一足先に屋上の入口へ辿り着く。が、今日は先客がおり、その姿に最初に気付いたのは輝十だった。
「あれ？　あんた確かクラスメイトの……」
灰色の制服――それだけで一際目立つ彼女。
クラスメイトとはいえ休み時間は教室にいないし、物静かで一人を好む性格なのか誰とも関わろうとはしない。ゆえに灰色の彼女の名前を輝十も覚えてはいなかった。
なんだろう、この感じ……。
輝十は彼女の顔をはっきりと見たのは、この時が初めてだった。
悪魔的な綺麗な顔立ちや可愛い顔立ちの多い中で、彼女の整った顔立ちはどこか身近に感じた。素朴な綺麗さというのだろうか。造られすぎておらず、整いすぎてもいない。そんな印象だった。
もちろん輝十にとって、それは一瞬の中で感じた感想だ。
大事なのはそれよりも膨らみ、形、弾力の三大原則についてである。神が女性にだけ与えし、美の芸術こそ乳房だけなのだか……、
「どこ見てるの、輝十」
杏那の声ではっと我に返り、
「ざ、座覇くん……やっぱり……」
埜亞は寂しそうに輝十を見つめ、パーカーのファスナーに手をかける。
「ち、ちげえ！　名前思い出せないからちょっとおっぱい見てただけだろ！」
「なんで名前思い出すのにおっぱい見るんだよ」
「そりゃおまえ、おっぱいで女子生徒を覚えてるからだろ」
「さらっと最低なことを言うよねぇ。インクブスの俺でもひくレベ

……」
と、杏那が言いかけたところで灰色の彼女は踵を返し、階段を降りていこうとする。
「え？　ちょ、屋上行くんじゃねえの？」
輝十が声をかけると灰色の彼女は足を止め、振り返って輝十を見て不愉快そうな顔をした。
俺なんかしたっけ？　と不安になっているところで、埜亞が輝十の制服の裾をくいくいっと引っ張る。
「……び、微灯（びとう）さん、いつも一人でいるんです」
そして小声で輝十にそう告げた。きっと自分と重ねているのだろう。悲しげな顔をしてまるで自分のことのように、輝十にすがるのである。
輝十は埜亞に笑顔で頷いてみせ、
「なぁ、もしかしておまえもいつもここに来てんの？　だったら一緒に昼飯食おうぜー」
両手を口元に添え、メガホン変わりにして大声で誘う。
灰色の彼女は輝十に笑顔を向けられて一瞬目を見開くが、そのままますぐに細めた。
「つーか、上ってこいよーどうせ昼飯これからなんだろー」
輝十の声を無視し、灰色の彼女は再び踵を返す。そして灰色のスカートを揺らし、階段を降りていった。
「あ、あれ？　だめだった？」
てっきり呼べば来るものだと思っていた輝十は拍子抜けてしまう。
見えなくなっていく灰色の彼女を埜亞は寂しそうに、杏那は意味深げに、異なる理由を胸に黙って見つめていた。

昼食後、昼休みも残り少しと迫った頃。
「わりい、俺もっかいコーヒー牛乳買ってくるわ」
三人で教室に向かっている途中、輝十は二人の前で手をあわせて

謝り、先に行くよう促す。
「はぁ？　まだ飲むつもり？」
「んだよ、てめえだって四六時中甘いもん食ってんだろーが」
一触即発な雰囲気になってしまったのを、
「わ、私ついていきますっ！」
マイペースな埜亞がそう言って小さく手をあげたおかげで、いつものように喧嘩にならずに済んだ。
「いやいいよ。買ってすぐ追いつくし」
輝十は教室とは反対の廊下を指差しながら言う。
「そ、そうですか」
少し残念そうにしゅんとしてしまう埜亞の肩を杏那が叩く。
「じゃ先に行ってよ、黒子ちゃん。輝十みたいな鈍足じゃ俺に追いつくわけないんだけどねぇ」
「んだとてめえ！　すぐ追いつくから見てやがれ！」
輝十は杏那を指して宣戦布告するように吐き、自動販売機の場所へ向けて廊下を走り出した。
言われた通り、教室に先に向かおうとする埜亞だったが、
「……と、妬類くん？」
杏那が立ち止まったまま歩き出さないことに気付き、舞い戻って傍らに並び立つ。
「この先、匂うなぁ」
杏那は鼻を犬のようにひくひくさせながら、廊下の先を見据えた。
「匂う、ですか？」
「うん。多分、自動販売機があるあたり」
「ええっ！？」
埜亞も杏那を真似るように鼻をひくひくさせながら、
「な、何の匂うですか！？　人間のですか！？」
「うーん、うん。人間のだけど、この匂いの変化は……」
杏那は自分の鼻先を触りながら、口元がにやけるのを抑えることが出来なかった。

「いい？　黒子ちゃん。俺の姿が見えなくなって三分後にゆっくり歩いて自動販売機の所までおいで。わかった？」
「え？　あ、は、はいです」
埜亞はわけがわからないまま頷き、その場で突っ立ったまま杏那の姿が見えなくなるのを待った。

（2）

校舎を出た渡り廊下の先、校舎の裏に位置する場所に自動販売機は並んでいる。ここは中庭に近く、ここで購入してそのまま抜けて中庭に出る生徒も多い。なので昼休みが始まったばかりの時間帯は自動販売機前に生徒がちらほら列を作るが、終わり頃になると人気は一気になくなるのだ。

「パック、パックっと」

一般的なペットボトル含む缶のもの、紙コップのもの、紙パックのもの、三種類の自動販売機がいくつか横に並んでいる。

輝十は自動販売機の前で立ち止まるなり、迷わず紙パックの自動販売機にお金を入れた。

そしてコーヒー牛乳のボタンを押したところで、

「？」

女の苦しそうな声が聞こえて反応を示す。

今、なんか聞こえた……よな？

声のした方向に顔を向けたまま紙パックを取り出し、その場でストローを挿して口に運ぶ。

と、やはり女の苦しそうな声が聞こえ、輝十はコーヒー牛乳をちゅーちゅー吸いながら声のする方向へゆっくりと歩み寄ることにした。

女の苦しそうな声……といえば聞こえが悪いが、それは単に苦しいだけの声なのだろうか？　ここは既に人気がない。そうなると予測される事態は二つだ。行われていることはきっと一つだろうが、それが“同意の上”かどうか、が重要な分かれ道である。

「……つまり気付いてしまった俺には見届ける義務があるってこった」

輝十は声が近づいてきて、思わずストロー噛みしめて息を殺した。

自動販売機がある場所からさほど遠くはない。中庭とは反対方向

で、恐らく声の響き具合からすると校舎と校舎の隙間だ。隙間といってもそんなに狭くはない。丁度いいところに壁があるじゃないか、ちょっと手をついてお尻を突き上げてみようかフヒヒぐらいの展開は余裕で出来る。

近づけば近づくほど、予想が的中していることがわかる。

甲高い女の声は苦しそうに鳴いていたが、決して嫌ではないのだろう。よがり声が輝十を刺激し、一刻も早くその現場を見届けなければならないという謎の使命感を与える。

やはり生身は生なだけあって生々しいな……と思いながらも興奮と好奇心を抑えられない輝十は、思わず飲み干した紙パックを片手でぐしゃっと潰した。

そしていよいよこの目にしかと焼き付ける刻がきた。

輝十は壁に身を潜め、ゆっくりと声の発信源であろう場所を覗き込む。

「……」

あまりにも衝撃的、かつ官能的すぎる展開に輝十は声を失った。なんだろう、凄く痛い。

幸いにも見た印象では“同意の上”なのだろう、と輝十は思った。よがり声をあげている方が嫌がってはいたが、それでも攻められることを拒否してはいない。

輝十の性癖では追いつかない官能展開に、急激に吐き気とめまいが襲ってきた。

「こういうの人間の間ではボーイズ・ビーっていうんだっけ？」

と、杏那に肩を叩かれ、輝十は叫びそうになって口を手で塞がれる。

「ちげえ！　大志を抱いてる少年に謝れ！」

「しー！　声でかいよ。ちょっと落ち着いて考えてみればわかるでしょ」

杏那は現場を指しながら言うが、輝十は現場に目を向けたくもなかった。あんなもん見て興奮出来る輩の変態指数は計り知れない、

と変態ながらに思う輝十である。
「声だよ、声。輝十が聞いた声はこっちじゃなくて、あっち」
杏那が何を言っているかわからず、輝十はしかめっ面で杏那の指す方を向く。
校舎の隙間は何もここだけではない。隙間なんてものは見つけようと思えばいくつもあるのだ。
輝十が冷静になって耳をすましてみると、もう一つの校舎の隙間から女の声がしていることに気付いた。
「いや別にこっちを覗いていたいなら俺は何も言わないけどね？」
気付いたらしい輝十に肩をすくめながら嫌味っぽく言う杏那。
輝十はそんな嫌味を無視して、忍者のごとく素早い忍び足でその隙間をこっそりと覗きに行った。
「！」
声をあげてしまいそうになった輝十は、自分の手で口を塞いで声を押し殺した。
キタァァァァァァァァァ！　ヴィィィィィィィィィィィィナス！
さっきあんなにグロイものを見せられたからだろうか。余計に輝十は思う。嗚呼女って素晴らしい、女体って素晴らしい、生命の神秘万歳。
「なんで泣いてるわけ？」
その光景に思わず嬉し泣きしてしまう輝十に、若干引き気味で突っ込む杏那。
「俺が見たかったのはこういうのなんだよ……」
いつもいつもいつもホモオチで飽き飽きしてたんだよ俺は！
輝十は目の前に広がる異性同士のあるべき官能的な光景をかぶりつくように見つめる。
杏那はあえて何も言わずに輝十を後ろから見守り、来た道を何度も確認する。そして約束通りに向かってきた埜亞に向かって、静かにこちらに来るようにジェスチャーする。
到着しても輝十は埜亞の気配に気づきもしない。輝十がこんなに

も夢中になって何を覗いているのか、埜亞も興味がわいていた。
杏那に促されるまま、そっと輝十の傍らからそれを覗き込み……、
「！！！！！」
慌てて杏那が埜亞の口を塞いだ。一歩遅ければ大音量のマンドラゴラの叫びを聞くはめになっていた。
さすがにここまで乙女すぎるとは杏那も思っていなかったようで、顔を真っ赤にして完全オーバーヒート気味の埜亞を見るなり困ったように頭を掻いた。
「の、埜亞ちゃん！？」
何故この場に彼女が？　という目で埜亞を直視する輝十。ここは野郎のみであって欲しかったと共に、聖花ならともかく彼女には一番いて欲しくない場所だったからだ。
「え、あ、そ、そのっ……も、問題ないですっ！」
何が問題ないのかわからないが、埜亞は顔を赤く染めたまま両手を振って否定する。
「お、お二人とも男の子、ですもんねっ。そ、そうですよ、ね……えっと……」
埜亞は埜亞なりにかける言葉を探している様子だった。
その様子を見るなり杏那は面白がって埜亞に顔を近づける。
「そうだよー？　俺達は男の子なんだよー？　ここは人気もないし、もってこいの場所だよねぇ。黒子ちゃん、言ってる意味わかるかなぁ？」
「ひえっ！？」
埜亞は尻餅ついて、本をぎゅっと抱きしめる。
「じょーだんだよ、じょーだん。でも意味はわかるんだね」
腹を抱えながら笑う杏那に、
「おまえなぁ……」
輝十は冷ややかな視線を送り続ける。
「え、なに？」
「え、なに？　じゃねえよ！　てめえわざと連れてきただろ」

輝十は杏那の胸倉を掴み、顔を近づけてから小声で「埜亞ちゃんを」と付け加えた。
「えー？　だって黒子ちゃん一人置いてくるわけにはいかないでしょ？」
「二人で教室戻ってりゃよかっただろーが」
言って、輝十は杏那の胸倉を突き放す。
「仕方ないじゃーん。匂いに気付いちゃったんだし」
だから面白そうで来ちゃったんだよね、までは言わずにおいた。
「匂いだぁ？　今度は何の匂いなんだよ」
それは埜亞も気になっていたようで、立ち上がるなり興味深そうに杏那に目を向けていた。
杏那は自分の鼻先を撫でながら説明する。
「人間の童貞や処女が蜜のような甘い香りがする、ってのは前にも言ったよね。その童貞や処女が性的行為をしようとすると香りが変化するんだよね」
言って、杏那は鼻先を撫でていた人差し指で校舎の隙間を指す。
「性的興奮でも香りは変化するんだけど、行為までになるとまたちょっと違うんだよねぇ。その辺りの細かい違いは俺らしかわからないけど」
鼻をくんかくんかさせてみる二人を見て、杏那は苦笑しながら付け加える。
「犬みてえだな、おまえら。俺らにはその匂いがさっぱりわかんねえ。な？」
「は、はい、です。でも羨ましいです、そういう能力！」
「羨ましいって何に使うんだよ、おまえ……あ、こいつ童貞だ！とか判別して陰で笑うのか？」
「ち、違いますっ！　それで三十歳童貞の高貴なる現代魔法使いさんを見つけ出すんですっ！」
目に百万ボルトの輝きを宿らせて、埜亞が熱弁するのを輝十はげんなりした顔で聞いていた。まだその魔法使い捜し諦めてなかった

のか……。
そんな二人のやりとりを眺めながら、
「犬、ねぇ」
杏那は意味深げにそっと呟く。
と、瞬間女の声が大きくなり、そろそろフィナーレを迎えようとしていた。
そんな声を聞いてしまっては覗かずにはいられまい、と輝十は埜亞の存在を忘れ、再び壁に張り付いてそっと覗き込む。
その姿を見た埜亞も顔を真っ赤にして一人ぶつぶつ呟きながら葛藤し、覚悟を決めたのか、輝十の背後から目に両手を被せて隙間からそっと覗き込んだ。
埜亞は最低限の保健的知識はあったが、本物を目にしたのは初めてである。保健の教科書に載っている能面顔にぽってりした体の男女が真顔で絡み合う図面しか見たことがない埜亞にとって、それは想像を絶する光景だった。
「ざ、座覇くんも……や、やっぱり……こういうこと、し、したいんですか？」
埜亞は目をぎゅっと瞑り、勢いに任せて問いかける。
「そりゃしたいに決まってんだろ、男だもん」
迷いも恥じらいもない。そもそも夢中になって覗いている輝十にとって、今の質問が埜亞によって問いかけられたものであることすら恐らく気付いていない。反射的答えだ。
「そ、そうです、よね……」
埜亞は顔を赤らめたまま複雑な表情で、輝十の背後から離れる。

（3）

そんな埜亞と今だにかぶりつくように見ている輝十の背中を横目に、

「言っとくけど、こういうの日常茶飯事だからね。珍しい光景じゃないんだよ」

杏那が腰に手をあてて呆れ顔で突っ込む。

え？　という驚きを隠せない表情で揃って杏那を見る輝十と埜亞。

やっぱりね、と言わんばかりに杏那は溜息をつきながらわざとらしく頭を抱えた。

「人間と淫魔において、人間の同意を得ずに行為を行うことは禁じられてるんだよ。まして契約もしていないのに本番なんて厳禁。でも逆を言えば同意を得ていて本番さえしなければ暗黙の了解ということになる……ってわけ」

「つまり淫魔共は焦らしプレイが好きだ、と。そういうわけか」

「人の話聞いてた？」

真顔で答える輝十に杏那がいらっとした顔をする。

「えーだってわけわかんねえんだもん」

深々と溜息をつく杏那。その傍らで埜亞は苦笑する。

悪魔が、しかも淫魔が、半分いる高校なんて言われたって見た目は人間となんら変わりない。確かに異様に綺麗な顔立ちが多いし、非現実的な能力があるってのもあの食堂での聖花達の戦闘でわかっている。

目で見たことは輝十とて納得せざるを得ないのだ。

しかしもっとそれ以上にこの学園には色々とあるんじゃないだろうか。もちろん生徒そのもの、にも。

輝十は輝十なりに、そんなことを考えていた。

別に今になって転校したいなんて騒ぐつもりもないし、別にこれといって気にはしてはいない。

それでも自分だって貞操を一度は狙われた身だ。経験上、自分を性的な目で見ている輩が多いことにも気付いている。だからこそ自分の身を守るためにも、埜亞や杏那を巻き込まな……いや、杏那は別にいいか。

だから俺は知らなきゃいけない、そう輝十は思っていた。

「俺ってさ、この学校のことも仕組みのこともほんっとなーんもわかんねえんだわ。でも……」

輝十は三大式典のこと、自分が狙われたこと、この目の前の乱れたけしからん男女生徒のこと、など今までを振り返りながら思っていたことを口にする。

「いい加減知らないとやってけねえよな」

その輝十の言葉に埜亞は嬉しそうに、

「そ、そうですよっ！　知りましょう、一緒に勉強しましょう！わ、私でよろしければ分かる部分はお教えしますし！」

思わず声を張り上げたので、輝十と杏那に口を塞がれて止められた。

「ま、俺も聞いてくれれば答えるよ」

「本当ですかっ！？」

杏那は輝十に言ったつもりだったが思わぬところで埜亞が釣れてしまい、杏那にしては珍しく困惑した表情を浮かべた。

「んじゃーあれだな。勉強会やろうぜ、勉強会」

「そうだね、いいんじゃない？　うちでやればいいし」

「ああ、俺んちでよければ……っておい。おまえんちではねえだろ、おまえんちでは」

埜亞は執拗に瞬きをし、二人を見据える。

「え……ざ、座覇くんち、で、ですか？」

「ああ。んでも別に他の場所でも構わな……」

「い、いえっ！　お、お邪魔してよろしいのなら……ぜ、ぜひっ！」

興奮気味に言う埜亞の勢いに圧されながら、

「あ、ああ。じゃ今度の日曜日にでも俺んちでやるか」

輝十がそう言うと杏那と埜亞は揃って頷き、埜亞に限っては遠足が楽しみで仕様がない小学生のようにわくわく感を抑えきれない様子だった。

日曜日当日。
埜亞は座覇家までの道のりが書かれたメモ紙を片手に、玄関の扉の前でどうすればいいかわからずもじもじしていた。
生まれて初めての友達の家。しかも休日に友達と遊ぶということも初めてなのである。
引き戸式の扉の前で埜亞はうろうろしながら永遠と悩み続けていた。
ノックをするべきなのかな？　やっぱりチャイムを鳴らした方がいいのかな？　でもちょっと早く来すぎたし……時間になるまで待っていた方がいいのかな。あ、手土産は本当にこんなものでよかったのかな。もし嫌いなものだったらどうしよう。そうだ、制服で来ちゃったけど私服の方がよかったのかな。どんな顔してお邪魔したらいいんだろう……も、もしお母さんとかいたらどうすればいいのかな。挨拶した方がいいよね。でもお友達なのに挨拶したら変に思われるかな。でもでも、でもっ……！
「うううぅ……」
思考許容範囲を超えてしまい、埜亞は唸りながらパニックに陥っていた。
その時、
「なにやってんの？　チャイム鳴らしてくれりゃいいのに」
玄関で唸りながらうろうろしている埜亞に、扉を開いて声をかける輝十。
「チャ、チャイムを鳴らす、が正解だったんですねっ」
「はぁ？　よくわかんねえけどよ、チャイム鳴らしてくれりゃ気付くって」

「は、はい、です。すみません……いてっ」
埜亞はぺこりと頭を深々と下げ、いつものように下げすぎたせいで玄関の段差で額をぶつけてしまう。
「普通、足下気をつけろよって言うところなんだけど……おまえは額気をつけた方がいいな額」
どうしてこうなっちゃうんだろう。
埜亞は早速泣きたい気持ちになってしまった。初めてづくしで浮かれすぎて、結局恥ずかしい姿ばかりを見せてしまっている。せっかくの日曜日にわざわざ誘ってくれているのに……こんな調子じゃ迷惑ばかりかけて申し訳ないだけ……。
「なにやってんだよ、ほら」
輝十は俯いて突っ立ったままの埜亞にスリッパを用意し、
「なんもねえけどな。中にどうぞ」
家へあがるように促す。
埜亞はさっきまでの泣きたい気持ちが一気に晴れ、その言葉を噛みしめるように頬を紅潮させた。
「は、はいっ！　お、お邪魔しますっ！」
ここが輝十くんのうち、お友達の家……。
埜亞はスリッパを履き、家の中を見回しながら輝十の背中に付いていく。
「わりいんだけどよ、俺なんかお菓子持ってくっからさ。先に部屋に行っててもらえる？　この廊下を真っ直ぐいったとこね」
「ふええっ！？　は、はいですっ！」
思わず力んで返事をしてしまう埜亞。
台所に入っていってしまう輝十の背中を見て、埜亞ははっと自分が手に持っているものを思い出す。
「あ、あのぅ！」
振り返った輝十に向けて、両手で掴んだ手提げ紙袋を名一杯突き出した。いつもなら必ず分厚い本を手に持っているのだが、今日は斜めかけバックに突っ込んでいる。

「お、おく、お口に合うかわかりませんが……よ、よろしかったら、どうぞっ！」
「あー気にしなくていいのに。わりいな」
輝十は埜亞の元まで戻り、その手提げ紙袋を受け取った。
「お、紅茶じゃん！　気が利くなぁおい。早速入れてくるわ。部屋で待ってて」
その反応を見てほっとしたらしい埜亞は、大きく安堵の溜息をついた。
しかし安堵出来たのも束の間、輝十が台所へ行ってしまった今、埜亞は輝十の家で一人ぼっちになってしまったのだ。
「だ、だいじょうぶ……だいじょうぶ……」
ひーはーひーはー大きく大げさな深呼吸して心を落ち着かせ、言われた通りに廊下を進んで行く。
部屋で待ってるように言われたけど、本当に勝手に入っていいのかな？　お友達の部屋にいいのかな？　あ、もしかしてお友達だからいいのかな。で、でも……男の子、だよね。男の子の部屋に勝手に入ってもいいのかな。
埜亞はこの間の出来事を思い出し、かぁっと顔が熱くなるのを感じた。
座覇くんはお友達……お友達だけど男の子……男の子だけどお友達……あわわわわっ。
埜亞はまたパニックを起こし、頭の中がぐるぐる回り始めていたのを必死に堪える。
部屋で待っててって言ったんだし、部屋に入るしかないんだもん。こ、これは仕様がないことなんだもん。
「え、えいっ！」
埜亞はぎゅうっと目を力一杯瞑って、まるで体当たりするかのように勢いよく部屋の扉を開いた。
「こ、これが座覇くんの部屋かぁ……」
埜亞は部屋の入口に突っ立ったまま、呆然と輝十の部屋の中を見

渡す。
友達の家に行くことが初めてなら、友達の部屋を見るのも初めてなのだ。比較対象がない為、埜亞にとっては世間一般の部屋というものがどういうものかわからない。しかし見た感じでは散らかっているわけでもないし、物が溢れているわけでもない。すっきりした清潔感のある部屋、という印象だった。
「男の子の部屋って、みんなこういう感じなのかなぁ」
カーテンや物の色が黒や青だったところから、埜亞はなんとなくそう感じていた。
「！」
そして今自分が口にしたことに、今更になって恥ずかしさを覚える。
お友達の部屋に来たのに、男の子の部屋だなんて……わ、私は一体何を考えてるんだろう。
埜亞は自分の両手で顔を覆い隠し、首を振って冷静さを取り戻そうとした。
冷静になれたところで、部屋のどこで待てばいいのだろうという疑問が浮かび上がる。
座ってもいいのかな？　座るってどこに座ったら……べ、ベット！？　だ、だめだよっ。そ、そんなところに座って待ってたらまるで……あわわわわっ。
埜亞は思わず想像してしまい、顔を真っ赤にして足下をふらつかせる。しかし埜亞の想像力ではキスが精一杯といったところだ。
今こんな顔を輝十に見られるわけにはいかないので、とりあえずフードも被った埜亞。
もし何か言われたら素直に謝ろう、という結論に至り、入口の入って右側の隅っこに腰を下ろして体育座りした。

（4）

座ったはいいが、その場所からの景色は丁度ベットである。埜亞はベットを見るたびに、さっき自分がふしだたら妄想をしてしまったことを恥じらい、顔を真っ赤にし、落ち着かない気持ちになっていた。

しかしだからといってベット側に座る勇気もない。

ベットの大きさはセミダブルぐらいだろうか。少し大きめでカバーも布団も黒だ。どうして一人なのにベットが少し大きいんだろう。それが普通なのかな。

ベットを眺めながらそんな素朴な疑問を抱いていると、

「ひええっ！？」

突然、ベットの布団がまるで亀の甲羅のようにもこもこと膨らみ始めたのだ。

もちろん埜亞は驚き、体をびくつかせた勢いで壁で後頭部を打ち付ける。

「ううぅ……いたい、です」

埜亞は後頭部を打ったおかげで冷静さを失わずに済み、いつもの狂気的悲鳴を人様の家でお披露目せずに済んだ。

「ん……なに、誰かいるの？」

盛り上がった布団からもそもそと姿を現したのは女型の杏那だった。大きめのパジャマに下は履いておらず、男性用の下着が短パンのようになっている。もちろん女性用の下着をつけるなんていう習慣はないので、パジャマから透けた胸がくっきりと形を象徴していた。

杏那は目を擦りながら寝ぼけまなこで声のする方に目をやる。

見れば、入口のすぐ隣の壁に背をつけ、目を丸くしてこちらを見ている埜亞の姿があった。

「と、妬類くん……ですか？　またあの時のように女の子の姿に…

…ど、どうしてっ！？」
段々目も頭も冴えてきた杏那は寝癖のついた頭を掻き乱しながら、
「うーん、うん。なんていうか、俺女の姿にもなれるんだよねぇ」
一番重要な詳しいところをあえて省略し、めんどくさそうに答えた。
「ど、どうやって……ですか？」
もちろん埜亞はその重要な部分が気になり、前回聞けなかったこともあって思い切って問いかけた。
が、杏那はそれを軽くあしらい、
「そんなことよりさぁ」
ベットから足を下ろし、生足をちらつかせながら、いかにも悪巧みをしている顔で埜亞に問い返した。
「ね、なんで俺が輝十のベットから出てきたかわかるー？」
「えっ！？」
杏那はにやにやしながら、まるでヒントを与える出題者のように付け加えていく。
「ほら、俺って輝十の婚約者じゃーん？　だから一緒に住んでんだけどさぁ」
「い、一緒に……ですか？」
「うん。一つ屋根の下だよ」
「……」
言葉を失った埜亞の脳裏には色んな事が妄想される。しかし杏那にやきもちを妬くまでは頭が回らなかった。
二人は一つ屋根の下で暮らしていて、同じ部屋にいて、何故か妬類くんは女の子の姿で、し、下を履いていない下着のじょ、状態でベットから出てきて、でも妬類くんは男の子だし、でも今は女の子の姿で……あわわわわっ。
埜亞は両手で頭を抱えて目を回しながら、ぶつぶつお経を唱えるかのように呟き始める。
その姿を見た輝十は手で口を覆い、吹き出すのを堪えた。そして

追い打ちをかけるように、
「俺はね、こうやって女の姿にされて輝十に毎晩……」
艶っぽい表情を作り出し、まるで名役者にでもなったかのように感情を込めて言う。
「ま、ま、まままいばん……」
毎晩、二人は、なっ、何を……？
知ってはいけない事情のような気がしながらも、埜亞はその続きが気になって仕様がなかった。
「うん。毎晩ね、このベットで……っと！　危ない、危なーい」
続きを言おうとした瞬間、入口から温められたティーカップが飛んでくる。
「嘘吹き込んでんじゃねえええええ！」
目をやれば、輝十が鬼の形相でティーポットとティーカップ、そしてお菓子を載せたトレーを持って、部屋の入口に立っていた。
「危ないじゃーん。これ割れ物でしょ？」
「おまえだったらキャッチするだろーが。つーか、誤解を招くようなこと言ってんじゃねえよ！」
「えー？　だって一つ屋根の下で暮らしてるのは本当じゃん」
「てめえはただの居候だろうが。下宿人！」
「ま、簡単に言うと同棲なんだけどねぇ」
「ちげえええええええええ！」
トレーをテーブルに置くなりベットで取っ組み合いになる二人を、埜亞は目を白黒させながら見ていた。
二人にとっては日常の一片に過ぎないが、埜亞の目にはベットの上で親しく絡み合う男女にしか見えないのである。
「で、でもっ、妬類くんは男の子だし……ううん、でも今は女の子で……ふえええっ！？」
再び大パニックになりだした埜亞に気付いた輝十が、杏那の両手を掴んで力一杯押しながら、
「つーか、埜亞ちゃんはてめえが杏那だってわかってんのか？」

「知ってるよ。この姿で会ったのは今日が初めてじゃないしねぇ」
「初めてじゃない？」
初耳だった輝十は杏那から手を離し、改めて埜亞に訊く。
「な、こいつが女の姿にもなれること知ってたのか？」
埜亞は声をかけられ、はっと我に返り、無言でこくんこくんと頷いてみせた。
「い、いいいっ、いつも女の姿にされて、そ、そのっ、ざ、座覇くんと毎晩寝てるって……」
輝十は逃げようとしている杏那の首根っこを掴み、引きずり戻して胸倉を掴んだ。
「言ってない言ってない。俺は寝てるまでは言ってない」
「そう思わせるようなことを言ったんじゃねえかてめえええええ！」
輝十が杏那を殴ろうとした時、
「あ、あとっ！　た、体育の時に……女子更衣室でお会いして……」
「女子更衣室でお会いして？」
輝十は棒読みで復唱するなり、じと目で杏那を見る。
「うわーその目は絶対勘違いしてるー」
「見損なったぜ、杏那……女の姿になってまで女子更衣室に忍び込むなんてよ……」
「忍び込んでない忍び込んでない」
「どうして……どうしてっ！　俺を誘わなかったんだ！」
一生に一度の大チャンスを逃したと言わんばかりに、気が狂ったように頭を抱えて絶叫する輝十。
「その手があったかあああああ！」
はぁ、と息を吐き、一息ついて冷静さを取り戻したらしい輝十は杏那の両肩に手を置き、
「今まで悪かった。今日からおまえは俺の親友だ」
「プライドってもんがないのかな、あんたには」
杏那は軽蔑の視線を送りながら、輝十の手を払いのけた。
「埜亞ちゃんに用があって女子更衣室に行っただけ。それでその時

たまたま女型だったってだけだよ。ねぇ？」
杏那に目配せされた埜亞は一瞬戸惑ったが、空気を読んで大きく頷いた。
きっと詳しいことは輝十に伏せておいてくれるのだろう。埜亞は有り難い気持ちでいっぱいになった。やっぱり悪魔は悪いのばかりじゃないなぁ、なんて思い、自然と顔が綻んだ。
「ふーん、そっか。じゃこいつがどうやって女の姿になるのかも知ってんの？」
「あ、いえっ。そ、それをさっき聞こうとしてたんです」
輝十はベットから降り、持ってきたクッキーを一つ手にとって見せる。
「これだよ、これ。こいつは淫魔の中でもちょっと特殊でお腹いっぱいになると女の姿になっちまうんだと」
言って、クッキーを自分の口に運ぶ。
「ま、正確に言うと摂取出来ない精の代わりに糖分を摂取して、エネルギー源に変えてるってわけ。人間で言うと性欲を食欲で補ってるって言えば、わかりやすいかなぁ」
「なるほどっ！　すごくよくわかりました！」
好きな分野なだけに、元気に返答する埜亞。
「だってこいつ昨日ケーキワンホール食って寝たんだぜ。どんだけ食うんだよってな」
「その後にチョコレートも２０個ぐらい食べたかなぁ。クッキーは何枚だっけ。あとフィナンシェは……」
想像しただけでも口の中が甘すぎて気持ち悪くなった輝十は、
「……わ、わかった、わかったから。さっさと着替えてこいよ」
杏那はめんどくさそうに空返事し、輝十のクローゼットを勝手にあけてパジャマを脱ぎ出す。
「自分の部屋で着替えろよ！　自分の服に！」
「えーめんどくさいなぁ」
埜亞は二人の顔を交互に見ながら、この状況を自分なりに整理し

ようとしていた。
妬類くんが女の子の姿で、ふ、服を脱いで、じょ、上半身裸の状態でいるのに……座覇くんは、な、なんとも思っていない？
生着替えを始めた杏那が胸を露わにしたところで、輝十はいつもの杏那への接し方であり、特に変化は見られなかったのだ。
も、もしかして……みっ、見慣れているから！？　ここで着替えるのも、一緒に寝るにも、あ、当たり前だから……なの、かな？
埜亞はスカートの裾をきゅうっと掴み、俯いてしまう。
「ん？　どうした？」
急に俯いてしまい、おかしな様子の埜亞に輝十はもちろん声をかける。
もしかしてお友達って、こういうことなのかな。は、裸見られてもお互い意識しないで、一緒に寝ても平気で……で、でもそれは男の子と女の子の間でもそうなのかな。お、友達だもん。きっとそうだよね。男の子と女の子でも、お友達なら……！
埜亞は意を決して立ち上がり、
「ど、どうした？」
輝十は突然物凄い勢いで立ち上がった埜亞を見上げて動揺する。
「ざ、座覇くんっ……わ、わわわ、私も脱ぎます！」
「はぁ！？」
どうしてこうなった！　輝十は本気で脱ぎだした埜亞を必死に止めにかかる。
「ちょ、なにやって……」
「わ、私も、お、お友達だから……べ、別に裸を見られたって、恥ずかしくないですっ！」
「なんて顔して言ってんだよおい！」
何故、女の子のおっぱいを拝むチャンスを自らぶっ潰してしまうのか。輝十が冷静になって悔やむのは、少し後のことである。
今はとにかく何か大きな勘違いをしている埜亞を止めることで頭がいっぱいだった。

聖花のように武器として露出するのとはわけが違う。それは埜亞の顔を見れば一目瞭然だった。

「……二人とも何やってるの？」

二人に背を向けて着替えていた杏那は終わるなり、振り返ってぽつりと呟いた。

（5）

輝十は両手で顔を覆って、しくしくと女々しく泣いていた。
「で。俺が着替えてる間に何があったのさ？」
しくしく見窄らしく泣いている輝十とテーブルを挟んだ向かい側、埜亞は頬を膨らませてむすっとしていた。
「わ、私だって脱ぐぐらい……」
口を尖らせてぼそっと呟く埜亞に、
「脱いでどうするの？」
杏那が率直に問いかける。
「だ、だって……わ、私も座覇くんのお友達だから……だから……」
うーん、と唸りながら杏那は腕組みし、
「お友達って脱ぐもんなの？　ねぇ、輝十」
傍らで未だに泣いている輝十に話を振るが、
「俺は……俺は……なんで自らチャンスをぶっ潰したんだ！　バカァァァァァ！」
すすり泣きが号泣に変わっただけであった。
杏那は頭を抱えて深々と溜息とつき、クッキーを摘む。
「このままじゃ一生勉強会始められないんじゃないの？　俺は別に構わないけどぉ」
言って、再びクッキーを手にとった。
本来の目的を思い出したらしい輝十と埜亞は揃ってはっとした顔で、気まずそうに顔を見合わせた。
「ま、それもそうだな」
鼻をすすりながら輝十は紅茶を口に含み、落ち着きを取り戻す。
「そ、そうですね。すみませんでした」
埜亞もまた震える手でティーカップを掴み、紅茶を口に含む。
ぎくしゃくしながらも気を取り直したらしい二人を見て、杏那は微笑を刻んだ。

「じゃ、始めるか」
輝十はテーブルの下から紙とシャープペンを取り出し、テーブルの真ん中に置く。
「はいっ。ではまず栗子学園についてから、でよろしいでしょうか」
はきはきと喋る埜亞には活気が溢れている。目も生き生きしているし、輝きが灯っていた。
「あ、書記は俺がやるね」
シャープペンをとろうとしていた埜亞より先に杏那がとる。以前、屋上の件で埜亞には絵心がないことが判明している。それを考慮して自ら買って出たのだ。
「既にご存じのように、栗子学園は“人間”と“淫魔”の半々で構成されています。淫魔は人間を“ピルプ”と呼びますが、ここでは人間としましょう」
杏那は埜亞が喋るのに合わせて、紙にわかりやすく書き込んでいく。
「栗子学園に通う人間はすべて“初体験を終えていない人間”とされています」
そこで輝十が大きく手をあげた。
「はいっ。なんでしょう？」
「なんで童貞と処女だけなんですかー？」
よくぞ聞いてくれました！　と言わんばかりに埜亞がテーブルを両手で思いっきり叩くので、揺れて紅茶が零れそうになる。
「それは人間と淫魔により確実で正確な契約を結ばせるためですっ！」
再び輝十が大きく手をあげた。
「はいっ。なんでしょう？」
「既に意味がわかりませーん」
埜亞が見るからにどよーんとした縦縞を背負ってしゅんとしてしまったので、見かねた杏那が口を挟む。
「少し前を説明しようか。栗子学園とは何か。それは“人間と悪魔

を契約させる場所”に過ぎないんだよ。その人間に悪魔をコントロールさせることを目的としてる。漫画やドラマで見たことはあるでしょ？　悪魔と人間が契約する、みたいなの」
「ああ、それならなんとなくわかるぜ。でもそれと童貞処女は何の関係があんだ？」
　気力を取り戻したらしい埜亞が眼鏡のズレを直しながら補足する。
「それはうちの学園にいる悪魔が淫魔だからです。淫魔は本来は“精を食らう悪魔”ですので、既に精を覚えた者ではより正確な契約が結べないそうです」
　眉間にしわを寄せ、いまいち理解していないであろう輝十に気付いた杏那が付け加える。
「つまり童貞の妄想力は非童貞の妄想力なんかとは比べものにならない精を宿してるってことかな」
「なんだろう。なんかすげえ悲しいけどすげえ納得するこの感じ……」
「もっとわかりやすく言うと俺みたいな経験豊富な美少年の“ヤリたい”と地味でチビで小猿な童貞の“ヤリたい”じゃ断然後者の方が切羽詰まってて、必死な感じがするでしょ？　それだけ性欲に溢れてるってことだよ」
「なんだろう。俺は今てめえを殴らないと気がすまねえ……」
　輝十が杏那の胸倉を掴むので、埜亞があわあわしだしてテーブルが揺れ、再び紅茶が零れそうになったので一先ず落ち着くことにした。
　輝十がわざとらしく咳払いしたのを合図に、埜亞が再び説明を始める。
「契約を結び、人間が悪魔をコントロールする。それには資格が与えられるのです」
「資格？」
「はい。“悪魔使役士”といいます。資格といっても栗子学園での学科と実技の修了仮定と契約を済ませることで自動的に取得出来ま

すので、資格試験の心配はないです」
「ふーん、つまり栗子学園ってのは資格とる学校みたいなもんか」
「そうですね。看護科や保育科のような専科だと思って下さい。他にも悪魔退治士、魔術婦、医術士など資格はありますが、他は資格試験があるです」
「うげ、試験あるなら俺はいいや」
輝十は舌を出して苦そうな顔をするなり、手を左右に振って拒否する。
「悪魔に関する国家資格がとれる学校、ってことね。俺達側にすれば人間や人間社会の勉強と相方探しってとこ」
杏那がわかりやすくまとめた。
「国家資格なのかよ……」
「当たり前でしょ、悪魔なんだから。国が管理するんじゃないの？」
半ばむっとした様子で杏那はクッキーを三枚一気にとって口に放り投げた。
「俺達のような淫魔はここ何十年かで異常に繁殖されたといわれてる。人間の性犯罪の増加と共にね。俺達もそれ以外の悪魔もそうだけど、時代と共に確実に退化が進んでるんだよ。だから利口な奴は人間社会に溶け込む道を選んだわけ」
「利口な奴は、か」
いつも溜息をついているか、人をからかっているかの杏那が真摯な顔つきで語っているのを見れば、それがどんなに深い意味を持っているのかぐらい肌で感じることが出来る。
「学園の外はもちろん、学園内でも人間をよく思っていない奴はそりゃいるからね。“使役”されるっていう表現も何か使い魔みたいでちょっとねぇ」
杏那は悪魔使役士と書いた文字の“使役”部分に罰印をつけながら苦笑を浮かべた。
「なんっつーか、あれだな……」
なんで俺はそんな学校に入れられたんだ？

輝十は真っ先にその疑問が浮かび、次に父親の顔が浮かんだので脳内でぶん殴っておいた。
つまり悪魔である淫魔と契約を結び、悪魔使役士になる。その為の学校だということは理解出来た。父親はこの事実を知らずに自分を入学させたのか？　否！　婚約者がいると言っていたぐらいだ。もちろんわかっていて入学させたはずだ。
あれ？　それってつまり……。
「なぁ、その契約ってどうやるんだ？　相手とかどうやって決めるんだよ」
輝十の問いに埜亞が嬉しそうに答える。
「それはですね、自分のあった相手を見つけなきゃいけないらしいですっ！」
「はぁ！？　見つけんの？　どうやって？」
「恋愛みたいなもんでしょ。パートナーは自分で見つけろってことじゃないの？」
そろそろ飽きてきたのか紙に落書きを始めた杏那が独り言のように口を挟む。
輝十はしかめっ面で考え込む。
ますます父親の策略のようにしか思えなかったのだ。もちろんこんな奴とペアを組むなんてまっぴらだが、婚約者の本当の意味がそれを現しているとしたら……。
輝十は少し報われた気がした。しかし同時にどうして杏那を自分に差し向けたのか。杏那と父親の繋がりは未だにわかっていないし、杏那もよく覚えていないという。うーん……。
「な、なにか説明不足な点が、あ、ありましたか？」
唸りながら厳しい顔で考え込んでいる輝十に、埜亞が不安そうに問いかけた。
「あ、いや……そ、そうだ！　制服！　で、制服の色分けは……」
と、訊こうした瞬間――
ドンッ！　という地震のような衝撃が座覇家を襲った。

何度も持ちこたえてきた紅茶が零れ、ティーカップが床に落ちる。
「なんだなんだ！　地震か！？」
地震というよりは隕石の落下といった感じだ。お尻を突き上げる衝撃と何かが高速で叩き落とされたかのような一瞬の轟音。
「……違う、庭だ」
冷静に耳を研ぎ澄ました杏那が言うなり、輝十と共に部屋を飛び出して庭に向かう。
それを追おうとした埜亞に、
「来るな。埜亞ちゃんはここにいろ」
輝十は再度部屋を覗き込み、埜亞に言い聞かせるように強く言う。
自分だけのけ者にされたようで埜亞はしゅんとして落ち込んでしまうが、
「大丈夫。すぐ戻るから」
輝十は務めて笑顔で優しく語りかける。
迂闊だった。一人にされることに敏感な埜亞に強く言ったのは間違いだった、と埜亞の表情を見て反省する。
しかしそれでも危険であろう得たいの知れない所に女の子を連れていくわけにはいかない。
「悪い、ちょっとだけ待っててくれ」
手をあわせて謝るなり、輝十は急いで庭に向かう。

（6）

座覇家は庭付きの平屋で、広い庭は芝生で埋め尽くされており、池はないが代わりに桜の木がアクセントになっている。

日曜にある某家族アニメのような平屋とは違い、今風な外観の平屋だ。

放浪癖があり家を出ている姉と輝十が名一杯遊ぶことが出来るように、と建てるときに家の広さよりも庭の広さを重視して造られたのだ。

「……んなッ！」

その庭が見るも無惨で、大変なことになっていた。

輝十と杏那は庭側の窓を開けて飛び出す。

「なんなんだよ、これはよ！　隕石か！？」

庭のど真ん中にまるで隕石が物凄い勢いで落下したかのように、円上にすっぽり穴が開いていたのだ。

「いや、隕石じゃない。よく見てみなよ」

自分の家の庭が崩壊しているのだから、輝十が平常心でいられないのは当たり前だ。ゆえに打って変わって平常心を崩さない杏那が冷静な判断を輝十に告げる。

輝十は言われるがまま、すっぽり穴があいた庭の中心部分に目をやる。

「おい！　誰かい……」

と、言おうとした刹那――ダダダダダダ、と連打する攻撃音が轟き、穴の周辺が砂埃で隠れてしまう。

輝十と杏那は腕で顔を隠し、砂埃から身を守る。それでも幾分鼻と口に入って咳き込んだ。

砂埃の靄が晴れ、再びその惨劇が輝十の目に刻まれる。

「やっぱり誰かいるじゃねえか！」

さっき目にしたのは間違いではなかった。恐らく杏那も気付いて

いて、自分によく見るように言ったのだろう。
「うん。うちの学校の生徒だね。恐らく……」
杏那は睨み付けるように周囲の様子を窺う。まるで気配を探るかのように。
「……って、ちょっと！　輝十！」
杏那が周囲を窺っている間に、輝十は躊躇いもなく穴に向かって走り出す。
「誰だよ、人んちに穴開けた奴！　どうしてくれんだよこれ！」
ぶつぶつ文句を言いながら穴のすぐ側まで辿り着くと、
「んなッ……！」
杏那は穴の中心部に人を見た。
黒よりも明るく、青よりも深い、群青色の長い髪。そして誰であるかすぐさま特定してしまう、唯一のモノ――灰色の制服。
「おい、おまえ！　大丈夫か！？」
穴の中心部にいたのは、傷だらけになった灰色の彼女こと微灯菓汐（びとうかしお）だった。しかも何故か全身滝に打たれたかのようにびしょ濡れである。
倒れて意識が朦朧としている彼女を起こし、必死に声をかける。
「怪我してんじゃねえか！　一体何があったんだよ！」
輝十の大声に反応するかのように菓汐は苦しそうに目をぎゅうっと力強く瞑り、眉間にしわを寄せた。
全身擦り傷だらけで、特に左の臑には深い傷を覆っている。痛々しくも赤く染まった切り口がそれを物語っていた。
「とりあえず俺んちで手当を……」
と、言いかけて輝十は気配に気付く。
誰か、いる。
自分の知らない誰か、がいる気配がした。輝十は彼女を抱いたまま、その気配の先を睨み付ける。
「……誰だ」
輝十は低く呻るように言い、見えない誰かを威嚇した。

杏那もまたその存在には気付いており、笑みを消して無表情で冷ややかな視線を突き刺している。
「は、離れ……」
震える弱々しい声で菓汐が何か言おうとした瞬間――輝十は即座に菓汐を抱きかかえ、飛んでくる無数の球体を飛んで避けた。
「なんだよこれ」
球体は地面で破裂してただの水と化しているが、それが破裂した部分は確実に芝生が禿げて小さな穴が開いている。水にこんな殺傷性があるはずがない。つまり攻撃しているのは……。
「なるほどな。人間じゃないってわけか」
そもそもこんな凶暴なことをする奴は、輝十の数少ない知識と経験上人外である悪魔だと結論付いている。
「おい、離せ」
相手の様子を窺っているところで、菓汐が輝十の腕の中から逃れようと暴れ出す。
「バカ、動くなって。怪我してんじゃねえか」
「うるさい。これは私の問題だ。余計なことをするな、放っておけ」
その態度にいらっとした輝十は、まるで反抗期の中学生のように逃れようとする菓汐をあえて更に強く抱きしめる。
「きゃっ……な、なにするんだ変態！　離せと言ってるだろ！」
「あのなぁ！　放っておけるわけねえだろ！　しかもここ俺んちだし！」
「知るか！　離せと言ったら離せ！」
素直に好意を受け取ればいいものの、なかなか素直になろうとしない菓汐。
怒りのゲージが上昇していく輝十は、濡れた制服に身を包んだままの菓汐の上半身をじーっと見つめ、
「次言ったらおっぱい揉むからな、生で」
しれっと最低なことを口にし、菓汐を羞恥に追い込んで口封じした。

あまりの突然の変態発言に、何を言われたかいまいち理解出来ていない菓汐だったが、次第に冷静になって事態を把握し、顔を真っ赤にして口を金魚のようにぱくぱくさせる。
輝十はその反応を見て思う。彼女はやっぱり人間だよな、と。
精を食らう悪魔がそんな恥じらうとも思えないし、何より顔と雰囲気でなんとなくそうじゃないかなと思っていた。変に整いすぎていない感じが埜亞と近いものを感じる。
しかしよく見ると目の色が青色と黒色で左右違う、いわゆるオッドアイというやつだ。ハーフなのだろうか。
なんにせよ、彼女がここまで攻撃されなければいけない理由が輝十にはわからなかった。もし処女目当てだとして、ここまで暴力的に奪おうとするなど同じ男として絶対に許すまじ行為。ふつふつと怒りが込み上げてくる。
童貞の方が優しくて純潔で高貴で男らしいことを見せつける刻がキタァァァァァ！
再び、飛んでくる球体を絶え間なく避ける輝十。
「速い。普通ならとっくに当たってるはず」
「へへ。ま、俺避けることしか出来ないんだけどな」
「避けることだけ……だと？」
「ああ。昔ちょっと鍛えたもんで。避けたり交わしたり逃げたりすんのは割と得意なんだ」
無数の球体を避け続け、攻撃が途切れたところで輝十は息を整えながら見上げる。
「……女一人相手に男二人たぁ、ちょっと趣味が悪いんじゃねえの」
気配は人の形を成して、そこに姿を現す。それもご丁寧に身元が分かるように栗子学園の白い制服に身を包んだ、男子生徒が二人。
「おまえに用はない。俺達はそいつに用があるだけだ」
「あのなぁ、何度も言うようだけどここ俺んちだから！　おまえらが用なくても俺はあるんだよ！」
男子生徒はめんどくさそうに舌打ちし、持っていたペットボトル

の口に人差し指を突っ込む。そして指を抜くとまるで水が生きているかのように、指と共にペットボトルから出てきて、空気中で膨張し球体に変化した。
「能力……」
杏那の呟きを聞き、輝十ははっとなる。
杏那の能力を受けた埜亞の叫び声を思い出して照合する。たかが水でも能力が加わったことで、それはもう水ではない。
当たったら、やばい。
輝十は頭でも理解していたし、本能でもそれを悟っていた。
「もういい、十分だろ。私から離れた方がいい。おまえまで怪我をするはめになる」
「ああそうだな……って、こんな明らかに危ない中で女を見放す男がいてたまるか！　少なくとも俺は絶対そんなことはしねえ」
全人類の女性の胸に誓って、そんなことは出来ない。彼女らだけの持つ女神の芸術（おっぱい）を崩壊させたりなんか絶対にしない。
「……」
菓汐はその勢いに圧され、それ以上何も言えなかった。自分を抱きかかえた輝十の腕を掴む手に力を込める。

一方で、部屋に残された埜亞はドアの前から動けずにいた。もちろん座って二人を待つことなんて出来そうにない。
今すぐ二人のところへ駆けつけたい。
しかし輝十がああまで念を押して言ってきたのだ。それを破ったら……。
せっかくお友達になれたというのに嫌われたくなかった。だから自分を抑えて、埜亞はその場で待機している。
「すぐ戻るって言ってたもん……待ってればいいんだ。うん、待ってよう」
そうわかっていても、気持ちは落ち着いてくれない。
轟音がするたびに家が揺れ、埜亞は一人で泣きそうになっていた。

庭では何があっているのだろう。
二人が心配だった。もちろん自分なんかが行ったところで何も出来ないことぐらいわかっているし、むしろ行った方が足手まといになるかもしれない。いや、きっとなるだろう。
「座覇くん……妬類くん……」
それでも自分だけがこんな安全な場所で非難していることが許せなかった。
大好きなお友達が傷ついているかもしれない。危ない目にあっているかもしれない。
音だけが聞こえ、現場が目で見えないからこそ、埜亞の不安は掻き立てられる。
埜亞はいつも肌身離さず持っている分厚い本を抱きしめる。
輝十との約束を破って、嫌われる覚悟で二人を助けに行くか。約束を守って、このままここで二人が戻ってくるのを待つか。
埜亞の気持ちは最初から決まっている。覚悟が出来なかっただけだ。
私なんかに二人は優しくしてくれた。その恩返しが何も出来てない……。
自分はどうなってもいい。嫌われるのは嫌だけど……二人が無事ならその方がいい。出来ることがなければ体を張ればいいんだ。
埜亞はぐっと唇を噛みしめる。そして分厚い本を抱きしめ、輝十の部屋から飛び出した。

（7）

男子生徒はちょこまか避ける輝十に対し、段々苛立ちを隠しきれなくなっていた。
ペットボトルの水も底を突こうとしており、グシュッという音をたててペットボトルを捻り潰す。
「……殺すなよ。殺すのはまずい。それにあいつを抱えてるのは人間だろ」
「うるさいな！　わかってるよ！」
隣から冷静に指示され、ペットボトルの男子生徒は語気を荒げる。
手の平の上でペットボトルを逆さにし、残った水をすべて手の上で球体に練り上げていく。
「一撃で決める」
男子生徒の瞳が髪と同じ薄いグリーンの輝きを灯し、同時に球体が膨張を始める。そして球体が反時計回りに回転し始めた、その時――
「ざ、座覇くんっ……！」
開いた窓から埜亞が裸足で飛び出してきた。
「なっ……黒子ちゃん！　ちょ、待って！」
窓際で様子を窺っていた杏那の横を通り過ぎ、輝十の元へ駆けつけようとする。
「の、埜亞ちゃん！？　なんで来るんだよ！　つーか、こっち来んな！」
輝十は駆け寄ってくる埜亞に向かって叫ぶが、既に覚悟を決めている埜亞にその言葉は届かない。
荒れ果てた庭、怪我をしている菓汐、それを助けようとしている輝十……それだけ目に入れば埜亞には十分だった。
一か罰か。
試したことはないし、知識上のものでしかない。きっとそれはた

だの神話の類。それでも“ソレ”を否定したら埜亞はここにいる意味がなくなってしまう。信じるしかなかった。
非現実的な彼らの前で、非現実的な“ソレ”を。
「今、助けますから！」
埜亞は分厚い本をペラペラと高速で捲り、あるページで止めてそこを開く。
「本気だね、彼ら。まずい」
そこで男子生徒が手にしていた球体を輝十達に向かって投げ付ける。手から離れた瞬間、グッと手を握り締めると球体は主の意志を受け取るかのように更に膨張し、回転を速める。
今まで“ある理由”により手出しが出来ず出方を窺っていた杏那だったが、さすがに我慢の限界だった。
「おい、バカ！　余所見をするな！」
「え……？」
迫り来る巨大な水の球体。それに気付いた菓汐が声をあげるが、輝十は不覚にもその声を聞くまで駆け寄ってくる埜亞に意識が集中しており、全く気付かない状態にあった。
「なッ！」
さすがに避けきれない。
確実に近づいてくる球体が輝十の目を射た。一歩遅かった。今までより格段に大きいその球体を避けることは困難を極める。
「黒子ちゃん、その本を輝十達に向かって投げて！　早く！」
埜亞の背中を追った杏那が叫び、埜亞は言われるがまま本を思いっきり投げた。そして穴のでこぼこに躓いてそのまま転倒する。
瞬間――杏那の髪がふわりと浮いて逆立ち、目が茜色に光る。
球体が直撃したら絶対に無事では済まない。それでも抱きかかえている彼女だけは守らなければ……！
それは義務でも試練でも何でもない。輝十の男としての本能だった。こんな状況に立たされても尚、自分のことよりも腕の中の女の子の安否を心配する。それが座覇輝十であり、本当に女の子が好き

な（主に乳的な意味で）彼の一つの信念だった。
「……おまえ」
球体が能力で膨張して限界に到達したのか、水滴が漏れ、顔や全身を濡らす。
二人は同時に目を瞑り、覚悟を決めた。
「座覇くぅぅぅぅんッ！」
埜亞は地面に突っ伏したまま、宙を舞う本と今にも接触しそうな球体と輝十達を見て、泣き叫んだ。
「大丈夫。自分を信じてあげてよ」
「……え？」
突っ伏した埜亞の傍らに立つ杏那が呟き、その瞬間を睥睨する。
光と水の衝突。
その場にいる杏那以外の誰もが事態を飲み込めないまま、あまりの眩しさに瞳を閉じた。
「なんっ、なんだよこれ」
眩しさに眉間にしわを寄せたまま、細々とした目でソレを直視する。
顔を叩き付けるように飛んでくる水滴は決して痛くない。ただの水でしかなかった。
「どうして魔法陣が……」
菓汐は光の文字で描かれたソレを見て呟く。
ソレは埜亞の本からまるで立体で映写されたかのようだった。円に模様や見たことのない文字が刻まれたものが輝十達の盾となって球体と衝突し、その力をねじ曲げようとしている。
「ちっ、そんなものッ！」
「辞めとけって。ただの人間が魔法陣を発動出来るわけないだろ！」
更に球体に力を込めようと手を翳す男子生徒をもう一方の男子生徒が止め、無理矢理手を下ろさせる。
「うるさいな！　ここまで追い詰めたんだ！　最後まで……！」
「落ち着けよ。おまえも気付いてるだろ。引き際を考えろって。こ

のままだと俺達が追い詰められる側になる」
　駄々をこねる男子生徒を宥めるように、しかしきつく言い放つ。すぐにゲーム感覚で熱くなってしまう男子生徒と常に冷静な判断を下す男子生徒。二人はそれでバランスがとれていた。
　しかし手を翳した分の力を球体はしっかり受け取っており、自爆するかのように更に楕円状に膨張し、輝十達に迫る。もちろん魔法陣による二人を守る防壁もその進入を許さず、更に光が増す。
　力と壁の衝突。
　どちらも退かなければ、それはまるで磁石の反発しあう同じ極同士のように――
「危ない！」
　声を失って呆然とそれを眺めていた埜亞の腕を杏那が引っ張り、無理矢理立たせてその場から離れさせる。
　尻餅ついた埜亞が次の瞬間、目にしたのは……。
「ざ、座覇……くん……？　座覇くんッ！」
　反発しあう力が爆発し、爆風と共に爆発した球体の水が雨を降らせる。
　埜亞の視界が水滴で遮られる。何度も何度もレンズのない眼鏡をパーカーの袖で拭き、輝十達がさっきまでいたはずの場所に視線を送っていた。視界を歪ませるのが飛び散った水なのか涙なのか、埜亞自身もわかっていない。
　しかしさっきいたはずの場所に輝十達はおらず、そこには埜亞の本だけが閉じて地面に落ちていた。
　埜亞はどうすればいいかわからず混乱していた。その答えを求めるかのように自分を引っ張ってくれた杏那に目配せしようと傍らを見て、杏那の姿がないことに気付く。
　今さっき、この瞬間までいたはずなのに……どうして？
「！」
　そんな疑問は聞こえた声によって上書きされる。
「いってえ……さすがに死ぬかと思ったぜ」

輝十は上半身を起こし、ずきずきと痛む頭を抱えた。
「おい、大丈夫か？」
「ん……ああ、私は大丈夫だ」
菓汐は輝十の胸の上にいることに気付き、即座に体を離そうとするが、
「うぐっ……」
全身が軋むように痛むのと最初に負った左の臑の傷が裂けるように痛み、堪えきれずこもるように呻き声をあげた。
それでも擦り傷だらけの輝十に比べ、菓汐の傷は初期に負ったものより大して増えてはいない。
菓汐は不思議そうに輝十を見る。
「なぜ、私を助けた」
爆発の瞬間、自分を抱え込むようにして守ってくれた。爆風で転がる時も頭を抱えるようにして、身を挺してまで守ってくれている。そこまでしてもらうような仲でもなければ、義理もないはずだ。
菓汐には不思議でならなかった。
「なぜって言われてもなぁ。いてて……人助けるのに理由とかいるのか？」
全身の擦り傷を見ながら答える輝十。菓汐は目を丸くする。
「理由がない……だと？」
「ああ、別にねえよ。あるとしたら、ここが俺んちだってことと……」
言って、輝十は菓汐の胸元を指す。
「それ、だな。ああ、うん。実にそれだ。俺はそれの為に生きているようなものだからな」
うんうん、と深く頷きながら語る輝十。
輝十は菓汐の胸を指したつもりだったが、菓汐にとっては“自分”を指されたも同然で、
「なっ……どういう意味だ、それは」
頬を染めて、動揺を隠しきれずにいた。

「どういう意味って言われてもなぁ。本能なんじゃねえの？　俺にとっちゃ、当たり前すぎて意味なんて考えたことねえよ。芸術だもん。女神だもん。大好きなんだもん、それ」
「な、な、なにを言ってるんだ、おまえは。この変態。見るな、寄るな、触るな！」
菓汐はお尻歩きで輝十から必死に離れようとする。
「おい、おまえもしかして……」
足を引きずるようにしてお尻歩きする菓汐を見て、輝十は苦い顔をする。
痛むであろうことは一目瞭然だったが、それは歩けないほどだったらしい。喋れるほど元気だということとは裏腹に、思っていた以上に傷は深いらしい。
「座覇くん！　微灯さん！　大丈夫ですかっ！？」
その時。起き上がった輝十に気付き、埜亞が駆け寄ってくる。
「ああ、俺はなんとか大丈夫だ」
と、輝十と改めて近くで目が合い、埜亞ははっとして気まずくなり目を逸らした。
「あ、あの……その……」
待ってろ、と言われて待たずして部屋を飛び出し、来るな、と言われても無視して駆け寄っていった。埜亞はそのことに対し、輝十に怒られるのではないかと思っていた。もちろん覚悟の上だったが、いざ直面すると息が詰まるのである。
輝十は埜亞の様子を見るなり、それを感じ取っていた。
もちろん怒るつもりはなかったし、結果埜亞に助けられた形になる。それでも言わずにはいられなかった。
「俺、部屋で待っててって言ったよな」
埜亞はびくぅ！　と体を震わせ、強ばらせる。
やっぱり怒っているのだろう、と埜亞は思い、俯いて何も言えなくなってしまった。
輝十はそんな埜亞を見るなり、笑みを零しながら息づく。

「ま、すぐ戻るっつって戻らなかった俺も約束破ったわけだし。お互い様だな」
それを聞いた埜亞は顔をあげる。
「それに結果、埜亞ちゃんに助けられたわけだし。ありがとな」
埜亞はまさかお礼を言われるとは思わず、その言葉を噛みしめるように何度も瞬きをした。
「そ……そ、そんなっ！　わ、私はっ！　お礼を言われるようなことは、な、何もっ！」
「お礼を言われるようなことをしたかしてないかは俺が決めることだろ。いいんだよ、俺が助かったっつってんだからよ」
埜亞は顔が熱っぽくなるのを抑えることが出来ず、まるで沸騰するやかんのように蒸気が漏れ出していた。それを隠すかのように濡れて重くなったフードを被り、顔を隠す。
「は、はいですっ」
そして照れくさそうに、しかし込み上げてくる嬉しさに心を震わしながら、埜亞は小さく頷いた。

（8）

「そういえばあいつは？」
輝十は傷が疼くのを堪え、顔をしかめながら立ち上がって周囲を見回す。
「と、妬類くんなら……さっきまで隣にいて助けてくれたんですが……」
言って、埜亞も周囲を見回した。
気配で気づいていたらしい菓汐が、
「……あそこだ」
ぼそり、と呟いて二人に教える。
「なにやってんだ、あいつ。いいとこどりかよ」
座覇家の入口で、件の男子生徒二人と向き合っていた。
「妬類くん達は、な、何を話してるんでしょう……？」
輝十と埜亞からすれば穏便に話し合いでもしているかのように見えたが、それが決して穏やかなものじゃないことに菓汐は気付いていた。

杏那は爆風が吹き荒れる中を平然と歩み、油断しているであろう男子生徒二人の元へ向かっていた。
油断していたのは水を操っていた方であり、もう一方の男子生徒の冷静な判断は決して間違ってはいなかったのだ。
「……まずい」
「なにがまずいの？」
男子生徒は呟き、求めていない返答が爆風の中から聞こえたことに怯える。
だから引き際を考えろって言ったんだよ、と男子生徒は思っていた。感情的になりやすい相方をもっと自分がコントロールするべきだったと後悔する。

茜色の瞳と炎を宿したかのような紅い髪――妬類杏那を知らないはずがなかった。
微灯菓汐が逃げ込んだ先が人間の住み家で、しかもそこに彼がいたなんてなんとも不運だ。
男子生徒は答えず、恐怖を抑え込んで自我を保ち、正面に向かい立つ杏那に視線をくれる。
彼がどういう人物であるかは、同じ悪魔である限り知らないはずがない。それは水を操っていた彼もそうだったが、彼は男子生徒よりも考え方が若く浅はかだった。
ただの下級悪魔である自分達が相手にしていい相手ではない、と本能が悟っている。
杏那は笑みを消し、鋭い視線を目の前の男子生徒二人に突きつけた。その時点で同じ高校生だというのに箔が違う。
「ね、ここどこかわかってる？」
有無を言わせない圧倒的オーラを放ちながら、しかし落ち着いた声色で問いかける。
答えない男子生徒二人を追い込むように、
「学園敷地内以外での能力の発動は、やむを得ない場合を除いて禁止されているはず……だよねぇ？」
口角をあげて問いかけるが、目が全く笑っていなかった。
「……あ、ああ」
このまま無言を続けていても同じことだろう、と判断し、男子生徒は息を飲んで答える。
「そう。だったら……」
杏那は一歩歩み出て、男子生徒二人との距離と縮める。
それだけで情けないことに声を漏らしてしまいそうになった。余裕を貫こうとしている彼と違い、男子生徒はあくまで冷静にこの状況を分析しているのだ。
どう考えてもやばいだろう、と。
杏那は無表情のまま男子生徒二人を見下すような冷めた目で見つ

め、
「この制服を着ている意味、わかってる……よねぇ？」
男子生徒の胸を人差し指でとんとん、と突く。
「……」
男子生徒は答えない。しかしそれは無言の返事でもあった。
栗子学園の制服を着るということは栗子学園の生徒であると共に“人間社会への介入を承知した”ということでもある。ゆえに人間に使役される覚悟もしかり、人間社会へ溶け込んでいく決意を終えた者ということになる。
もちろんそれが表面上でしかない輩も多いことは、杏那も他の淫魔も学校側も承知の事実だ。
男子生徒が杏那から目を逸らす傍らで、水を操っていた彼が拳を強く握り締め、唇を噛みしめる。
「俺は納得してない！　なんで人間なんかに……」
そして目の前の杏那に訴えかけるかのように言い放った。
「バカ、やめろ」
男子生徒は彼の腕を引っ張り、それ以上余計なことを言わないように促す。
その間も杏那の表情は全く変化しない。冷め切った凍るような無の表情のまま、男子生徒二人を見据えている。
そして途端に動き出し、水を操っていた彼の胸倉を掴んで引き寄せた。
「そんなに嫌なら脱げば？　この制服」
杏那の瞳に輝きが灯っているのに気付いた男子生徒は助けるように間に割って入り、
「わかってる、わかってるんだよ、頭では！」
そして悔しそうに顔を歪ませ、俯き、歯軋りする。
「わかってるんだ……」
消えゆく声で、そう呟いた。
時代と共に退化していく悪魔を脅かすのは人間だ。いつしか立場

は逆転し始めている。上級悪魔ならまだしも自分達のような下級悪魔が生き残る道は、賢く選ぶ必要があるのだ。
それでも自分達は悪魔で、醜くも誇りを失いたくはないのだろう。

不思議そうにその様子を遠くから見つめている輝十は、
「なぁ、被害者である俺やこいつ抜きで話進めるってどうなんだ？」
おいしいところを持っていかれたのがよほど気にくわないのだろう。口を尖らせてぶつぶつ愚痴る。
「は、話し合いはどうなったんでしょう……」
埜亞は不安そうに杏那達を眺めている。
唯一事態が掴めている菓汐はそんな二人を横目に、独り言のように、しかし大きな声で呟いた。
「……学園敷地内以外での能力の発動は、やむを得ない場合を除いて禁止されている」
「そうなのか！？」「そうなんですか！？」
輝十と埜亞の声が重なり、二人の視線が菓汐に注がれる。
暑苦しい視線が同時に訪れ、菓汐はめんどくさそうにしながらも話を続ける。
「ああ。学園の敷地であれば結界が張ってある分、ある程度は許されてるがな」
「不覚でした。そんなことも頭に入れていないだなんて……勉強不足です、反省します」
埜亞は自分の額をぺちぺち叩きながら、悔しそうな顔をする。
「結界って……んなもんどうやって張り巡らせてんだ？」
「おまえ達が昼休みいつもいるだろうが」
埜亞が目をくわっと開ききって、四つん這いで菓汐に顔を近づける。
「屋上！　もしかして……石碑ですかっ！？」
近づいてくる埜亞の顔から身を離しながら、菓汐は頷く。
「石碑を中心に学園敷地内をすっぽり囲んでる。言わば悪魔の電波

塔のようなもの。石碑の近くは能力が最小限に引き下げられるのもあって悪魔は好んで寄りつかない。人間で言う嫌悪感を抱いたり、気分が悪くなったり、気持ちのいいものではないからな」
淡々と語る菓汐に目をきらきら輝かせて尊敬の眼差しを送る埜亞。
「すごいです！　微灯さん、尊敬です！　なんでそんなに詳しいんですかっ！？」
「なんでって……別に」
菓汐は目を逸らし、口を閉ざしてしまう。
そんな二人の会話を聞きながら再び杏那に視線を戻した輝十は、嫌な予感を感じていた。
急に風向きが変わったような……。
冷たい風が頬を撫で、その微々たる変化に何故か胸騒ぎがしていた。

杏那は水を操っていた彼の胸倉を離し、目を細める。
「これがあんたらの意志なのか誰かの意志なのか知らないけど、言っておいてよ。俺の周りに手を出……」
と、言いかけた途端――
ゴオオオオオ、というまるで台風が突然訪れたかのような暴風音が聞こえ、叩き付けるような風が杏那達、そして離れたところにいる輝十達をも包み込む。
その時、輝十は思う。嫌な予感は当たったんじゃないか？　と。
風が弱まり目が開けられる程度になった時、ドンッ！　という衝撃音が鳴り響き、グワシャアァ……という何かが崩壊していく音が聞こえた。
「……なにしてくれちゃってるわけ？」
その場にいる誰もが音の元凶に視線をくれる。
そこには拳を前に突き出したままの聖花の姿があった。
「いやいやいやいや！　なにしてくれちゃってるのはこっちの台詞だろ！」

ただでさえ庭が大変なことになってるっつーのに、なんで壁まで壊すんだよわけわかんねえよちゃんと玄関からこいよ！

杏那は聖花を見るなり、心底呆れた顔をする。

「私だけクラス違うからってェ……仲間はずれなわけ！？　屋上行ったら既にいないし、輝十くんの家に集まるのだって私だけ呼ばれてないし、輝十くんの危険を感じてきて見ればこんなことになってるしぃ……」

再び風が吹き荒れ、暴風音と共に物凄い殺気が放たれる。

杏那とは違う意味で「なんかやばいのきた……」と男子生徒二人は思わずにはいられなかった。

（9）

「おい」
杏那はじと目で聖花に声をかけるが、全く聞く耳を持っておらず、風を纏ったままつかつかと男子生徒二人に歩み寄る。
聖花はオフショルダーにミニスカートという私服姿で考え無しに能力を発動させており、スカートの中が丸見え状態になっている。
「……なにしてくれちゃってんのよ、おまえら。あん？」
そして男子生徒二人の胸倉を同時に掴み、自分の方に引き寄せた。
「それはこっちの台詞だ。俺達は壁までは壊していない」
男子生徒は息苦しそうにしながらも壁を指差す。
「細かいことはどうでもいいのよ！」
「いやよくないでしょ……」
杏那は聖花の肩に手を置き、止めに入るが、
「なによ、あんた邪魔するわけ？」
キッと睨み付ける。
杏那はめんどくさそうに頭を抱えて息を漏らした。学園敷地内以外での能力の発動は禁止されている、と今話したばかりだというのに。
「目的はなに？　言いなさい。輝十くんの貞操だって言ったらこの場でぶっ殺すけど」
髪が逆立ち、スカートはひらひらと舞って下着を見せてくれている。聖花は完全に頭に血が上っている状態だ。
「おいって！」
薄い水色の瞳が完全に輝きを灯しており、さすがの杏那も聖花の腕を掴んで止めに入る。
杏那に手を掴まれて力が緩んだ一瞬の隙をつき、男子生徒はすり抜け、水を操っていた彼の首根っこを掴んで屋根に飛び上がった。
「んぐっ！　なんでそこ掴むんだよ！」

「我慢しろ。逃げるなら今しかない」
屋根から地上に目をやり、微灯菓汐の姿を発見する。
「……面倒なことになったな」
「ふん。なに言ってんだよ。最初から面倒だろ？　すべてがな」
水を操っていた彼は苦しかったらしい首を触りながら、地上を睨み付けた。
「ちょ、待ちなさい！　まだ話が終わって……！」
今にも追いかけて飛び出しそうな聖花の腕を杏那がきつく引っ張る。
「離しなさいよこの男女変態悪魔の恥！」
「落ち着きなって。追ってどうなるんだよ。今はそれより先にやることがあるでしょ」
杏那は顎をしゃくり、怪我をしている輝十達や悲惨な庭の状況を冷静に目をやるように指示した。
聖花は逃げていく男子生徒二人の背中を見つめて、悔しそうに唇を噛みしめた。
自分がこの場に呼ばれていなかった悔しさと、そんな時に起きてしまったこの事態に、聖花は自分を抑えることが出来なかった。
握り締める拳に力がこもり、まるで吸い寄せられるかのように風が拳を取り囲んでいく。
「……別にあんたを除け者にしたわけじゃない。たまたま今日の話が出た昼休みにあんたがいなかっただけだよ」
「なにその余裕の発言。ちょーむかつくんですけど」
せっかくフォローしてやったというのに、相変わらず素直じゃない彼女の発言に苛立ちながらも、
「輝十のところに行ってあげたら？　ま、俺はあんたには来て欲しくなかったんだけどねぇ」
ここは彼女の気持ちを汲み取って、あえて合わせてやる。
「言われなくても行くわよ、うるさいわね。私だってあんたにはいて欲しくないわよ！」

鼻息を荒くして地団駄を踏み、輝十の元へ向かっていく聖花。その怒っている後ろ姿を見て、どっと疲れが襲ってきた杏那は一歩遅れて輝十の元へ向かった。

「だーりん！　ちょっと、やだ、傷だらけじゃない！　大丈夫？　どこが痛いの？　私がどこでも全部ねっちょり舐めてあげるから言ってっ！」

「いや舐めなくていいし、抱きつかなくてもいいし、だーりんじゃねえ……」

聖花は輝十の元へ行くなり、輝十に飛びついて抱きしめた。

「一体どうしてこんなことに……」

「それはこっちが聞きてえよ。そして頬すりすりしてくんな！」

聖花は真顔で問いながら、輝十の頬に自分の頬をくっつけてすりすりする。

「すりすり……」

それをじっと見ている埜亞に、聖花は勝ち誇った笑みを向けた。

「だーもう！　離れろ！　そしてどうすんだよこの壁……庭に加えて壁まで吹っ飛んでもう家しか残ってねえじゃねえか……」

突き放された聖花は腕を組んで髪をいじりながら、

「これぐらいなら全然大丈夫だから安心して、だーりん。そうよね、妬類杏那」

杏那を横目に話を振る。

「俺にやらせる気だよね、あんた。庭は修復するけど、壁は自分でやりなよ。むしろやれ」

聖花は毛先を指先にくるくる巻き付けて弄びながら舌打ちする。

そんなやりとりを交わしている二人を見て、

「あれ、なんでおまえ男に戻ってんだ？　部屋を飛び出すギリギリまで食ってたくせに」

杏那が男型に戻っていることに気付き、輝十が問いかけた。

「俺が何もせずに見てただけとでも思ってるのかな？」

にこにこしながら言うが、目が完全に笑っていない。
「だっておまえいいとこどりしようとしてただけじゃねえか」
「あのねぇ……輝十達を守った魔法陣を発動させたのは誰だと思ってるの」
その言葉にはっとなった埜亞が口を挟む。
「もしかしてあれが発動したのって妬類くんのっ……！」
杏那は埜亞に得意げに頷いて見せた。
「そ。俺が力を注いだから魔法陣が発動したんだよ。黒子ちゃんの魔法陣なら大丈夫だろうと思ってたし。あれ自分で組んだんでしょ？」
埜亞は褒められて、照れくさそうに頬を染める。
「はいっ！　術式は全部オリジナルです。だからあんなに綺麗に発動するとは思わなくて……でも結果、座覇くん達の助けになれて本当によかったですっ！」
両拳を上下に振りながら興奮気味で言う埜亞。
「そうだったのか。ん？　つーことは……」
さっき微灯さんが言っていた。学園敷地内以外での能力の発動は禁止だと。つまりこいつは、そして聖花も、禁止だとわかっていて能力を使ってくれたということになる。
「どうしたのさ、急に考え込んで」
杏那の声でその思考は一旦ぶった切られた。
「あ、いや……と、とにかく！　怪我の手当をしないとな。とりあえず家に入るか」
輝十は菓汐に手を差し伸べるが、手を弾き飛ばされてしまった。
「構うな。大した怪我じゃない」
誰が見ても大した怪我にしか見えず、特に聖花はその態度が気にくわなかったようで、
「助けてもらっといてなにその態度。そんな強がってられる身分なの、あんた。元はといえばあんたが原因でこうなったんでしょ？　それが構うなですって？　それ以上言うなら抉るわよ、その傷」

淡々とした声色で菓汐の心の傷を抉るような現実を突きつけていく。
返す言葉が見つからない菓汐は悔しそうな顔で口を噤み、俯いた。
「そんな怒るなよ……ま、庭がこうなったのはさすがに驚いたけど。とにかく詳しくは家の中で話そうぜ」
言って、輝十は菓汐の了承を得ず、抱きかかえようとする。
「なっ！　ちょ、ちょっと待って！　だーりん！　お、重いでしょ？　ええそうだわ、そんなでかい女なんかだーりんにとっちゃ重いはずよ！　そういうのは別に妬類杏那に任せれば……」
輝十よりも背の高い菓汐をお姫様抱っこしたことが聖花は許せなかったようで、何か理由をつけて下ろさせようとするが、
「別にこんぐらい平気だっつーの。俺だって男なんだからな、一応」
輝十にとっては女より身長が低いことを小馬鹿にされているような気がして、決して軽いわけではなかったが、ここでひいたら負けだと思っていた。
「バ、バカ！　離せ！　見るな、寄るな、触るなあああああッ！」
「そ、そうよ、だーりん！　こいつの意志を尊重してあげなきゃ！」
「なんでそこは同意すんだよ……」
意地でも輝十の腕から菓汐を下ろさせたい聖花だったが、輝十は相手にせず、抱き上げたまま窓から家に入っていく。
「私も抱っこされたいです、って言ってみたら？　黒子ちゃん」
その勢いに圧倒され、ただの傍観者になっている埜亞に杏那が嫌味な笑みを浮かべながら突っ込む。
「ふえぇっ！？　そ、それもっ、お友達同士なら当たり前なのでしょうか！？　でしたら……ぜ、ぜひっ、されたいです……！」
彼女の場合、それを本気で言っているので笑えない。そして下手に突っ込むことも出来ない。
うーん、どこかで違うねじを無理矢理はめ込んでしまったようだ……、と杏那は目を閉じて眉間にしわを寄せた。

菓汐を自分の部屋に運ぶなり、輝十は救急箱を探しに一旦部屋を出た。その間に杏那と聖花は能力を駆使し、庭と壁の修復を行っている。埜亞はまるで魔法でも使っているかのように元通りになっていく様に釘付けになって観察していた。
「あー濡れタオルとか持ってきた方がよさそうだな。ちょっと待ててくれ」
泥だらけの菓汐を見て、救急箱を持ってきた輝十は慌ただしく部屋を出て、今度はタオルを取りに行く。
「べ、別にそんな……！」
と、菓汐は言いかけたが輝十は最後まで聞かずに部屋を出る。
そしてすぐ戻ってきて、濡れタオルを差し出した。
「まだ寒いだろうから一応お湯で濡らしたんだけど」
「……すまない」
菓汐は本当に申し訳なさそうに、眉尻を下げてタオルを受け取った。
そして汚れた足を拭きながら、救急箱を漁っている輝十に目を向ける。
「おまえだって傷だらけじゃないか。私のことなんか後回しでいいのに……」
「んまぁ、別に俺のは大したことねえし」
輝十はあった！　と声を漏らし、消毒液を取り出す。
「しかし赤の他人の私なんかにこんなよくしてくれる義理など……」
「いいじゃん別に。クラスメイトだろ。つーか、もう人んちにあがってんだから赤の他人ってわけじゃねえだろうよ」
むしろ輝十にとっては、どうしてそこまで自分を卑下するのか理解出来なかった。いつも独りでいるところから考えるに、きっと何か理由があるんだろう。
輝十が脱脂綿を消毒液で濡らし、それを菓汐の傷口に近づけようとした時、
「それじゃ効果ないよ」

丁度修復が終わったのだろう。三人一緒に部屋へ戻ってきた。修復の光景を一部始終見ていた埜亞は興奮気味で、完全にキラキラモードに突入していたが、その傍らにいる杏那と聖花は厳しい眼差しを菓汐の傷口に向けていた。

「え？　なんで？　消毒しなきゃだろ、一応」

確かに血が滲み出ていて傷は深い。これは縫う可能性も大いにありえる。それでも今出来る応急手当は、消毒と出血を止めることぐらいだ。

「そうね、きっと消毒液では意味がないわ」

珍しく杏那に加担するようなことを言う聖花。

「ああ、もしかしてこういう場合は流水の方がいいのか？」

事態が飲み込めていない輝十は純粋に問いかける。その姿を目の前で見ていた菓汐は気まずそうに目を伏せた。

「違うの、だーりん。悪魔が悪魔につけられた傷はそう簡単には修復しないの」

「悪魔が、悪魔に、つけられた……？」

輝十は傷口から視線を菓汐に移す。菓汐は何も言わず、ただ目を逸らしていた。

（10）

「黒子ちゃん、聖水作れる？」
杏那の突然の問いに埜亞は、
「えっ！？　あ、えっと、作ったことはないです。作り方はなんとなく……で、でも……」
埜亞は菓汐と杏那を交互に見ながら困った顔をする。
消毒液が効かない、悪魔の傷が治りにくい、それだけわかれば埜亞には十分この状況が理解出来る。ゆえに、聖水が不必要どころかタブーであろうこともわかるのだ。
「悪魔に聖水なんかぶっかけたら大変なことになるわよね」
埜亞が言いたいであろうことを聖花が代わりに口にし、
「その点は大丈夫だから安心しなさい。そうでしょ、灰色女」
腕を組んだまま、傲然とした態度で菓汐に話を振る。
状況が未だに理解出来ていない輝十の視線が菓汐を射貫く。菓汐は自分に注がれる輝十の視線、そして既に“その事実”を知っているであろう三人の視線を一気に受け、逃げ道をなくしていた。
なにより身を挺して自分なんかを守ってくれた彼の視線を受け、逃れるなど失礼に値するのではないか、と思ったのである。
だから彼女は口にする。絶対に言いたくない、ソレを。
「……私はミックスなんだ」
菓汐は制服を摘んで俯く。
「ミックス？」
輝十の復唱に、菓汐は俯いたまま答える。
「人間と悪魔の混合種のことだ。淫魔と人間のハーフというやつになる」
それを聞いた輝十は手の平を拳で叩き、
「なるほど！　つまり半分は人間だから聖水が大丈夫ってわけか！
でも半分人間なんだから消毒液効いたっていいじゃねえかよ。な

ぁ？」
「なぁ？　と言われてもな……」
消毒液で濡らした脱脂綿を持ったまま熱く話す輝十の対応に困る菓汐。
「半分悪魔ゆえに悪魔の傷が治りにくく、半分人間ゆえに聖水を使うことが出来る。普通の擦り傷なら消毒液でも効果は得られますが、悪魔の傷だから効果が得られない。そういうことですねっ！」
「ま、そういうこと」
埜亞のまとめに杏那が頷いて見せた。
「わかりましたっ！　作ったことないですが、頑張って聖水作ってみますっ！」
胸の前で両拳を握り、目を輝かせて言う埜亞。それを見た杏那が聖花に目配せし、
「はぁ！？　あんたもしかして……」
その視線の意味に気付いたらしい聖花があからさかに嫌な顔をして声をあげる。
「聖水の作り方ならそこのスクブスがよーく知ってると思うから」
にっこり微笑んで見せる杏那に聖花が殺意を宿した瞳で睨み付けるが、
「そっか、なら二人にお願いするわ」
輝十にお願いされては断るわけにもいかず……。
「だーりんがそう言うなら……」
がっくり肩を落とし、埜亞を連れて部屋を出ていった。
菓汐はその光景を黙って眺め、執拗に瞬きをする。彼女は驚きを隠せないでいた。
自分なんかの為にわざわざ聖水を作ってくれるという。しかも悪魔がそれを手助けする……だと？
悪魔からすれば有害でしかない聖水を作る協力をするのだ。菓汐には理解し難かった。
なによりミックスの自分にこんなよくしてくれる。

「ん？　ああ、大丈夫だって。あいつらああ見えて結構仲良いと思うし」
菓汐の疑問に満ちあふれた視線に気付いた輝十が見当違いな回答をする。
その表情には、差別も軽蔑も侮蔑もない。
そういう目で見られることが多かった自分だからこそ、それがはっきりとわかるのだ。
「どうして……」
菓汐は思わず呟いてしまう。
「どうしてこんな自分なんかに……自分は人間でも悪魔でもない、どちら側にも所属出来ない、そんな失敗作なのに……」
輝十は俯いてしまった彼女に、あっけらかんとして言い放つ。
「あのなぁ、俺にとっちゃ人間だろーが悪魔だろーがミックスだろーが大差ねえんだよ」
「……大差、ない？」
輝十はその場で胡座をかき、腕を組み、そして目を閉じて眉間にしわを寄せる。
「いいか、重要なのはそんなことじゃない」
娘を叱る厳格な父親のような雰囲気で、菓汐に言葉をぶつける。
「おっぱいがあるか、ないか。それだけだ」
「……」
思考回路がストップし、時間が止まったかのように理解に苦しんでいる菓汐の手助けをするかのように、
「輝十のおっぱいへの執着心は悪魔をも凌駕しているからねぇ。普通の思考ではないんだよー」
小声で補足する。
「だが待て。勘違いして欲しくはない。おっぱいがあれば男でもいいか？　否！　だめである。もちろんオカマも却下だ。天然物につきる！」
もはや何の話をされているのかもわからない菓汐の時間は未だに

止まったままである。
「ま、こういう奴だから。深く気にしなくていんじゃない？」
輝十のおっぱい語りが始まり、その傍らで杏那が菓汐に話しかけることで再び止まった時間を進めた。
その時、丁度聖水を作り終えた二人が部屋に戻ってきた。
「出来ましたっ！　使って下さいっ！」
初めて作った聖水に、まるで初めてのお使いを終えた子供のような無邪気な表情を浮かべる埜亞。
開いたままの分厚い本の上に小瓶が乗っかっている。見た目はただの水だ。
輝十はそれを受け取り、タオルで抑えながら傷口にかけていく。
「ひやぁっ、う、ぐっ……」
傷口から湯気のようなものが出る。見るだけで痛そうな光景だ。
「もう少し我慢してくれ」
輝十は傷口に満遍なく聖水をかけていく。
「ここで出来るのはここまでだそうです。明日保健室に行って下さいね」
「ああ、そうする。本当にすまない」
聖水での消毒が終わり、輝十と交代して埜亞が包帯を巻いていく。
「ありがとう」
「い、いえっ！　そ、そんなっ……！」
礼を言われ、埜亞は顔を真っ赤にしてフードを被って顔を隠す。
人に礼を言われることに慣れていない埜亞は気恥ずかしさと同時に、今まで感じたことのない達成感と喜びで胸がいっぱいになっていた。
自分にも出来ることがある、そう思えるだけで彼女の顔は綻んでいく。
「で。結局なんだったのよ、あいつら」
落ち着いた雰囲気になったところで、聖花が輝十のベットに座って足を組み、本題を切り出す。

「そうだな。なんであいつらに追われてたんだ？」
それに乗っかって輝十も問う。
「……わからない」
「はぁ？　こんだけ派手にやられといてわからない？　あんたバカなの？」
立ち上がって文句を浴びせようとしている聖花を「まぁまぁ」と輝十が宥める。
「断言は出来ないんだ。ただ私はミックスだから……普段からこういうことがよくある」
「悪魔世界でのいじめみたいなものでしょうか……」
菓汐と同じ表情になりながら、埜亞が今にも消えそうな声で呟いた。
「人間嫌いな悪魔にとっては、半分人間の血をひいてるわけだから嫌がらせしてもおかしくはないねぇ」
「嫌がらせってレベルか？　庭吹っ飛んでたぞ……」
スケール違いすぎだろ……と若干引き気味の輝十。ちょっとやそっとじゃ死なないとは言え、あそこまでやることねえだろうよ。
「人間嫌いの悪魔にとっても、悪魔嫌いな人間にとっても、消えて欲しい存在には代わりがないものね」
ずばっと言い切る聖花。
「ああ、そうだ。わかっている。そんな奴は沢山いる。その中でも……」
「その中でも？」
語尾を聞き逃さなかった杏那が問いかけるが、
「いや、私の勘違いかもしれない。だからこれ以上は言わせないで欲しい」
答えることを拒み、その場にいる誰もがそれ以上問いただそうとはしなかった。
「ふん、くだらないわね。ほんと下級脳の考えそうなことだわ。そんな無駄な争い、傷を増やすだけじゃない。バッカじゃないの」

「どこぞのスクブスさんは人間大好きだから問題ないもんねぇ」
「そうよ、大好……はぁ！？　ぜんっぜん好きなんかじゃないしっ！」
「全身見てから言ったらぁ？　そういうの」
今時の若者の服装に身を包んだ聖花を見ながら、杏那が肩をすくめる。
「ま、俺らにとっちゃ微灯さんがミックスだろうとなんだろうと関係ないってことだな」
「そ、そうですよっ！　はっ、灰色の制服だって、か、かわいいですし！」
輝十に続いて、埜亞も声を張り上げる。
「おまえ達……」
菓汐は今までに感じたことのないモノを胸の奥に感じていた。それはふつふつと沸き上がってきて、しかし心地が良くて温かい。体すべてをすっぽり包んでくれるようだった。
「お、もうこんな時間か」
杏那と聖花が言い合いをし、埜亞が菓汐の手を握って熱く何かを語りかけている、そんな傍ら。輝十がふと時計を見ると既に六時を指していた。
「微灯さん、今日泊まってったら？　その足じゃ帰るの大変だろ。もう外も暗くなってきたし」
輝十のそのなにげない一言にその場が凍り付いた。
「と、泊まって、いった、ら？」
それに一番に反応を示したのは聖花である。
「も、も、もし、かして、お、お泊まり会ですか……？」
次にややずれた反応を示したのは埜亞である。
「ここまで堂々と女の子を誘う童貞を俺は初めて見たよ……」
そして最後に杏那が目を白黒させていた。
「え、なんなのおまえら。その反応」
特に深い意味もなく、怪我をしていて大変だろうという好意だけ

で誘ったのだが、他の三人は違う意味に捉えていたようで。
「だめええええ！　絶対にだめええええ！」
聖花が絶叫し、
「ず、ずるいですぅ……お、お泊まり会……」
埜亞は自分も参加したいと言わんばかりの意思表明をし、
「で、あんた泊まるの？　どうするの？」
その傍らで冷静に杏那が菓汐に答えを要求する。
「な、なっ……」
三人の勢いに圧倒され、菓汐は完全にひいていた。
「男の部屋に泊まるってことはどういうことかわかるよねぇ？　あんた、半分スクブスなんでしょ？」
杏那がにやにやしながら菓汐に言い迫ると、
「バッ、バカ！　ふ、ふざけるな！　そんなこと……ない！　絶対にない！　私は泊まらん！　泊まらんぞ！」
顔を紅潮させ、興奮して否定する菓汐。それを眺めながら、
「半分人間の女の子なのは本当みたいだねぇ。で、輝十はどうするのさぁ？」
笑いながら輝十の肩に手を置く。
「だーりん！　ま、まさか本当に泊めないわよねぇっ！？」
「お、お泊まり会するんですかっ！？」
一気に三人に問い詰められ、
「だーもう！　散れ！　おまえら一旦散りやがれ！」
杏那の手を払いのけ、聖花と埜亞にも離れるように手の平をしっしっと振って見せた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7962w/

俺の不幸は蜜の味

2011年12月11日02時58分発行